

アラン

思想と年齢
(上)

高村 昌憲 訳

序

私は、ホメロスの本の中で人類と同じ位に古いプロテウスの話を、何度も読みました。そして海藻の匂いや、まるでアザラシのように砂に眠っているような岩によって、恐らく私自身に蘇ったものを、何も無い海辺で繰返し良く読んでいました。人が何時もやるように、しかし秘密の法則に従ってこの奇妙な話を何も変えないようにも気を付けて、同じ事柄によるその話に我慢すると、まるで全てが本当のことで如何なる間違いも無いようでした。私は従ってアザラシの群や、アザラシの皮膚の下で眠るギリシアの英雄たちを想像しましたが、海の匂いで一杯です。しかし、プロテウスは決して現れませんでした。英雄たちが如何にしてプロテウスを捕らえたのか、そして如何にしてプロテウスがライオンや豹や木や火や水の前で全ての術策を見させたのかを、私は語りました。私はあらゆる色彩と形をとっている水を眼の前で手にしました。そして何も残しませんでしたが、鋭い注意力によって私たちがいるが儘にその水を知覚するや否や、どんな真実も同じ様に私たちに言いました。私は偉大な思想を身に付けて、この話によって目覚めました。ところが、全てを変えて大変に表現力のある水のイメージに渦を巻きながら、この世を大変豊かにもしていました。

私は何を尋ねていたのでしょうか。ギリシアの英雄のように私は出発した場所への帰還するのではなく、辿って行く道もありません。私がそこに見出すのは完全な不幸であり、アイギストス(1)、クリュタイムネストラ(2)、オレステス(3)、そしてアガ멤ノン(4)の墓です。未来は何時も余りに早くやって来ます。しかし、長い旅路から帰還しながら、失われた長い時間の後で、私は精神を殺しました。そして何時も人を殺しているピラト(5)のように尋ねました。「真理とは何でしょうか」。ところが、海のプロテウスは真の姿に戻っていましたが、それは偽りでもあります。そして、私は彼の裏表のある二重の答えを良く聞きました。「真理は今存在する全てのものである。今あるもの全てが真実である。そして、今無いものは何ものでもない。お前はこの考えから抜け出さないだろう。お前が求めるもの全てをお前は持っているのだ。お前が持っていないものは何ものでもない。ちよろちよろ流れる僅かな水も、あらゆる流れも、お前が見る全ての波の揺れも真実である時、それらの一つ一つが永遠であるのは、真実であるものが真実でないことは一度もないからであり、真実であるものは常に真実であるからだ」とプロテウスは言いました。

「真理は無い。全ては絶えず流れるからだ。この浜辺と同じだ。砂はこれらの岩から作られ、もっとゆっくりしているけれども水のように流れている。間違っただんな思考も事物に合うことは決してない。しかし、絶対に間違っただんなものでも、過去にあったけれども既に今はもう無い。お前は何歳であるのか、本当の年齢しか考えられない。その思考は真実であるから、既に間違っただんなもの。同様に、全ての思考が自ら否定し拒絶するのは、自分の存在であるが自分自身の形状を絶えず否定するこの水の活動としてのイメージであるからだ」と彼は言いました。

かくして海は歌っていました。そして、プロテウスは彼が言うとおりに真実でしたが、常に別の顔も確認します。そして私を騙そうとしてもそんな時は決して私を騙しませんでした。それは私が尋ねたからで、言ったのは彼自身だったからです。（完）

（1）アイギストスは、ギリシア神話でミュケナイの王。トロイア戦争から帰ったアガ멤ノンを殺すが、その子オレステスに殺される。

（2）クリュタイムネストラは、同じくアガ멤ノンの妻。アイギネトスと結び夫を殺すが、息子オレステスに殺される。

（3）オレステスは、同じくミュケナイ王のアガ멤ノンの子。父を殺した母クリュタイムネストラとその情夫アイギストスを姉エレクトラと協力して殺す。

（4）アガ멤ノンは、同じくトロイア戦争のギリシアの総帥で、女神アルミテスの怒りに触れ、娘イフィゲネイアを犠牲にして、妻クリュタイムネストラの恨みを買って殺される。

（5）ピラト（一世紀）は、ユダヤ、サマリア、イドマヤを治めたローマ総督。ユダヤ人の抵抗運動を弾圧し、イエスの処刑を許した。

第一部 眠り

第一章 夜

「夜だった。そして、月が澄んだ静かな空の小さな星々の間で輝いていた」。夜のこの祈りの下にホラティウス(1)はネエールの誓いを思い起こさせました。些細なことです。しかし、闇の時間、狩りをしたりさせられる悲劇の時間は、人間にとって楽しい夢想の時間です。そして詩が情熱を解き、私たちの苦痛でさえある歌を創る間に、星々の教師たちや彼らが思い起こさせる過去の時を思考しに立ち去るために、その人間にとって周りの全てのことを忘れる時間であるのは素晴らしいことではないでしょうか。注目すべきこととは、その人間は遠くを見ることが出来ずに実際に夜しか、惑星の向こう側を見る事が出来ないことです。昼間は、如何なる不思議なものも無い明瞭な丸天井の様なものであるからです。従ってその人間は、近くの対象が視界から隠されていて聴覚が前方で全てを占めていて沈黙そのものが彼を動かすまさにその時に、彼が知ることの出来る最も遠い対象と最良の規則を示す瞬間にしか、遠くを見詰めませんでした。この対照は静かな夜の崇高さを生んでいますが、それは遠くを見ることであり大地から引き離された精神によるものです。だがその上更に、あらゆる動物の夜間の狩りによるものであり、私たちに激しい不安に陥れるに違いない空腹と恐怖が混じり合ったものによるのですが、それは出来ないことです。そうです、私たちには夜があらゆる事柄を中断しに来ている様に見えますが、同時に私たちのものであり、そして眠るか思考するかを選ばせた儘にする不安の時であるようにも見えます。侮辱と復讐の間では一夜を過ごせ、と諺は言っています。つまり激しい動物的な習性からの否定によって夜は奇跡的な力を持ちます。それにはこの不安な生活を保留すること、想像力を和らげること、急を要したり近いもの全てに一時的な停止を命じること、両眼を休めて精神の休息を最後に認めること、そして新鮮な息によって眠りに導く無感覚のようなものに私たちに注ぐことがあるからです。

ところで夜のこの平安は決して自然なものではありません。反対に長く敵であったと考える理由がありますし、今も常にそうですが、夜に備えて最初に買物をしましたが、それは空腹に備えることよりも、夜に備えて昔からやっていたことです。眠りには注意して下さい。眠りは空腹よりも大変な暴君です。お分かりの様に、その人は手中にするためだけで苦労しないで心の糧にする状態です。しかし、眠ることを彼から免除するものは何もありません。眠る時間を短縮するものも何もありません。それは私たちの誰もが決して供給出来ない、多分唯一の欲求です。その人が大変に強く大胆で、創意工夫に富んでいても、知覚は無くなるでしょう。従って防御も無く、人生の局外者になります。社会はそれ故に空腹よりも寧ろまさに恐怖の娘です。その証拠には空腹の最初の結果は、人々を集めることよりも寧ろまさに人々を分散させることであり、その人が決して通らなかつたどんな場所でも皆が探していると言えるでしょう。そこから毎朝目覚めるのは、出発したり旅に出たい気持ちです。朝はそれ故に人々が空腹を感じたり、自分だけのやり方で一人ひとりに働きかけます。しかし夜から彼らは、疲れと恐怖を感じます。兎に角、まさに眠ることが恐怖であり、そして人々は共通の法則を愛します。

恐らく私たちの諸制度は、空腹とか渴きとか愛の娘と言うよりも寧ろ、夜の娘であると言わなければなりません。多分、この人間世界を説明したかった人々は、摘むこと、狩をすること、釣りをすること、種を蒔くこと、取り入れることの仕事で第一に述べた時、私たちの欲求の自然な順番を知らなかったのです。徹夜すること、見張ること、夜警の順番とパトロールと最後には各人の役割を決めることである別の仕事を、各人の役割に任命するのを忘れています。前者の仕事は皆にとって一般的ですが、時期が分割されます。ところが警戒のこの分割は、日中の間しか有効ではありません。勿論、夜の間も少しでも用心を想定したくなると、その警戒は必要になります。もしもそれに倣って人間の問題の中で、最初の役割に夜の見張人を置いたなら、最初の制度は政治的になり、そして政治的なものの中には軍人たちがいて、結局のところ軍人たちの間には防衛と監視があることに気付くでしょう。そこから何故、経済よりも勇気が評価され、そして勇気よりも更にもっと忠誠が評価されるのかが理解され得ることになるでしょう。

しかしながら、夜の美德が如何なるものかを探求するなら、先ずは忠誠は決して見出されません。寧ろ、秩序が見出されます。何故なら眠らずに注意深くして住める管理人などは決していないからです。従って忠誠心を持った英雄も、眠らないことを誓うことは決して出来ません。彼は多分そのことを最も屈辱的な経験によって知ります。それ故に忠誠は秩序を確認しなければなりません。監視のための見張りや、予め規則正しく行われる見張りのための秩序について理解して下さい。それらは社会そのものと同じ位に古いものであり、直ぐに抽象的な法律となって現れますが、持っているのは常に平等のためのしるしです。二人の人間から社会が出来ているとするなら、一人は猟師で、もう一人は鍛冶屋であるのは自然です。それは確かな事物と道具について、各人に数々の相違と確かな支配を創り出します。しかし二人のうち一人だけが何時も眠りの番人になることは決してあり得ません。その時の番人は不満である、と言うだけでは言い足りません。第一に、ぼうっとした半睡状態の番人になるでしょう。休息と、目覚めて見張る割当て部分が、全体として同じであることは恐らく最も古くからある法則です。更に、見張りについての平等があります。良く目覚めている子供も、眠っているヘラクレスを見張ることが出来ます。

真実の事柄を言う機会を失わないようにしましょう。この関係における力は、如何なる優位も与えません。力は眠る必要性から権威を失います。勿論、最も力があり、最も乱暴で、注意深く、疑い深く、恐れている人間も、幼年時代に戻らなければなりません。両眼を閉じて、守られて、守ってくれた人間を頼らなければなりません。子供に這入って行くこの弱さは未だ些細なことです。それは自己の放棄であり、自然が空腹や渴きと同様に余儀なく課していることの全ての放棄も又些細な自然な譲位ですが、眠る肉体の動作の中では大変に敏感です。眠るルイ十四世を考えることは殆ど出来ません。しかしその弱さは、ルイ十四世がその中で持つ観念と恐れに比べると些細なものです。最も優しいものは、最も怖いものになり得ます。あなたが言って仕舞ったことに注意すること、あなたが整理したことを思い出すこと、あなたが大切にしている思想を点検すること、そんなことをして何になるのでしょうか。あなたの思考が皆の考えになるために、あなたの周りにしるしを残したり話をしたりして何になるのでしょうか。あなたは程なく怠慢になるでしょう。そして、あなたの印象では周りのどんな暴君も、うとうとと微睡んでいるのでしよう。

そこから夜と共にやって来るのが平和です。昼間の眼は閉じます。それは美しく正しいものへ

の招待です。そして、確かに疲労は懷疑を終わりにします。しかしいずれにしても美しく正しくなければなりません。明日ではありません。眠りはゆっくりと接近して来て、私たちを押しします。プラトン学派の見方によるなら、一人ひとは使い尽くされませんし、あなたは悪者の中にあっても平穏でいなければなりません。そこから恐らく自分自身に許される状態とは、人は他人を許すことを仮定していることです。それが祈ることではないのでしょうか。両膝を曲げる動作も又疲労することであり、頭も低くなることにどうして気付かないのでしょうか。祈ることは疲労が来ることを感じるようになるでしょうし、全ての思考に夜が来ます。

祈りに行く我が娘よ、ご覧、夜が来た
あそこで金色の惑星が雲間を突き刺す

今は優しさが彼女を興奮させなければなりません。激昂については言うべきことが沢山あります。しかし、もし怒りも思い上がりも復讐も、一昼夜以上長く一人ひとりの人間に決して保持されないと気付くことで私たちにある生来の激しさも困難も公平に判断したいと思うなら、用心深くないのでしょうか。そうです、力による同じ過剰によって、同意、無私、幼年回帰、信頼回復、最終的な親孝行、全ての初体験、全ての日常体験が齎されます。従って一般的な夜は最後には私たちを打ち破ります。野心と欲望と逆上と獰猛さが決して欠けることがないこれらの強力な絵画においては、継続した間違った線しかないのです。歴史の半分は忘却されています。ホメロスにおける完成は、全ての夜がそこにあり、人が眠る夜もそこにあることです。そこからは確かに悲劇としての継続した規則正しさがあります。何故なら夜は神に捧げられ、一回は影を無駄に転がすかもしれないからですが、それは一回きりであり、二回ではありません。

私たちはここで、私たちの思想史に関する最も偉大な思想を保持していることを信じるべきです。何故なら夜を忘れるために何時も自然に行われるように、絶えず発展することが想像されるかもしれないからです。いや、そんなことは決してありません。確かに弛緩することがありますし、まさに一度ならずあります。断念することもありますし、まさに一度ならずあります。結末になることもありますし、まさに一度ならずあります。私たちの各思考は望んだり最早望まなかったりすること、強く主張したり最早主張しなかったりすること、執着したり投げやりになったりすることの周期的な変動を模倣することにも私は気付きます。そして恐らく私たちの最良の思考は、この自然の呼吸を最も良く模倣することです。かくして数々の愚かな思考におけるように最悪の思考において、私は眠ることを決して望まない自己への死刑執行人を再発見します。そして、この暴君は敢えて少しも眠りません。熟練中の熟練の人は、一定期間を置いて思考の中でも眠る術を心得ています。それは自分の力で思想を破ることです。この賭けにおいてはプラトンも決して一様ではないのです。（完）

（1）ホラティウス（前六五～前八）は、古代ローマの詩人で、『詩論』はボアローの翻訳でフランス古典劇に大きな影響を与えた。

第二章 眠る幸福

眠る幸福は、それに接近することでしか感じません。この欲求に至るのは多くの人々も至ることであり、それは眠りを非常良く感じる前に満足することを教えることです。食欲が空腹と同じでないことは知られています。同様に眠ることに大変積極的に同意することもありますし、それ以上に断固たる判断力によって傾聴を望むものも全てが排除されます。最も良く均衡のとれた精神は、外見上の賭けから引き下がる処まで可能に出来ます。そして一人の人間の思考は彼が望んでいたなら、十分にそして更に激しく興味を持っている多くのことを無関心に来ることより、先ずは次に来るものと対決するのであると私は思います。最も重要な思考さえも延期させる程の、魂の偉大さと同じ様なものがあります。しかし、それは些細なことどもの中で容易に延期することを適格に話す健康があります。誰かが言いました、「急を要する仕事なんて決してありません。急を要している人々がいるだけです」。急を要する問題は少しありますが、寧ろ実際は一つも無かったと宣言すべきです、と同様に言いましょう。そして用心して最初に行うこととは、熟考することが好きであるかどうかです。この種の行き違いはモンテニユにおいて醜聞になっていることです。しかし、その表現方法は非常に一般的であり信じられない位です。それは或る観念とか感情とか、あるいはスタンダードの表現に倣うなら、心の奥底へ流れることさえも眠らせて置くことです。従って、それは敢えて全ての人々に休みを与えるどうかの権力の時間であり、眠りと呼ばれたり、謂わば毛布の様に自己の上に広げられているものです。

もしも人間の肉体の構造がこの思考の構造と一致していなかったなら、私たちは二つになることでしょう。でも、私たちは決して二つではありません。如何なる幸福も場所が無いものはありません。そして、私が眠ることに幸福を感じるのも肉体の中です。もしも読者が幸福を良く望むなら、私は幾らかの下品な真理にも注意するように促します。ご存知の様に、欠伸をするのは心地良い証拠で、心配事がある時は決して出来ません。欠伸をすることは心配事が解決したからです。しかしパスカルがくしゃみについて言った様に、欠伸によって低次のものがどんな魂も占領して全く別種の結末になるのも明らかです。欠伸によって人は一瞬を生きることに関わります。実際には横隔膜の激しい呼びかけであり、肺に深く空気を入れて、大変良く言われている様に心の不安を和らげます。欠伸は退屈のしるしとも理解されますが、大変な間違いです。それでは私たちが気に入る処までには行きません。こう言って良ければ、それは一種の幸せな退屈であり、そこで関心を持ちたい何らかの外見に少しも興味を持たないために、まさに気楽になるからです。欠伸をすることは、行動することから自由になって思考することからも自由になることです。それはどんな姿勢も否定することであり、その姿勢は準備するものです。実際に欠伸をすることや緊張を緩めることは、防御や戦いの否定です。それは斬られたり刺されたりすることに身を晒すことです。最早自己の甲冑を作ることはありません。この側面からは完全に安全な自分自身を際立たせることです。

しかしここでは、それに関係している全ての観念に立ち戻らせるために、一つの回り道を作らなければなりません。どんなに困難な行為の中にも、そして作る術を良く知らないことにも、仲間たちの不安と自分に対する戦いである無益な動揺があります。私たちはここに怒りを覚え

すし、それに戻らなければならないでしょう。取入れするにしろ、ヴァイオリンを演奏するにしろ、踊るにしろ、申し分なく行わないためには短気になる人の名前を挙げるだけで十分です。如何なる修行期間であっても、困難なのは望むことしか行わないことにあります。行為は空中の鳥のように私たちの中を通り抜けて行きます。そしてかくして、まさに私たちは行為する術を知る時に行為するのでしょうか。しかし全ての筋肉を目覚めさせることにより、そして取分け私たちの不決断の思考により先ずは動揺が湧き上がりますが、その思考は先ず自然を信用することを知らないものです。肉体全体は打ちますし、手の上で全てを量ります。指による困難な行為は、歯を引き締める結果になります。胸部の筋肉は足と同時に努力しますし、走る人の息を切らせます。これらの困った行動からは自己や、それを望まなかったのに行うことへの恐れが生じますが、それは臆病であり、厭らしい感情であり、素早く怒りになります。反対に幸福な習慣はヘーゲルが言う様に、流体の自由自在な肉体に戻します。その様な行為は眠りに降下します。それらの行為の中に、もしも昔は困難であっても今は自由自在な力そのものを感じるだけであるなら、その力は最早そこで注意しなくなります。力は他の仕事に対しても自由であると自ら感じます。ところで、これと同じ流体のものは無為の中にあっても敏感です。何故なら無為が常に快適な状態であるとは、とんでもないからです。期待や、開始されても抑制された企てや、あちらこちらに飛びかかる注意力によって、肉体も自らの裡に飛びかかり、動き回り、別れますが、それらの全ての努力は私たちの如何なる存在も弱らせること、そして換気や洗濯や栄養に関する活動を妨げるために二倍の効果を持ちます。苛立ちは私たちをそこで再び待ち伏せています。同様にそれも全てを放擲したり、無為から休息までの大変に敏感なこの移行による組織体の内面的で、貴重な生活を優遇したりするための国王のような活動なのです。航跡の中の水夫の下着のように、かくしてどんな私たちの布地も横たわって広がり、潮風や海水と共に大きく親密に関係しています。

しかしもう一度、別の外観に従って事物を考察しなければなりません。全ての心配は追い払われ、全ての計画は延期されて、残された儘になっている不安は地球の収縮とか重力によるもので、それは何時も私たちを捕らえています。そこにいるのは絶えず私たちの敵であり、私たちの変わらない思考です。彼は二足動物の人間の足に従って、大変に注目すべき触覚という知覚を観察するための知識は私には十分です。彼は活動中にしろ休息中にしろ、落下から自分を守るために、謂わば彼自身の均衡に絶えず手で触り、そして密接な土台を調べます。それ故に、あなたは自分の足で立っている人間に全く何も注意しないでしょう。そして眩暈とか倒れる恐怖が十分に見出しているのは、私たちの想像力が何でもない予告に倣って、ここにどんな豊かさも持っていることです。どんな英知も死んで仕舞う有名な板の上に私たちを乗せることなく、思念の縁に私たちを乗せることがなければ、私たちの足が彼の待っていた歩行に出会うことの無い時は、私たちを捕らえるこの滑稽な動揺のことを考えるだけで十分です。この種の落下は最も果敢なる者も驚かせます。そして、その反応によって一種の怒りを更に齎します。無礼があるからです。それに従って明白なのは、眠りへの準備はどんな落下も終わりにすることに存することです。ところが、それは信じるのがそんなにも容易ではありません。困難は結局のところ非常に早く音階を練習したいかどうか、それと同様のことなのです。障害は私たちの裡にあります。私たちの裡にあるのです。肉体は流れませんし、敢えて流れようともしません。そして、この暗喩は眠る人にとってあらゆる真実の近くにあります。もしも眠る人間の姿が、許される範囲内で流体でない

としたなら、彼は本当に少しも眠っていないのです。均衡の取れた流れの中で全ての労働が行われます。重力はあらゆるその結果を生みました。最早、山々もありません。眠っている人間においても同様に、本当に眠っているのであると私は言います。最早、落とすことが出来るものは何も無く、手一つ、指一本さえ無いのです。自分の力で止まっている者は、そうなるのが非常に僅かであるにしろ、非常に僅かに立っているにしろ、彼は次の様に眠りによって僅かに落ち、そして多少なりとも目覚めるように至るでしょうが、以上によって大変に醜悪な落下や、落下の感情が主要な対象になるこれらの夢想は既知のものです。そして、これらの小さなドラマは自己に対する反乱と分裂の見本です。眠りは落ち着かせますが、眠りに着く前に行きたいと思っただらば、先ずは落ち着かせる必要があります。そして私たちの主要な敵に対しての安全の感情は、眠ることへの幸福にも大いに関係があります。あるいはより一層適切に話すなら、これから眠るであろうと感ずることなのです。

この幸福な状態は私たちの引込んだ所であり、隠れ家であることを理解して下さい。この短い眠り、瞬間的な休息、そして完全な断念がなければ、この世界に精神は決してありません。そして眠った精神によるこれらの閃光は、精神が眠りながら働いていることを証明することは決してありません。その様な仮定は神話的です。私はそれを証明出来ませんが、少しずつならそれを示したいと思えます。私たちが最初に獲得した新鮮な成功は、寧ろ次のことから齎されると言わなければなりません。それは先ずは口論を中断したからであり、他人の好みでなく、自分たちの好みに戻ることです。それに、それは闘争的な人が求めることです。眠りの天才はまさに全く簡単に天才になるかもしれません。しかし、そのことはもっと後で書くことにします。(完)

第三章 眠りとは何か

熱を緻密な存在と長い間見做されて来ましたが、それは物体から物体へ移動する繊細で破壊的な水蒸気のような存在であり、殆ど時間が経つにつれて布地に染み込んで広がって行ったり、反対に乾いて行く水のような存在です。夜もその様な存在でした。夜も又、多くの人々にとって未だ一つの存在に止まっていて、行ったり来たりしている存在です。ところがプラトンが既に告げていたことは、それは私たちの最良の思考と、恐らく全てのものにおいて、対象となっている関係であるということです。夜は影でしかなく、そして夜の存在は影としての存在でしかないのを私たちは知っています。それは光と光線を通さない物体と私たちの眼との関係の一つです。熱も一つの関係でしかありません。来たり行ったりする存在のような眠り同様に考察しなかったので、同じ様に夜は影の目立った状態でしかなく、同様に眠りもこの影との関係によって目立った状態として現れ、それは私たちの思考から切り離せないものであり、そして刻一刻と私たちを博識にして、次に無知を装い、そしてもう一度同じことに詳しくなるのを私は望むのです。注意と不注意が姉妹の様に一緒になります。それは私たちも言うかもしれないように、隠喩がなければ人は思考出来ないからです。画家が形と色のために行うように、隠喩は外観の仲間のうちに引き下ろされるからです。

眠りの最初の外観は広がり無し不動性であり、私が話したことがあった重力への同意です。この状況に置かれて、謂わば非常に平坦な表面の上に放されると、それが大地とか一枚の板である時、人はそこにいることを長い間知らないでいるのを経験が教えてくれます。この不動性によって、この怠慢によって、私たちが緊急の理由がなければ指の一本も上げないことになるこの種の決心によって、直ぐにも事物は一つの意味も状況も形も持つことを止めて仕舞います。世界は混沌（カオス）に戻ります。以上によって瞬間的な目覚めに気付くのは、屢々可笑しい間違いです。しかし眠りの到来は次のことによって取分け目立っています。私はそれらの間違いについて熟考しませんし、間違いと同じ高さにも高めません。大空の三角形は、私には青い帽子のように見えました。しかしこの愚かな思考は目覚めを告げています。間違いには野望があります。そして探求の開始があります。眠りに着く人間の幸せな思考は、決してそこまで自らを高めませんし、それは我が身を守ります。外観の呼び出しがありますが、私たちが良く知っているものです。もしも身動きしないなら、外観の答えはありません。もしも身動きしても、同様に答えはありません。何故なら最初の外観は別の外観に道を空けるからです。私は、日向に私たちを移動するように勧める天文学者たちを屢々笑いました。何故なら太陽から見た大空は、地球から見た大空よりも、外観が唯一のために明るくならないからです。それは別の問題になるでしょうし、これ以上少しも容易にはなりません。地球上を通過する月は、日食よりも理解するのが容易な訳ではありません。それ故にそこには、活動と思考が一緒になったもっと大きな仕事があります。あるいは別な言い方をすれば、私たちが目覚めさせる最初の外観があります。何故なら、私たちが質問することの何らかの答えであるからです。「これは何ですか」。これは決してそのことではありません。青の三角形はそれ故に私に行動したり思考したりするよう催促します。私は拒絶することも大変良く知っています。それ故に私は拒絶します。そして、この一

人ひとりの外観に特権が無いことに気付いて下さい。何故なら全ての人々が最初の瞬間には空想的なものがあるからです。それ故に私たちを目覚めさせる肉体には、飛び上がるものしかないのです。数々の不条理な外観は、それら自体によって決して私たちを目覚めさせません。それらの外観は目覚めた人間にしか不条理ではありません。そこには既に私たちが夢見ているものがあります。最初は夢を見ましょう。

人が眠りのことをきちんと述べたいなら、私は主に三つのことに気を付けます。一つ目は、多分既に十分に説明されていることですが、それらは継続的な探究によってしか認められないもので、外観は否定されて乗り越えられているものです。私は配慮して次の様にもう一度言います。外観はその様に、つまり外観の誤りを見直す見解との関係によって乗り越えられるしかありません。それは外観が自ら示す瞬間なのです。従って、既に一つの思想になるだけの、乗り越えない何らかの外観を立ち上げようと試みてはなりません。もしもこの世界が広がらないとするなら、退却するのです。実際に私たちの周りは夜なのです。二つ目は、継続した行為が無ければ、私たちは現実が少しも分からないと言う必要があるということです。これらの懐疑と試みと探究は、まさに高い樹木の周りを回り、王杖を触り、甲冑を鳴らそうとしている私たちの肉体の何らかの活動がなければ、物事は決して運びません。注意して下さい。観念は難しいものです。人は容易に観念が足りなくなります。食物は開始と抑制の活動を持った活発な感情によって私たちの知覚に至る、と私は言いたいのです。この感じられた動揺は、本来は想像力のものです。それは深淵を穿つものです。そこへ落ちるための活動も、自らを守るための活動が無いならば、深淵の穴とは何でしょうか。その動揺からは距離を実感します。眠っていて動かない肉体は、私たちが何も知覚しないようになる、と結論を下さねばなりません。それはもっと身近で気の置けない夜です。

三つ目に言うべきことは、この世界以外の対象を私たちは何も思考しないということです。そのことはもっと詳しい説明が求められます。思考することとは確かに世界から退去することであり、そして或る意味では世界を拒絶することです。この考察は、直ぐさま後へ戻るよりも寧ろ拒絶して思考する活動に固定しないのを条件にするなら、正しいものです。私はこれらの輝きを可能にする限りはその後も説明するでしょうし、外観は外観であると何かによって信じたり、信じるのを止めたりするこれらの火花を殆ど言うに違いありません。しかし、懐疑に耐えるのはその対象です。対象を支えるのは逃走です。対象にぶつかるのは帰還です。対象を自ら拒絶したり自分自身の裡に思考を求める者たちは、そこに何も見出さないと私は少なくともここで言いたいと思います。熟考の活動とは、まさに両眼を閉じて瞼に両手の映像をつけ加えることでさえあるのを、私は観察しました。しかし直ぐに元気そうな両眼は再び開いて、世界へ再び飛び込みます。要するに私たちは知覚しか考えません。思い出の世界は、自己満足によって流布する貨幣の如く作られるのを、私は知っています。その点について人が良く注意したいのは、先ずは大きくなったり小さくなったりする声が私たちの思考に対して現実の対象を絶えず与えることです。それが現実ですが、その時は余りに私たちの感情に依存していて、以上のことから全ての人々の裡にある、とりとめの無い話にも依存しているのは人が考えていることを言わずに、言っていることを考えるこの逆転によるものです。しかしながらその上に、一度ならずそこに戻るのを気付けなければならぬのは、美しい言葉遣い、つまり先生たちに従うことは更に規則正しく抵抗する

対象を形づくりませんが、それは閉じた両眼の思索家以上に救済しました。以上は、私が注意深い読者に提供する一番目の指摘です。二番目は、一般的な言語は主として思考でない思い出を呼び起こしますが、先ずは最早対象を持たない私たちの思考のものを支える独自の対象です。その様なものは一つの肖像画であり、一つの萎れた花です。何故なら、全ての記念碑には彼らの名が付き、迷うことがなければ誰もが決して内省に耽ることの出来なかった、間違った権力のしるしであるからです。それは常に言語ですが、言語を閉じ込めています。そして、思考する巨匠たちで最も古い記念碑的な芸術は、何時も最も重くて最も抵抗する素材を求めている、この別世界がこの世の世界に対して十分に力強いことであることに注意して下さい。それらの分厚い壁は最初は決して長く継続するためにあるのではなくて、先ずは現在の思考を支えるためであり、常に眠りの縁で思考そのものによって内面の生命を外へ引き出すためです。一人ひとは、この規則正しくて、祈る視線によって絶えず救済される夢想の経験を持っています。ここには崇高さと幾つものイメージがあります。何故ならイメージは否定しなければならないからですが、現在のイメージは保存しなければならないからです。不足によって廃墟の力強さが把握されますが、それは知覚から分かる不足です。対象に不足しているものを思考することは美しいのです。そして、どんな思考にも最も美しいものがあります。ところが、この不足が同じ対象によってしか存在しないのも経験のもので、意志によって廃墟となり、既に時代によって完成されたタキトゥス(1)作品の読者は、その経験に関して何らかのことを知っています。もしもその様式が崇拜によるが、既に内容のある計り知れない別のものによる一種の抵抗する広がりを持っていなかったなら、私たちの思考は直ぐさま放浪して、影のように軽いものになるでしょう。かくして対象がなければ、人は眠ります。

探究がなければ、従ってそれは眠りとして決定された部分ですが、それと同じ活動がなければ、それは自然を支えるものですが、結局のところこれら二つの原因によって、そして夜と沈黙によって対象が無ければ、こうして何らかのものによって私たちは眠りへ移ります。私は、眠らせる人や催眠術師たちの習慣を、大変に驚く確証として、又は何時も達している習慣が意味するものとしてここで気付くのは、第一には狭められた一点に、そして相違の無い一点そのものによって、不安を集めることです。第二には、それらの活動を小さくすることであり、第三は言葉として知覚した対象を小さくすることですが、それはその操作者を言葉に続く半睡状態のこの妄想の先生にするものです。それらの指摘が十分に明らかにするのは、もしもそれらの指摘に従いたいなら、どんな奇跡の秩序も、それらの奇跡の上に注意力が流行によって時折戻って来ます。そしてそれは力によるにしろ、例えば母親の乳房に容易に戻る幼年時代が私たちに残っているのを同意する幸福によるにしろ、魅惑的なものです。この様にして私たちは、祝福を与えている幼年期の幸福に毎日戻りますし、最新の思考においては人間の親切な織物である本当の揺り籠である、唯一の揺り籠に戻ります。(完)

(1) タキトゥス(五五頃～一二〇頃)は、古代ローマの歴史家で、『ゲルマニア』『年代記』などを書いた。

第四章 不眠について

〈無垢〉には、古代の敬うべき偏見によれば、眠りと結び付くものがあります。同様に反対の言葉全体と結び付きながら、私は一種の悪意あるものとして不眠のことを述べたいと思いますし、悪意の本質としても言いたいと思います。悪意があつて間違つて非難する有害な言葉に関する驚くべき語源をすっかり理解するのを願わなくても、しかしながら私はプラトンを手本として、人がやったり他人に願つたりする悪は、人が自分にやったり自分自身に願つたりする悪よりも二次的な出来事ではないと考えながら、悪意ある観念を抱く人間の中にさえもその観念を戻さなければなりません。そして、その悪意は決して自分の意志ではないと閉じ込めるだけです。それ以来プラトンは、彼としてはソクラテスの言葉を考察しました。「誰も自発的に悪意ある人はいない」。この格言は理解されるよりも寧ろ拒絶されて来たと思ひます。何故なら、人は次のことに決して気付かなかつたからです。悪意は、悪意ある人の中では第一に怒りや反乱でしたし、実際は苛立ちの言葉が二重の意味で大変良く理解されているように、悪意もそれ自体によって維持された単純な動揺だったので。さあ、次は不眠のことになります。何故なら不眠は、自らの体を搔く様に激しい怒りと同じであるからです。

この激しい事態に来る前に、私は何か狂人たちと同じことを言いたいのです。彼らは、どんな情熱に関する研究とか自己に対する乱暴な行いにおいても、私たち自身の大きくなったイメージとして表さなければなりません。しかし、大きくなつても決してそれ程形を変えたものではありません。私が最初に指摘するのは、賢人を説明するために狂人たちから出発する方法が医者のものであつても、決して成功しないということです。何時も一つのメカニズムに陥ります。ここでは数々の反応や罵倒や単調や痙攣的な行為を生んでいるのが、動物機械であることは大変に明白であるからです。だが、その上更にこの動物的動揺の中には、人間のものもあるのが容易に忘れられています。つまり一種の不幸であり、最早自分自身を知らない屈辱と同じですが、思考のしるしを止めているものです。しかし、一種の伝染病によって狂人から冒されているような宿命論者の観念が、自然と私たちの全ての観念に広がって行くことは除きます。思考することの困難が私たちの全ての不幸や犯罪にさえも実際にあるのを、それは否定するものです。それは、常に一種の正義に照らされている情熱という美しい言葉から、全ての感覚を取り除くことです。そして、その人間をわざと低く理解するのは、愛も無く生活することです。従つて、その人間は子供と同じで、彼は利用するけれども寛大さを軽蔑し、反対に借りを返す如く厳格さを評価することが行われます。しかし、祈りの世界を無視して、徐々に評価の厳格さを全て拒絶しなければなりませんし、狂人を先ず拒絶しなければなりません。この姿勢は、無感覚による一種の英知を生みます。それは怒りが無くもありません。理解することの喜びまで損なう方策としての人間嫌いが無くもありません。その世界を裏返すと、思考は一種の平静な狂気に過ぎないからです。そして、その方法は恐らく気難しい一連の仕事であり、自己にも不満を抱くものです。何故なら医師たちは、医学以上に愛するものは殆ど無いからです。ところでこの頁やその後の全ての頁において、私は狂人たちのことを思考するために一つの反対の方法を試みようと思ひますが、先ずは病人たちのことであり、あらゆる種類の忍耐力の無い人々のことです。その方法は

、この地球上の王である英知を示すことです。それは勇気と節制と知恵と正義を、自分自身と共に取り憑かれたものに表すことで、強く主張することです。そして、その独白の中で全ての人間劇を演じながら、その対話は短刀と毒のように一つの挿話であり、偶然の出来事でしかありません。私がそこから聞いて理解するものはハムレットとかオセロのことを考えれば十分です。そして、それはそれらの危機や嵐に従うものであり、その一人ひとりには大変な経験しかなく、私は従ってその人間が自分自身を最早認識しない処であり得る近くで降下しようと思います。つまりそこはメカニズムが全てを再び捉える処です。ところで狂人たちについて私は、大きな影響力を持つ一つの言葉によって明らかにされますが、それは恐らくそのことを最早思考しない人間によって私の処へ投げられたものであり、彼は自分の役割から男性や女性の狂人の要求を自由意志から聞いていました。彼は私に言いました、「狂人たちは悪意のある人々である」。少なくとも自発的な悪意の観念を遠ざけましょう。それはそれ自身が狂人の観念です。そして間違っただけで熱中したり管理したりして、自分自身を損なう人間として悪意ある人を理解しましょう。それは謂わば意志を望んでいるが、意志を知らない人間の如くです。

再び私たちには不眠のことがあります。それと同時に私たちには本当の意味で悪意ある言葉がありますが、それは不器用な人のことです。不器用な人間とは眠りたいのですが、眠ることが出来ません。私はその理由を、上記に説明したことに倣って良く理解しています。眠りを人は望むことが出来ますし、その望みに専念することさえ出来ます。その人間の暇な時間はその価値と同じです。力ある側にいる時は、眠るのも容易です。しかしその生活は投げ倒されて動物的になります。それは沈思黙考と芸術と信仰を取り除きます。人間の均衡は意志と好みによって眠るのを望むのであって、数人の偉大な名将を語る如く、そしてその均衡が殆ど全ての人間にとって幸せな真実であるかの如く、私は念のために言うまでです。その幸福な状態の経験は、眠りに到達したりそこに戻るものであり、眠りを再発見するために働くことになりませんが、何時も申し分のない訳ではありません。絶えず同一地点に戻って来たり、苦い思考の悪循環を断ったりして、そこに決して良薬を見出さないこれらの混乱した議論を終わりにしたくないのは誰でしょうか。勿論、数々の支障が不眠を養っていることは必要ではありません。不眠は不眠自体を育みますし、眠ることへの配慮が眠れない者の主要な関心になるに至ります。いずれにしても、意欲への失敗は意志を知らないことから齎されます。

私たちは、私たちの思考の流れに沿った如何なる力も直接的に持っていません。それは先ず刺激を与えるものです。数々の思考は軽いもので、肉体の無いものです。あるいは寧ろ、それらの思考は私たちにはその様に思われます。一人ひとは幽霊を追跡することを知っていますが、そこでの私たちの行為は相手に力を与えます。その様な思考のことを少しも考えない如何なる勝ち誇った理性も、私たちを連れ戻してそのことを思考する様に、私たちに定めています。それ故に何もかを決して思考しないための一つの技術があり、眠りはその報酬になります。しかし、そこに到達するためには、私たちが妨害するそれらの観念のメカニズムを習慣にしないで、少しでもより良く認識しなければならないでしょうし、それは一般的には観念の結合という言葉に基づいて述べられているものです。もしも一つの観念が一般的にそれに結び付いていさえすれば、その観念そのものによって他の観念を齎していると理解されているなら、私たちはどんな固体でも何も理解することが出来ません。もしもそうであったなら、私たちの思考は決して終わりが

無いでしょう。しかし私は取分け、それらの対象周辺に味方が何も無いとするなら、一つの観念がその他のもう一つの観念に続いてやって来る経験が私に生まれるのを期待します。でも、この経験は不可能です。私たちはこの世界の外にいなければならなかったでしょう。反対に、熱狂者が最愛の言葉に従う時、彼が絶えず自己を新たにすることを取り入れるのは一般的であり、それは彼の眼の前や両手の下にある事物への、彼にとっての隠喩です。これらの指摘によれば、観念の結合による学説は完全に非難すべきものとなるでしょう。その点について私はヒュームを再読することをお勧めします。偏見を無くして読んで下さい。何故ならヒュームは、生きた印象つまり対象から生じる印象は直ぐに普通の仲間を刺激して蘇らせ、かくして一輪の萎れた花は直ぐに場所と状況を思い起こさせる、と言っているからです。ところが、弱い印象にもこの力があると彼は決して言いません。私たちが弁証法的な罫によってあらゆる知覚の外に事物の世界を発展させられるとしても、正確な描写という美德によって彼はそこから逃れます。私は、この観念を何かと対立させて既に述べましたし、その後明らかにしているのですが、それは決して知覚しない人間は眠っているということです。

以上のことから私は、私たちの思考の流れを間接的に導くために、一つの方法に戻ります。今日のその仕事においては最早、単純なものは何もありませんし、一人ひとりはそのことを良く分かっています。夢中にさせることは全てを変えます。ヒュームも指摘していましたが、トランプやチェスの力は先ず次のことの中にあります。明確な知覚は直ぐに私たちの間違った思考を消すということです。それ故に、それらのトランプの生き生きとした色彩がゲームにおいて殆ど事物になっていないと私は少しも信じません。しかし、それからもっと先を言います。もしも全てのことを少しも考えたくないなら、最初は何も知覚しないことに専念しなければなりません。つまり出来る限り感覚を閉じ込めて周りを決して調べないで、先ずは決して動かず、肉体にちょっとした印象を与える僅かに目覚めている筋肉による注射を、決して養わずにいななければならないことが残されています。しかし眠りに最も有害な思考は決して眠らない様に注意することですが、自分の周りにその証拠や原因を探し出すことしか理解しないのは誰でしょうか。

激しい怒りや熱狂は何も出来ないものである、と私が言ったことをまだこれから注意しなければなりません。何故なら情熱の主要なものや悪徳のものでさえも悪評であること、すなわちここでは何も出来ないし、何も出来ないと判断して絶望の極地に陥ることを、私は一度ならず説明するからです。「それは私に相応しくない」。そこからは憤慨の言葉が齎されて、あらゆる私たちの苦痛を示します。そして今の私はそこに固執します。何故なら不眠における憤慨は自己の破綻によって屢々、只の悪になるだけであるからです。そして既に、精神はここに不幸を引き出します。それは自分自身に予想されるあらゆる不幸のようなものですが、一種の教義的な満足です。そこには余りに喜劇的な逆説があり、眠らないことに対する自負があります。もしも眠って失敗して殆ど不幸になったならば、怒りが湧き、ついには目覚めに対して決して眠らなかったことを自ら証明したり、他人にも証明するための応用があります。それ故に想像上の病気がある如く、一種の想像上の不眠があります。しかし不眠において、そして屢々病気においても、最良の熟考は全てが想像力であるという観念へ突然に私たちを導きます。後者の病気によって想像力が、もしも凄い現実の何ものかであることを理解するなら、同様に人間の肉体の動揺の中にある如く

、動揺そのものを語ると苛々するので決して眠らないという恐怖は、あらゆる恐怖のように自由な眠りと呼ばなければならないものを、確かに私たちから奪うものでなければなりません。

私は、不眠というこの大きな悪循環を閉じるために、悪意ある人に戻ります。悪意ある人はメカニズムに降下して、そこから自分を慰めることが出来ない人です。あゝ、健康で気高い悪意ある人よ！ 彼らの悪意は絶望か、あるいはもっと正しく言うと苛立った臆病の一つでしかないのを私は良く認めますので、ピアニストたちに見られる如く助かる見込みが無い彼ら自身で間違いを恐れて、それを予感し、見詰めて、そしてそこに降下します。この暗黒の視線は私とは決して関係がありません。彼が望んでいるのは私ではありません。違うのです。彼は私に言います、「離れて下さい。私自身を妨げる私のために、私はそこにいるのです。あなたのためにも誰かのためにも、良い結果にはどうにも出来ません。私が悪意ある人であることを、あなたは良く理解しないのですか」。以上によって私たちの情熱のこの陰鬱な意味合いは、それらに倣えば信頼も、ついには完全な愛も、一種の罵詈雑言です。何故なら、それは嫌悪したが確実な意見に反論を加えるからです。神学者たちは、魔王が救済されことを望まないと言います。間違っって聞かないようにしましょう。魔王はわざと迷っているのではないのです。反対です。何故なら、意志は何も出来ないし、従って魔王の特性や秘めた悪には良薬が無いのが確かであるからです。実を言うと、良薬を拒絶することが悪そのものなのです。そして絶望の中の確信とは、実際には自尊心であり、それは従って悪以上に自分で思考することにあるのです。要するに私たちの数々の悪徳の中には、沢山の主張があるのです。（完）

第五章 疲労について

初めに戻りましょう。私たちが存在することになった人生の初めには、私が示して来た思考は少し荷が重すぎます。二つの疲労があるのが分かります。一つ目は垢がついて機能低下するからで、二つ目は使い尽くすからです。二つ目の疲労に対しては、栄養と医師が沢山のことが出来ます。しかし、一つ目を治すには眠りしかありません。先ずは伸びきって解けている肉体を洗ってゆったりすることです。従って体組織を綺麗にする排泄と、それらの体組織を汚す労働との間の明らかな不均衡によります。この一つ目の種類の疲労において私が注意するよう配慮することは、その疲労が濁った血液の循環によって同時に至る所にあることです。そして、その経験から歩行も両腕を疲れさせることが分かります。皮膚で出来ているお腹の中での接触によって大変親密に結び付いていたり、神経器官による最小の活動に関して大変緻密に結び付いている人体の様々な部分は、他の部分が疲れている証拠の一つとして迅速に関わって来る、持続した血液の循環にもう一度結び付けられています。その次に、これらの全ての毒素が全身に運ばれて、排泄されずにより一層早く更新されます。先ずは主として神経細胞そのものに働きかけること、従って前もって行い、調整して、ついには思考する力が作用する力そのものよりも、行動によってもっと早くすり減ることが当然のこととして推測することが出来ます。まどろみは従って疲労の最初のしるしです。誰でも思考が弱々しくなったり物憂げになったりします。その時は手足が無意識的で痙攣的な行為と引き替えに、更に多くのことを可能にするのを知っていました。その状態は、対象が最早私たちの脅威にならなくなると、眠りに再び陥ります。

行為の前とか後にあるどんな思考能力のある活動にとっても、中心の中の中心である神経には一般的に人は忠実です。その中では決して間違えません。何故なら思考することは事物全体を全て注視するので、思考は身体の各々の部分の動きが、その他全ての動きに通じている状態であると自然に見做しているからです。それは神経の波が、あるいはこう言いたければ、主な中心にまで多少なりとも上昇して再び降下する限りでしかあり得ないからです。何も生まないこれらの震えと本来の意味での行為の関連は、特別の知覚から全体的で不可分の感情までの関係を表しています。人間の身体的構造によるなら、突然の思考が突然の行為に対応しているのはそれ故に明白です。私が理解するのは、何らかの低次の頭脳によって成熟する者は、偉大な中央が無く、あるいは換言すると身体全ての部分がなければ思考に参加することがないことです。更にその構造に従ってそれらの突然の行為は、閃光に対して瞼を閉じる如く、あるいは脅威に対して両手を伸ばす如く、あるいは滑って掴まる如く、何時も先頭を行かなければなりません。そこから開始されたものしか導かれないという非常に誇張された格言が取り出されます。しかし全てを決して理解しない、これらの突然の思考を再検討しながら、これらも又思考であるのかどうか自問しなければなりません。この問題は、もしもこの私が例外なく私たちの全ての思考に関して不可分の主題であると理解されるなら、否定的にそして全てが厳格に解決されます。しかしながら、その解決は機能的に解決するために抽象的分析に依存しています。どんな風景でも常に照らす意識の閃光についての考察により対応されるのを望んでおります。私の瞳孔が開くか開かないか、私には分かりません。勿論、同様に私が腕を伸ばすかも決して分かりません。私は腕を伸ばすのを感じ

ますが、少なくとも腕の中では感じません。私はこの腕の動きを身体全体に関連づけます。私の身体だけのことではなくて、私が見ていた事物を隠すから私の腕が伸びているのを見ます。それはどんな事物の遠近法にもあり得るのを前提としています。私がすっかり知っていたものとしてあるこの世界の大通りに、予想と記憶とこの大混乱の全ての向きを決める者に疑いを持つ活動が無ければ、正しい認識力を決して持たないことでしょう。思考していることを言うことは、考えていることを思考することですが、それでも未だ言い足りません。

現実はその様なものであるので、十分な休息の外で、行為に対して遅れて絶えず排泄されることによって殆ど全ての活動は、他者を動かす機械的行為に依存されています。そのことは辛うじて目覚めていることであっても、直ぐに眠って仕舞います。行為は、測ったり熟考したりする時間的余裕がある前に、既に行為が行われている機械的な流れの中のように、思考をむさぼり食ってすっかり失わせます。そして、行われた行為のことを思考する様になる時間の中では、他の行為がその行為を覆い、そしてその様にして果てしないのです。ここで垣間見るのは急を要する必要性や、如何なる余裕も無い動物的生活が存在し得るもので、真の休息が無いのです。しかしながら、この観念をもっと細かく時宜を得て考察することです。

空間とは考察されたものであり、単に可能な行為を表しているだけです。距離とは停止して測ることから現れます。比較することが無ければ、誰にとっても距離は決してありません。空間や眼前の中空を広げることは、好き嫌いの無い一つの瞑想です。同様に、もしもそのことに注意しても、他の目的や道のことを考えての出発は拒絶することです。それは、突然に渦が生まれる眩暈のように、空間を穿つものである数多くの行為が開始されて抑制されることがなければ前進しません。海辺の高い岩場の上で屢々、熟考する人は最早余り渦を穿ちません。彼は最早そこに落下する準備をしないし、そこに落下するのを最早抑えたりもしないのを私は理解しています。彼の肉体は少しずつ眠りの態勢をはっきりさせて、全てが混乱して後退して行きます。それは諸関係が無いと死滅して仕舞う私たちの夢想による絵画のようなものです。しかし矢の様に、あるいは石の様に回転させて落下する一羽の鳥が、模倣や追跡の活動による効果から慎重さに目覚めて、活発に抑制することが起こります。そして、それは直ぐに全身に敵の思索家を感じさせているものです。それは眼前に、突然に穿つその渦を意味するものであり、落下の悲劇的表徴です。もしも私たちが全く不動の儘であったなら、開かれた両眼を守ることも私たちの役に立たないことをもう一度分かせてくれます。眩暈に襲われたこの例は、少なくとも他の例よりも悲劇的です。根本的にはそれと異なりません。私たちは先ず行為の開始や抑制された最初しか、樹木よりも遠方にある地平線を良く見ません。人はこの立体鏡を前にして、この種の筋肉の痙攣を観察しますが、そこでは肉体が決して防御態勢を取らずに、何らかの用心も後退も決して描かない限り、曇ったイメージは不快感を与えるかもしれない立体感に悲劇的な意味を決して持つことがないのは明白であり強く感じられます。多分、間接的に血圧や心臓の応答によるものでないとしても、スポンジのように押してもはね返して来る波によって筋肉の収縮を、直ちに最小に表すこれらの筋肉の震えを人が測ることは出来ません。反対にこれらの活動とその反響は、私たちが世界で最良と感じているものであり、私たち恐らく世界に感じているものの全てです。恐怖 (peur) は即座の認識であり、考えても分からないこの警報に遊びはありません。要するに適切な言葉の意

味で、それは心 (cœur) が重要です。それはまさに渦と同じ様に視野を穿つものです。時々には気付いたと思いますが、注意力とは常に震えているものです。しかし船首の監視兵を完全に理解するには、全ての筋肉から抑制されたこの跳躍までの準備をつけ加えなければなりません。それに対応するのは情熱であり、そしてそれは熟考によって明らかにされていて、臆病と名乗ってもいます。それはどんなものにも動いて変化します。何故なら、臆病は黙考する人の眩暈がそうであるように、圧縮や再発見された均衡によって絶えず跳び越えて克服されているからです。思考はこれらの過程の中にあります。思考することは行動しそうになるのを堪えることであると言った人々は、重要な真実を見させてくれましたが、動かないことで真実そのものを死なせる危険も負っています。決して行動しない者は、眠るからです。

私が対象としたのも今です。或る意味で行動する者も眠っています。その意味で跳び越える距離は、跳び越える時間の中では最早表されないのです。事実として私は距離を消します。跳ぶことは、測って判断することとは別ものです。行動するための今は、全てが世界の部分も距離も無い、一つの情操に寄り集まります。何故なら私は全てを放擲するからです。それは事物が直ぐにそれらの場所に送り返される急激な停止であり、迅速な抑制でしかありません。行為に関する思い出そのものも最早、障害が乗り越えられる処に戻される見通しの中では可能でなくなります。思い出すことは戻ることです。存在していた時点に実際に戻ることです。そして、より多くの信頼と共に、更に障害と共に親しくなるが如くに、より良く知覚することです。しかし、それ故に測るためであり、ついには再開するための観念であるこの考えしか理解しない者は、その段階では適切なものですが、誰が暇な場所にいるのでしょうか。逃げる際においてはどんな乗り越える障害も決して測ったりしません。乗り越えるべき障害は殆ど測りません。私たちの思考に基づいて夜が生まれますが、それは慌ただしい行為によるものです。高次の光が無くなることで情操の弱い光が消えることも、その点について戻るつもりですが、観察しましょう。必然性の一つの段階があり、そして恐怖そのものが最早感じられなくなる恐怖の一つの段階があります。恐怖も停止して測ることを望んでいます。恐怖を感じることは乗り越えられた恐怖なのです。

あり余る程の能力が決して無いから何時も眠りに再び陥って、飛び上がる生活に止まる力も無い生活をそれ故に理解しましょう。すると動物の生活という何らかの観念が生まれることでしよう。私が推測し得る限り、一羽の鳥の行動は活発ですが、又直ぐに眠ります。私が鳥のことを考えるのは、空気の流れによる飛行が浪費であっても、その支出が収入と全く正確に等しいように思えるからです。鳥を、蝶の主人にする翼の激しい羽ばたきを比べてみるにしろ、全ての試みが同じでないが餌の小片に対しての夥しい消費を比べてみるにしろ、鳥が飛ぶに相応しいものを取り戻すための機会によるしか到達しない観念に落ち着くでしょう。そこから主として食虫類の鳥が年間で二〇個から四〇個の卵を孵すが、その数は全体として著しく増えていることはありません。それ故に欲望と恐れとの間にある狂ったような動きがなければ、数少ない生き残った者たちの生活とは何でしょうか。ここに与える第一の観念は、休息と暇が絶対的に不足していて、全ての思考と感情が絶対的に死滅している一点に、その体制が自然と達していることです。これらの動き回る生活には、欲望を恐れを超過そのものによって最早欲望も恐れも殆ど無いと言われていいます。しかしながら、この観念では未だ十分ではありません。少なくとも恐れと欲望のある薄

暗い生活を想像すべきここでの諸段階が保管されたい時、欲望は無視されるのでしょうか、それは私たちの感情が動物たちには決して無い暇な時間と、決してそのしるしが少しも与えられていない沈黙考によって、私たちのための何ものかではないと私は信じます。半睡はそこから引き下がる人間のためだけにあるものです。要するに最も高い段階の知識が欠けて来ると徐々に全てが欠けて行き、全ての段階がすっかり無くなると私は思います。何も考えない人は何も感じません。何時も眠っていて夢ばかり見ている人間を仮定して見ましょう。この仮定は、仮定そのものが破壊されます。何故ならそれは、人が乗り越えるかどうか、人が見た夢を否定したかどうか、ということしかないからです。私はここでは単にその困難な観念を示すだけです。（完）

第六章 意識

時々言われている様に意識を失うとか、認識を失うことは眠ることと同じです。私は、意識というこの豊かな概念をまだ使い尽くしたとは思っていません。私は眠る間際には意識します。そして可能な限り何の反省もありません。明瞭な覚醒状態から熟睡間際の半睡状態までの数々の段階が私に現れます。輝かしい討論から行動というもう一つの淵の瀬戸際において、飛び上がる跳躍までの数々の段階も現れます。この描写は騙されもするし、これらの全ての絵画は或る種の観念そのもので表したばかりの、その観念によって創り直されるものであると私は思います。それは低次の諸段階が高次の諸段階を仮定しているものです。何故なら眠りの瀬戸際にいるこれらの状況は、決して自分を支えていないからです。薄明かりの中に残されるように、そこに残ることは出来ません。実を言うと、もうそこにはいないのに、そこにいることであるとしか分かりません。もしも私が眠る地点にいて眠ったとしても、その経過は何も分かりません。しかし、もしもこの状態又は眠りから私が目覚めて自分を取り戻したなら、その時は全意識の反映によって明瞭なものとしてその経過が現れて来ます。要するに私はここに驚くべき罫に気付きます。これらの薄明かりの状態を把握するには、十分に注意しなければなりません。あらゆる用心にもっと接近しなければなりませんし、決して倒れてはなりません。単純に言うなら、ここで試しているのは私たちの完全な自由であり、そしてそれは謂わば何も望まず、何も好まず、何も肯定しないのを演じるように私は言いたいのです。結局のところ熟考の無い意識は、熟考の時にしか現れません、それはつまり弱い意識は、最も高い意識においてのみ一つの事実になると言うことです。ところで一人の人間がこの半意識状態で生活し、そこに何時も止まり、更にそこに止まるのを知っているともしも仮定するなら、良く見ると一種の詭弁があります。それは思考の遊戯を事物に変えることです。地下室の仄かな光のように、半意識が存在するのが望みなのです。あなたは思考の縁と薄明かりを見分けながら、その様にした儘にして分離することを主張します。そして、それ自体のために思考するのであって、あなたのためではないと主張します。換言するなら、思考しないで自ら明らかにすることは既に一つの思考であるのを欲しています。来たり行ったりする思い出は、恰もその影から出ては又這入って来るが如く、その秘めた神話に支えを与えているものです。何故なら、保存されているものや戻るものは、暗誦するが如く常に行為であることに気付いているためであり、大いに注意しなければならないからです。謂わばそこを良く見詰めたことがなければ、私たちの背後に普通にある思考の如くに思い出は想像されますし、一瞬にして姿を現します。そのことを話ながら、亡霊たちや地獄の古い教義と同じ様に空想的な教義が容易に発展されて行きます。何故なら、この亡霊にも又観念があるという考え、亡霊は亡霊として生きていて、仕上げられていて、強くなり、姿を変えても少しも構わないからです。この愛されている幻想を完全に消去するためには、やはり夢想の教義や人格の教義や観念の教義でなければなりません。私は、分割出来ない人間の力としての意識、そしてもっと低い段階で全てが前提とされるものとしての意識に関して述べたいので、今後はここでその教義を指摘しなければなりませんでした。換言するなら私は熟考の機能として、人間社会の固有のものである暇と超過から切り離せない贅沢な機能としての意識を述べたいと思います。

火星人たちが地球を占領するという有名な仮説をもう一度取り上げてみましょう。これらの生物たちに照らせば、人類も鼠とか兎と同じ様な動物でしかありません。この厄介な存在に従う人類を理解しようとしてみましょう。人類は飢え、脅され、追われ、常に疲労し、常に心配して、常に半睡状態から行動するまで身を投げ出します。精神の高次の機能が直ぐに失われること、いやもっと正確に言うなら、直ぐに失われるとは容易に認めないでしょう。コントは、私たちの低次の弟たちである動物を注意深く見ましたし、それらのしるしから私たちの最もつまらない思考に似た何かを、動物たちに仮定するようになりました。しかし、この世界で人間よりもより良く形づくられたというこの見方によって、私たちの最もつまらない思考が、言葉として二重の意味がある普遍的で宇宙的な思考でもあることを知るために、そこの仮定から投げ返されもしました。それらの思考とは交換され、教えられ、保存され、研究されたもので、最古の神話からも理解出来るものです。コントはついに想像出来るものの下に、一つの墮落状態に気付きました。コントは言いますが、事実人類がこの惑星を支配し、全ての動物社会を絶えず壊しているのです。その様にして他の種属の生物たちを闘争と疲労と恐怖の状態に投げ入れます。それは暇な時間を齎す出来る限りの余剰がなければ、どんな真実の言葉も、文化も、正確に言えばどんな記憶も排除します。しかしもう一度、その観念を忘れないために絶対に時間を持たないような、絶えず出来事が直ぐ後からついて行く一人の人間を考えて見ましょう。彼が行うことに意識を持たなければ、その人には走り回り、ぶつかり、砕け散る混乱した恐怖があります。彼がそれと同じ瞬間に意識を持っていなかったかどうか、そしてその様にして自分の人生を救済した時間の中で持っていた思想とか知覚を少なくとも忘れずにいたかどうか、恐らく人は知らないのであると言いたいのです。しかし私たちが何を話しているのか、彼が自分の行為についての僅かな意識、つまり彼だけの意識から分離された僅かな意識を仮定して、何を話しているのかを知らなければなりません。この分離は言葉と矛盾します。意識 (conscience) は、知識 (science) に次のこと、つまり数々の認識 (connaissances) が一体であることをつけ加えています。脱穀されたような意識は少なくとも弱くはありません。意識は虚無に落下します。あるいはもっと適切に言うなら、虚無を照らす中心から分離された意識の縁には、理解出来るものは何もありません。何故なら逃亡するその人間は、幾つもの道を一瞬で熟視することについて、結局一言で言うなら疑うことについて、自分自身で語り合う暇が無かったからです。それはまるで彼が全く何も知らなかったかのようです。知ることとは、知っていることを知ることです。熟考は思考の偶然の出来事ではなく、思考そのものです。淵と眩暈の例に戻って下さい。私が身を屈めながら見ていることについて如何なる熟考も無いとするなら、私は理解していると言えるのでしょうか。動物たちが両眼を持っているのは無駄です。事物が絵画の中のように実際に描き出されるのも無駄なことです。それらの絵画は、動物たちの眼が如何に作られているのかを観察する私たちに味方するのであって、動物たちに味方することはありません。動物たちには暇も休息も決して無く、動物たち自身で議論することも決して無いからです。しかし、同類であることや共通した思想であることの証人を要請することも無く、自己と議論するとは何のことでしょうか。立ち戻る事が無く、比べることも無く、纏めることも無い思考は、全く思考ではありません。第一義的において、その様な思考は普遍的でないと言えます。何故なら遠くのものも近くのものも纏めないからです。思考を生むのは宇宙しかないからです。しかし他の思考する人々や、可能な限りのあらゆる判定者たちを決し

て召集しない思考も又思考ではない、と同様に言わなければなりません。思考の最初の諸形式は従ってその対象の周りの宇宙となって、その対象を形づくる宇宙なのです。そして、その人間の周りの社会となって、その人間を形づくる宇宙なのです。

私は目標に向かって直進しますが、恐らく急ぎすぎます。しかし、この思考そのものは私が形づくるものであり、如何なる思考の条件にも従います。その条件とは、終わる処から始まるというものです。それは全面的な野心であり、一つの思考が思想となる因を作るあらゆる野望以上の野望です。もしもあなたが現代のピタゴラス派であったとしたなら、月の上と下を、そして言うてみるなら反地球や月の裏側を一度に照らしたとしても、あなたは自分自身にとって何ものでもないのです。その大胆な活動は原始人たちの裡に見られるように、私たちの全ての誤りを説明しています。しかしそこでは最も僅かな思考も、普遍的法則の形式に従って巨大な円を閉じ込めています。至る所がその様であり、何時もその様です。一人の宣教師がやって来たのと同じ日に、原始人たちは浜辺で巨大な亀を捕らえました。原始人たちはこれらの出来事が一つもそれとは別のしるしであると決して思えません。実は一つの出来事から、もう一つの出来事までは実際に結び付きは何もありません。でも、その点で彼らが全く間違っている訳でもありません。全ては全てのものに繋がっているからです。そして、もしもこの亀がやって来たり、戻って来たりしたそれらの原因が欠けていて無かったなら、もしも海の波や潮や風が別の状況になっていたなら、その宣教師は恐らくその日に決して上陸しなかったかもしれませぬ。あるいは他の場所に別なやり方で上陸したかもしれませぬ。しかし原始人たちは、経緯やこの二重の冒険を全て十分に認識していないので、出来るだけ結び付けようとしませぬ。ところがその考えは間違っていると言うよりも、寧ろ未だ完全ではないのです。しかし、それがまさに思考です。彼らは、詳しく言うなら慣れ親しんだ行為を望むのと同じ方法で、それら二つの物事を一緒にしたかった何らかの或る高度な力に、それらを転嫁するのです。かくして彼らは全ての物事を理解します。彼らが神を見ないなら、亀も決して見ませぬ。しかし、亀を見るときは何でしょうか。結局のところ見るときは何でしょうか。空間とは諸部分以前に与えられていると言うこと、それは叙述するしかないことです。それは宇宙が各対象を支えていて、それを存在させているということです。しかしそれらの証人たちを呼んで、彼らと共に自分自身の裡で議論することが無いとするなら、言葉によってこの亀が証人たちと諸部分を一致させるようにして亀を見ることとは、更に何でしょうか。二つの事物はそれ故に先験的なものであり、思考することが無ければ事物の宇宙も人間の宇宙も一体化しています。そして原始人たちの全ての間違いは、彼らの誰もができるように万人や万物以外には決して少しも考えないので、これらの宇宙も他の宇宙も一つも中斷しないのを目指していることからやって来るのです。

そこから把握されるのは、意識は余りに早く言われるように小さくも大きくもなく、流浪することも分離されることもなく、主観的なものでもありません。自分のことしか考えないのは、眠っていることであるに違ひありません。従って、まさにコントが表した以上に、一方では言葉と人間の世界を分けることの出来る思考は決してありません。他方では人間社会の外部と、暇な時間と同時に記憶を与えている継続した社会を分けることが来る思考も決して無いと言うのを抑えながら、人間は行動したり眠ったりしながら、用心のため眠りが保証される休息の蓄積がなけれ

ば追い回される動物でしかない、というどんなコントの思想も見えて来ます。しかしながら、それに倣って思考するのは人類であり、人類は既に神話化していると言いながら、そこから私たちの意識が肉体にある如く、社会的意識が社会にあるに違いない処まで時々達します。それは事物の世界へ移ることであり、諸々の関係を失うことです。意識は、贅沢の中の贅沢である休息を保証して調整する都市の夜によって、思考の中で一人ひとりを強固にする信頼によって、自我を言うことが唯一許される一方から他方への相関関係によって、結局は本質的な蓄積である言語という資本によって、まさに社会的なものなのです。それは私たちの感情を和らげて、私たちの思考を調整します。それと同時に意識は、私たちが知覚する鏡の中のように、私たちに思考を提供します。しかし、社会的であるのは私たちの意識なのです。この形而上学は私たちの外部には無く、私たちから遠くにもありません。私たちは孤独の中でもそこに参加します。そして更に孤独の中でも、私たちの思考で最も秘密のものによって参加します。それらの観念は発展します。しかし、制度として欲せられ愛され求められ、本来的には人間的なものである眠りと相関的に、それらの観念を今後は直ぐさま示さなければなりませんでした。（完）

第七章 大いなる眠り

私たちにとって待つことは恐れることと同じものである、とこの様に私たちは作られています。そうです、私たちが行おうとすること、それが何であるか知ることなく試すのは狂った努力によるのであり、それは正確に言うなら行っていません。私たちは忽ち動揺した状態に陥ります。そこでは全ての筋肉があらゆる方向へ引っ張られて、私たちを疲労困憊させるまでになります。それと同時にこれらの圧迫が血流の広がり、突然の動きを行使して心臓が乱れて応答しようとしませんが、対応出来ません。かくして血液は、柔らかい部分である腸や腺や脳へ追い出され、そこから神経を通して興奮が拡散し、不安にさせます。しかし、それが又筋肉の動揺を持続させます。こんな状態は何時も良くあることです。最も冷静で自制心のある人間でも、不安に陥らせるには肩を思いがけずに叩けば十分です。この情動を十分に注意して見詰めることは決して無く、どんな情動でも生まれた状態の時には根底は変わり易く、不安定で、例外なく私たちの全ての感情は豊穡です。恐怖が無ければ勇気も決してありません。恐怖が無ければ愛も無く、結局のところ恐怖が無ければ崇高さもありません。この様にして、この世には戦いと劇的事件しかないのですが、それは各人が自己と共にあるものです。屈辱と激昂の混じり合った結果である悲劇は、常に恐怖の中で最も小さな打撃と結び付いていて、苦痛そのものの主要なものですが、苦痛 (*douleur*) という言葉の、肉体と精神という二重の意味として十分にそれを理解させているとき私には思います。従ってこの道によって、私は直ぐに現実の中に私が近づくこの恐ろしい主題を発見します。誰もがダンテのように生きながら、まるで〈地獄〉へ落ちるようです。何故なら私たちの全ての煩悶が、やって来るものようであるからです。行為する代わりに熟視しようとするや否や、未来そのものは煩悶になるからです。デカルトに倣ってその点について私たちは繰返して主要なことを言いますが、不決断は最大の悪ですし、この偉大な観念はデカルトの不朽の『情念論』に従って発展する必要があります。そして私が何時もこの師について行って先ず気付くことは、情念は肉体のものであるけれども、心の中にあるということです。私が最初に簡単に述べたあの動揺と不安は、少なくとも私がしていることが分からない恐怖心からの逃走の中では、どうなるのでしょうか。急を要する困難な行為で、各瞬間が他の瞬間を消して仕舞う行為においては、どうなるのでしょうか。それは既にご説明したように、悲劇は悲劇的になるのであり、熟考と沈思黙考によって常に一体になっているのです。そして以上は、感動させる術による確かな経験により、悲劇作者は行為を拒みます。憤慨と恐怖と哀れみを育む数々のしるしによって、それらが劇を構成する理由になります。真の劇は心の中にあります。死んだ王の中にはありませんし、侮辱された王の中にあるのです。

飲んで喉を詰まらせる人は、病人よりも心配です。心配以上に侮辱されます。彼の体刑は、自分自身の混乱に対処する術を知らないことにあります。彼は、周りの人間性を消すこれらの動物的しるしによって、その混乱には恥ずかしくもなく、恥辱を結び付けます。喉に魚の骨を詰まらせたルイ十四世を想像してみてください。それらの注意は、私たちの全生涯に亘っての忠実な伴侶であるこの恐怖を、減らすためのものではないと認められるでしょう。しかし、恐怖が常に真の悪であり、唯一の悪であるというこのことによって、それらの注意はその恐怖を本当の原因に立

ち戻らせるに至ります。そこから恐らく理解させられるこの相違とは、結局のところ生きる術を知ることと、死ね術を知ることの相違は決して無いということです。喉を魚の骨で詰まらせても、極めて平静な儘でいる人は如何なる恐怖も不安も無く、如何なる悲劇俳優の仕草もせずに呼吸し続けるのであって、有益で礼儀正しい二つの感情によってそこへ導かれます。その様な人は、死ぬことよりも何かもっと困難なことを行っているに違いありません。モンテーニュはそこを屢々見詰めますが、決して余り近付きすぎて見詰めませんでした。恐がることによる恐怖が、恐怖の全てです。人が思考するものを思考することが、思考の全てであると同様です。それ故に恐がることによる恐怖は、全部の問題をその儘にして残したのであって、思考する人の背後に残したのであって、前方ではありません。恐がる時間を待つこと、殆どそれが勇気の全てです。そして、まさしく忍耐が何にもまして稀有である状態においては、スタンダールの英雄が率直に言う如く、「死刑執行人が来る時に私は少しも恐くならないなら、まさしく今が恐くても構わないのだろうか」。構わないのだろうか。これはあらゆる英知が可能であることを明らかにしています。何故なら、恐怖が何でも構わないのなら、最早恐怖ではないからです。恐怖とは肉体的な動揺ではありません。何故なら、別な風に不安が無いとしても、私たちは大変な努力をした後で、動揺を感じる事が出来るからです。恐怖の中で恐がらせるものとは、恐怖が告げるものなのです。

ここでの数々の分析は際限が無いでしょうし、全てが有益です。スピノザは言いました、「情熱は、私たちが適切な観念をそれから形づくる時に、情熱であることを止める」。どんな兵士もかくして或る時に、そうでなければ別の時に正確に計算をしましたが、あるいはもしも言えるとするなら、その時に体験するものの軍隊的な点検を行いました。それらが崇高な時にのみ人間を作りますが、問題はまさしく次のことです。「私は私以外の別のものに依存している今、私は何を我慢しなければならないのでしょうか。何処に我慢のならないものがあるのでしょうか。何処に償い難いものがあるのでしょうか」。そして、英雄の言葉は何時も同じです、「まだだ。大変に恐くなる時はまだである。どんな騒音の中でも、地面でさえも動揺しても、周囲が崩壊しても、人生は可能である。そして木陰のティティルスのように人生は心地良く穏やかであるが、私が私の処に恐らく直ぐさまやってくるであろうことについては、意見を持つことは別である」。その理屈で行くと、ティティルスも又震えるかもしれません。例えば食べたり息をしたりすることが何らかの恐ろしい細菌をまさに閉じ込めているという考えだけで、至る所で何に対しても震えている人間たちがいることを誰もが知っていました。要するに恐いと思うことは容易なのです。そして一旦恐くなると、あるいは敢えて恐くなると、対象には事欠かないのです。

私は恐怖の活動という二重の効果に注意を向けます。一つは、上記に述べた動揺による呼吸の活動が、従って叫び声と言葉が深く乱されます。でも、心臓と呼吸には神経によって調整された依存関係があるので、極めて迅速に伝わる筋肉の警報が胸や喉の筋肉を拘縮や痙攣状態に陥らせるに違いない、と理解するのが容易であることは除きます。これらの結果は喉が詰まった人のように、恐怖そのものによるのであって、何であるのかを知らなくても大変に大きな恐怖を抱くまでに至り得るのを理解させるには十分です。喉が詰まる恐怖は、可能な限りの悲劇を何でも養うのも十分です。ところが詰まった声のしゃがれたしるしがつけ加わり、これらの呼びかけは幼年時代の叫び声に戻って耳は大変良く聞こえます。何故なら人間は話すのを聞き、それから自分自

身に話すからです。そして動物性に再び覆われているように異常で見分けられなくなった声は、人間的なものの中であって私たちには最も恐ろしいものになります。従って子供を安心させるためには話しかけるが如く、もしも人が自分自身に話しかける術を知っていたなら、それは困難な状況において些細なことでもなくなります。演劇での悲劇的効果の一つとしては、登場人物がまさに自分の声に自分自身で脅えることが良くあります。

その他の効果は解明するのが容易ではありません。これらの情動の状態においては、動揺そのものの残滓である毒とか麻薬と同時に、血液が波となって一杯に浸入することになる脳が重要です。脳に関する活動と思考の流れとの間の簡潔な関係に従って、私たちの思考はその様に一度に増えるのであり、麻痺したり眠ったりする何らかの方法によっているのが判明している、と大雑把に言えます。思考の機敏さや多様性によって、従って思考を批判したり整理することの無能によるが如くに、思考する能力のあるこの注目すべき動揺に対して程々の観念も既に生まれます。それは一種の妄想です。しかしながら、私はこれらの見方を十分と考えません。もっと厳密に検討するなら、脳内の倍加された血液循環の唯一の効果は、神経系統全ての中で最も活発な循環、つまり筋肉の動揺を倍増することであり、それ以上のものは何も無いに違いありません。大変容易にそして大変悦に入って述べたイメージが、筋肉そのものの動揺とそれらの素描された行動以上のものは何も無いことを、私は多分これから説明する機会を持つことになるでしょう。精々これにつけ加えることが出来るのは、全身の動揺は恐らく感覚そのものに反応して、これらを直接的に掻き立てて、亡霊たちをこの様にして生みますが、それらはつまり解釈するには屢々困難な印象であることです。その効果は触覚にとっては疑う余地が無く、私たちには大変良く感じますが、活動そのものを認識するには極めて不十分です。同様に私たちの叫びも耳を打ちますし、もしもこう言って良ければ、現実的に幽霊を生んでいます。同種の反応によって網膜が今度は刺激されて、そこから着色された幽霊たちが最も狂ったような幻想の種になることは十分にあり得ます。

この恐怖の状態において私が取分け検討されていると思えることは、不完全であるけれども情動そのものによって、私たちが曖昧な存在であっても接触する一つの世界である確信以上の、想像上の対象は少ないということです。これらの混乱した知覚は、あらゆる恐怖に伴いますが、取分け厳密に言って、種々の知覚が恐怖を説明するために如何なる助けも無い時に伴います。そして、それは赤裸々な恐怖の中で起こるものであり、そこでは対象が全く欠けているので、私たちは恐ろしい存在を確信し、しかも何時もの私たちの探究方法によって証人を探し出すことも出来ないで、闇を聞き、手で触り、そして細かく観察するのです。この恐怖はそれ故に、対象としては一種の虚無であり、形を成さない夜であり、私たちに恐がらせるだけの別の特性を持った別世界です。私たちはここで、捕らえ処のない対象である別の人生に触れますが、それは私たちの恐怖による現実のものでもあります。そして、その様な対象は如何なる恐怖でも構わずに同一の対象である以上、死の恐怖とあらゆる恐怖が似ていても、あらゆる恐怖同様に治るものであると私は言うことが出来ます。いや寧ろ私は敢えて言いますが、それは臆病の結果であり、他の多くの恐怖以上に驚いたり苦しんだりするものではないのです。もしも行動を起こす前に少なくともそのことを考えると、何時も行動の前は容易であっても恐れることはあり得ます。何故なら、

時間と機会が決して訪れない以上、私たちは現実に関それをその時試みることが出来ないで、疲れさせて苛々させる不決断に身を委ねるからです。それに慣れて仕舞っても、ご存知の様に、この奇妙な病から雄弁家や俳優が何時も治ることはありません。況んや、まさに私たちが死なねばならないと考えると、その過程で行うべきことを想像してみようと思いますが、死ぬこと以上に行動らしい行動は何も無いので、確かに無駄になります。眠ろう眠ろうと緊張して努力することも同じ間違いを犯しますが、その代わりに信じて諦めなければなりません。死を考えることはそれ故に何時も場違いであり、それは英雄として言う場合なのです。「未だ言うてはならない」。そして、私たちは誰もが少しは臆病者であることを忘れないで私は言いますが、全てを恐れるように死を恐れるのは臆病者でしかないのです。全ての恐怖の中で最も大きくて、最も抑え難いものを、私が空しくも過小にしようとしていると言わないで下さい。実際にあらゆる戦争行為やあらゆる悲劇やあらゆる被害者たちにおいて、お分かりの様に、死への恐怖がその働きを全て中断させるには、要求や憤慨や屈辱から行うべき行為とか活発な情熱があれば十分なのです。これらの簡単な分析によっても、死ぬことの恐怖から自殺するに至っても不条理ではないことも忘れないで欲しいのです。それは私が示したかった如く、もしも恐怖よりも恐いものが無いとして、不条理なことではないのです。（完）

第二部 夢想

第一章 間違った知覚

普通の言葉で「あなたは夢を見ている」は、「あなたは間違っ

て見ている」と言いたいのです。そして、これは大変に良い言い方です。夢は人間の全生涯を長く覆っていましたし、多くの人々の見る処では覚醒時の経験よりも、今でも少しばかり大事なのです。そして夢想における威信は、どんな人でも脅迫的に繰り返される夢を恐れるために、完全に乗り越えて克服するのはのは困難です。私たちの外部であろうと内部であろうとその結果、夢が他の世界からやって来ると仮定するようになります。それから二番目の解釈はもっと凝っていて、恐らく何よりももっと危険です。神話そのものを全て感じて神々が私たちの背後にいるが如くに信じる時、神話を思うことが重荷になります。それ故に私たちは夢を取り除きます。分割出来ない巨大で善意なものの前では、唯一の状態でたっぷりとして十分な存在である、この特異さに送り返さなければなりません。

この二つの道によって、何かに辿り着くだろうと私には思えます。一方では、私たちの知覚を夢の方へ引っ張りそこに誤りを見出すことによって、決してその対象ではなくて、少なくとも私たちの怠惰に責めを負わすものです。もう一つの道は、反対の意味のものです。私たちの夢を知覚の方へ引っ張るように導くものです。それは私たちの知覚が真実のものに代わり、そして誤りのものに代わって、もう一度重荷を下ろすことです。空想上の力そのものである想像力よりも寧ろ、自由な判断力に溢れているものです。

ここでは弁証法的活動を全て追い払うようにして注意しなければなりませんし、困難に身を投げ入れることを恐れてはいけません。もしもあなたが最初から想像力に騙され易い人であったなら、そして、もしも存在しない対象に肉体を与えたなら、それが覚醒時そのものの中で細心綿密な注意力を前にしていたなら、あなたはそれらの夢を何と云うのでしょうか。従って私は山の上において、町々を玩具の様に眺め、人間たちも蟻の様に眺めます。それらは私には非常に小さく見えますので、何かを間違えています。しかしながら、全く小さな人間たちの外観が如何なる種類の誤りも含んでいないのは明白です。ここにはその外観を測る一人の観察者がおります。その大きさと、十メートル離れて平均的な人間を立たせた大きさととの関係から、極めて小さく見えるその人間がいる距離を算定します。従って私は、その人間を極めて小さく見ることが少しも無いなら、間違えることになります。そうしてオランダの霧の中で、二百歩の処にある太陽に関するスピノザの例は、同じ方法で分析されます。何故なら、天文学者は何百万歩の処に太陽を見ますが、外観を変えることは決してないからです。それどころかそれは測定し、他の外観と比べることで同一の外観のものとなり、天文学者は真の距離を導き出します。もっと適切に言うなら、最も正確に算定します。人を欺くようなこの光景には、それ故に全ての真実があります。日の出

の時の太陽が私には大きく見える注目すべき場合も同じです。私が間違っているのがまさに真実であり、外観が私を欺くのは本当ではありません。その外観を測って下さい。太陽が地平線にある時も、天頂点にある時も、同じものです。外観に拘わらず同じものです。そして、外観というものは何も無いのです。太陽はここにもあそこにも、現れるべくして現れます。それでは私たち皆が陥るこの著しい誤りには何があるのでしょうか。大きな太陽という外観は無いのです。それは想像力であり、空ろなイマージュです。それに反して感情は強く、驚きがあり、びっくりして、静かな雄弁があり、ついには屋根の上に巨大な太陽が昇るのです。対象とはその様なものではありません。外観もその様なものではありません。ところが想像力がその様なものであることを望むのです。そして私の本を読むあなた自身も、太陽とか月が大きくなる力を捨てていないのです。テッサリア地方(1)の魔術師たちは、彼らが月を沈めさせていると信じているように、あなたはそのことを信じているのです。その様なことは、古い切株に人の顔を見るように、情念による誤りです。良く見て下さい。目覚めて下さい。あなたは古い切株を見るだけです。真剣であろうと遊び半分であろうと、恐怖というものがこの古い切株を変えることはありません。その切株はあるべくして現れます。従ってあなたが、見ていると信じているものも決して何も現れません。しかしながら、あなたは現れると、反対のことを確信します。あなたは見たと断言します。その古い切株を前にしても、あなたは断言します。物語だったら何になるのでしょうか。物語りながら、あなたは何を見るのでしょうか。あなたが言うことは何も姿を現しません。私はあなたに言います。あなたは、それを見たと私に信じさせたいのです。しかし私は、あなた自身がそれを信じていると思っと思っています。あなたは夢を見ているのです。あなたは近付いて下さい。周りを回って下さい。後退して下さい。判断するのはあなたにお任せします。あなたは夢を見ていたのです。そして、これらの特権的な事例の中で、あなたは夢を再発見します。新たに木の節に人の顔を見ます。新たにあなたは目覚めますが、それは何時も同じ世界です。「精神が夢見ていたのだ。世界はその夢だったのだ」。このラニョーの言葉を、私は簡潔な形で何度も何度も繰り返して言いましたが、そのやり方は伝統的なものに属しているのです。これ以上に私を驚かせたものは何もありません。しかし、この詩篇には理解すべきことが残されていましたし、何時も理解すべきことが残されているのです。一つの世界しかなく、そして何時もあるべくして姿を現しています。そこでは想像力は何もつけ加えません。

その次には他の事例があります。今度は眠った人が目覚めますけれども、外観が変わっているように見えることもありません。私は、火事だと叫んでいる声を聞く夢を見ます。私は、目覚めてからも人が火事だと叫んでいるのを聞きます。全てが夢と一致しています。騒音と人の動き、煙、炎、そして昼間になると黒焦げになった廃屋です。私は夢を見ていたのでしょうか。この事例では、私が見たのは事実と申し分なかったことは明白です。それでは私が見た夢は如何なる意味があったのでしょうか。その意味では恐らく、私はもっと他のことを知覚したと思ったのですが、その心配は調べると消えていました。その意味では取分け、私が信じたこと以上は決して調べませんでした。探すこととは何でしょうか。それは行動することです。それは事物の周りを

回ること、事物に触れたり叩いたり鳴らそうとすることです。ですから知覚の中で変形させることより他に夢についての調査がある訳では決してないのです。もしもこの観念を良く理解したなら、仮にあるとしても最も秘められたものの一つであり、最初に現れたものとして夢をその儘にして置くのを目指して、実際には未だ現れない外観を述べるように導くものである夢についてのこれらの調査を、人は大いに笑うでしょう。そうすれば私が思考しない時に、私が思考していることを常に言いたいと思うことになります。これでは私は神託を述べるようなものです。つまり私が先程騙されたように今も又騙されるまで、訓練して私を狂わせるようなものです。悪魔を見たのは何時も臆病者の話であり、恐ろしい顔を見たから怖くなって両眼を塞いで逃げ去ったのであると彼は言います。それでは彼は何を見たのでしょうか。足を止めて眼を開けるだけだったのです。見るものを知ること、そして先ずは見ているものに関して自分に尋ねること、これ以外に見る方法は他には決してありません。眼を覚まして調べる人間が自らに与える叙述以外に、夢の叙述は他にありません。私は、あなたにその観念を追うに任せます。英知という稀有な果実のように、この種の格言は少なくとも記憶に止めて置いて下さい。それは見かけの対象と、現実の対象という二つの対象などは決して無いのです。どんな対象も見かけと現実が一体となっていて、ついには夢を判別させるのが覚醒なのです。

或る雨の日にサン・ラザール駅で、そんなに昔のことではない頃ですが、私は雨の下で輝いている線路が突然に斜めに向けられているのを見ましたが、まるでその時は列車が大通りへ消えて行くかの様でした。私はびっくりしましたし、同時に不安の気持ちを覚えました。そのことは良く記憶に残っていました。私が立っていた位置が怪しかったのです。この種の誤りには常に僅かな眩暈があります。つまり痙攣的な驚きへの用心です。実際には私が平行して輝くものを見たのは、濡れたトタン屋根でしかなかったのです。私は全てを元に調整します。私は何も変わっていないことを確信します。この短い夢は、私が今しがた調査したのと同じ世界をまさに対象としていましたが、逃亡して開始する臆病者の方法によるのでないことを理解して下さい。

崇拜されたり恐れられたりするにしろ、以上に倣って幽霊を判断して下さい。人が見たものが消えたが、二本の木の間に一瞬見たのは耳の垂れ下がった雌鹿で、それが消えたようなのだ、とあなたは何時も自問することが出来ると考えて下さい。私が見たと信じたものを、もう一度その姿を見せる好機は私には何時も無いのです。従って私は疑うのを学ばない限り、あらゆる神を見ることが可能です。そして疑うこととは、一方とか他方を疑うことではなく、全てを疑うことであり、あらゆる場合を疑うことです。それらの疑っているのを見せるのは、拒否したり否と言ったりする判断力です。決して信じてはなりません。そして信じることとは、人が信じ込んでいるものを信じていることなのです。（完）

(1) テッサリア地方は、ギリシア中東北部にあり、東はエーゲ海に面している。

第二章 夢の対象

広大な存在が私たちには不断に存在しています。私たちはそれを張り付けたり、ぴったりくっつけたりしている生きた肉体という布によって繋ぎ止めていますが、更にその上、不明瞭に混ざり合っています。何故なら、次のことに注意しなければならないからですが、遠くのものも近くのものも私たちの行為にしか関係していないからです。一つの星も私たちは触れることが出来ないで、その意味では大変に遠いものです。しかし、それを見る限りは遠くはありません。いや寧ろ、それらの距離は覚醒の成果であり、私たちの自制された出発によって、謂わば支えられて膨張されているのです。しかし眠っている時間には周囲の世界は私たちから非常に遠くへ立ち去る処でなく、私たちの上に帰って来て、何らかの方法でより一層近く握り締めたりすると言わなければなりません。砂浜には絶えず波が打ち寄せる如く、あらゆる種類の波が私たちの上に絶えず広がり、触覚や聴覚や嗅覚のように塞ぐことの出来ない諸感覚に働きかけています。それ故に眠っている人の鼻孔の下を薔薇の花束が通っても、少しも夢を変えないと言うのも決して本当らしくありません。もしも私たちが目覚めさせるものに気付くことが出来たなら、この点を多く私たちは一人ひとりが言わなければなりません。そして最初の外観がその知覚を手に入れるのでしょうか、一般にはこの最初の外観が立ち直ります。正確に言えば、知覚という感覚を手に入れます。従って私たちはその時、「私は夢を見た」と決して言わないで、単に「私は突然の光と騒音と煙で目覚めた」と言うだけであることを理解して下さい。

それ故に世界の対象が、私たちの夢の実質であるのは明白なことです。私たちの夢はそれらの対象とは別のものを決して持たない、と私は言うまでになるでしょう。しかし、この指摘が理解されるには、教義に関する大きな回り道が必要です。情愛とか感動の形式に基づいて何時も想像力を知覚に結び付けるようにならなければなりません。対象の一部を覆っている他の対象の形式ではありません。例えば、私は落下しないという感覚においても、落下の眩暈による想像的なものがあります。そして、この想像力は情愛によって現実のものになります。つまりそれは防御と深淵を穿つ恐怖の感情によるものです。もしもこの観念を絶えず辿って行ったなら、想像力の無い知覚は無いことがお分かりになるでしょう。従ってもう少し難解ですが、知覚の無い想像力というものも決して無いことが理解されるでしょう。そのことはもう一度言うことに戻りますが、この世は絶えず現存し、私の反応も情愛も絶えず変えているのです。従って私自身の動揺は、この世を示さないと同時に、隠すことになるに過ぎません。発見するための何らかの対象が、それらの動揺を変えさせるための力を私たちに与えているのです。それ故に霧や夜の中に私が幽霊を見るとしても、あるいは両眼を閉じて幽霊を見るとしても、幽霊を部分的にでも説明するものを周りに発見するための何ものかが常にあります。しかしそれは月影とか、瞼にかかる一条の光とか、冷たかったり熱かったりするものが軽く触れるようなものです。私は今の処、身震いやちくちくする感じや身体の活動を気にしていませんが、それらは目覚めている時よりも眠っている時の方が止まないものであり、如何なる知覚も決してそれらから離れません。私たちが服を着ずには置かないものの周囲の対象は、そこでは常に何ものかのためであると私は単に言うだけです。例えば、私たちの肉体は重みが無くなることは決してなく、従って抵抗する何らかの物体の上に絶えず押し付けています。私たちの肉体は絶えず空気に触れていて、絶えず無数の振動が移動していると推定されるこの大気中に浸されない訳には行きません。それ故に世界を考慮に入れずに、何らかの対象を構成することが出来ると仮定するのは本当らしくありません。

その上、観察にも事欠きません。例えば襟首に軽い刺激を受けて、革命とかギロチンの夢を見たと言って目覚める様な観察があります。その注釈は対象を遙かに超えています。しかし、それは私たちの知覚にも起こることです。私たちはとんでもない解釈の後でしか一つ一つの事柄の真実を判断しません。それらの解釈は殆ど何時も忘れませんが、常に忘れる訳ではありません。木の葉が鳥に受け取られ、移動する影が二十日鼠になり、雷鳴が橋上を走る列車の車輪の騒音になり

ます。取分け、看板とかポスターの文字を読む時には、屢々馬鹿らしい滑稽なことが生じます。或る日、私は金文字で〈ジャムのサロン (Salon de confiture) 〉と読んでいましたが、その看板の文字を全て読み終えた時、私は既に半分程本当らしい文字を推測していたのです。看板の一部が枝に隠れていたのです。要するに私は常に多くのことを見抜いています。私が何も見抜かないような知覚は最早、知覚にならないとさえ言えます。例えば、穴に落ちる前に落下を見抜くことは、穴を知覚することになります。自分の前に貫通出来ない壁を見ることは、見抜くことになります。しかし、私たちは屢々当てずっぽうに見抜きます。私はモーターの騒音を自動車とか飛行機、あるいは飛行船とかモーターボートと関連付けてよく間違えます。夜の騒音もよく間違えます。慎重さからにして、好奇心からにして、私が飛び込む探求を真の知覚と私は呼びます。その真の知覚が目覚めた人間のものなのです。

反対に、夢は眠っている人間の知覚であると私は言おうと思います。眠る幸せ、眼を覚ますことの拒否、私たちがこの時あらゆる心配に与える休暇、この時私たちに近づく恐ろしいものは何も無い予断のことを考えてみて下さい。もしも私たちがこの無関心や頑固な無頓着に身を固めていたなら、注意を払いたくないと思うあらゆる物事に起こるのと同じに如何なる知覚の試みも、正しいと見做すようになるのは明白です。しかしながらこの解釈はそれ自体が何らかの探求の開始、つまり何らかの目覚めによるものでしかありません。私たちが語る夢は、本当の目覚めによって全てが終わるのも、どうやら本当のようです。ここでは既に示された観念が再発見されるでしょう。もしも語ることの幸せも読み上げられることの熱狂も、私たちの裡に無かったなら、私たちの夢は従って危険を伴っていて、直ぐに立て直される知覚として容易に認められることでしょう。私たちはそこに達するでしょう。いずれにせよ既に言った様に、誤りは何ものでもありません。身動きする影は、私が信じていたものとは最早何ものでもない様に、夢は常にこの何ものでもない文字を齎したり、あるいは最早何ものでもないものになります。しかし、私が信じたものは、その影を変えることはありませんでした。もしもそれを正面から見詰めたなら、その様なものは夢のイメージなのです。私たちが物語る時は、それが呼び覚ますための遠い昔からの方法であり、姿を現す地点でそれらの影を見ても、眼の脇では形の定かでないものでしかありません。オルフェウス(1)に似て、私たちは背後に何らかのエウリュディケを連れ戻します。しかし、私たちには彼女を正面から見詰めることが禁じられています。要するに、夢には経験が少しも無いのです。あるいは寧ろ、この経験は覚醒そのものであり、知覚そのものです。ここには注意して下さい。何故なら有名な観念論が、夢の中に確認を見たいと思っても間違って失敗するのはそこからであるからです。間違った知覚が確認されないものであり存在することが出来ないものであるように、夢も確認されないものであり存在することが出来ない、反対に私は言います。換言して話すなら、外観上だけで存在するものは決して無いのです。何故なら無限の存在は、何らかの外観に基づいて常に認識されているからです。存在と外観の二つの言葉はお互いに関連しています。

私たちはそれらの言葉のうち一つの言葉を捕らえます。夢見ることは幸せな状態であり、止まっていたい状態です。それは一つの信頼を前提にしている、対象の上で少しも休みませんが、それが自分自身であり、それで十分です。眠りのようなその夢は、私たちが幼年時代へ戻します。それ故に夢は幼年時代の思考です。幼年時代の思考は私たちの思考であり、夢以外の他のものの上で再び休むことになるのがこれからお分かりになるでしょう。夢は、本来の意味で幼年時代の状態そのものではありません。私たちの思考は眠りから生まれ、そこへ戻り、再び力強くなります。一人ひとりの裡での新たに夢は、私たちの思考の青春である夢の中で目覚めます。正面からの視線と、決断した行為により、その覚醒の中で成熟します。しかしながら、夢は依然としてそこにあります。その意味においては詩人が言うように、世界の布地を作っています。何故なら、位置や距離の私たちの知覚が立ち直る中で間違えなかったとしても、何になるのでしょうか。空間に穴を開けることは、私が十分な労働で報いることなく開始して終わる想像上の旅なのです。労働は反対に視覚を縮めて、その努力の中では最早推測することがなく、地上のどんな光も消

して仕舞います。何故なら遠景が無くなると、近景も無くならなければならないからです。月が地平線に接近します。すると地平線も全てのものに接近します。それ故に私たちは目覚めることによって技術的と呼ぶべき状態に赴き、稀に光る閃光によってしか生まれないものしか最早見ません。眠りには他に習慣とか風習のものがありますが、段階に従っていて、私たちの知覚の中では老年なのです。それは「私は知っている」と言うことですが、人が知っていることは従って最早知らないのであり、そして直ぐに私は最早知らないことになるのです。その様なものは年齢にとっては夜なのです。（完）

（1）オルフェウスは、ギリシア神話で亡き妻エウリュディケを連れ戻しに冥界に行くが、後を振り向かないという禁を破ったため妻を永遠に失った。

第三章 人間の肉体

眠りの時も常に活動していて、生命の機能のための呼吸と血液循環を行うこの肉体を、私は忘れたと思っていました。多分、夢の中でも常に活動していて、そこでは腕も足も、そしてついには全ての筋肉が常にそれらの動きを開始し、周囲の対象によって筋肉そのものが扇動されます。例えば眠っている人は、自らの体重によって居心地が悪くなると寝返りを打ちます。毛布が体に巻き付いて突然に自由を失うと、もがきます。もしも強力な光が瞼を通して眼に入ってくると、手をかざします。これらの動きは多少なりとも私たちが目覚めるのと同じ動きです。

今ではこれらの小さな動きも、又大きな動きも感じられます。私たちの最も幻想的な夢も、最初は私たちの肉体はその本来の活動によって推測を満足させるものを描写することが重要です。そして何も忘れないようにするために、五感を一つずつ点検するのは時宜を得るものです。私たちの肉体が幾らかの多様性を提供することが出来るのを理解するには、嗅覚の名を挙げれば十分です。味覚にとってもやはり明白で、ここでも又失望の印象や生命が保持したり変えたりするに十分である他のものの印象へ、注意力が容易に向かうものではありません。吐き気の始まりも推測を目覚めさせます。従って、私たちの夢である知覚の最初の試みに向けることが出来るのは明白です。聴覚にとっては外部から受け取るだけですと言いたいのですが、決してそうではありません。私たちが自分自身の声を聞くのは明白ですし、更に多くの人々が寝言を言うのは知られています。疲労と休息によって支配されたこの機械的な話は、私たちの夢を逸脱させて、しかも奇妙なやり方で大いに貢献するに違いありません。或る観察者は四つの夢を語る事が出来ましたが、結局は目覚めていた時に発音された同一の言葉に全て似ていて、最初は間違った発音によって歪められていました。barreau（椅子）とballon（気球）とbaron（男爵）のような言葉が試みられました。探していた言葉はBaronでした。それは眠っていた人が、その日の午前中に訪ねて行かなければならなかった人物の名前でした。その後は、あなたのお望みのものを想像して下さい。祭日でも監獄でもライオンの檻でも、あなたがお好きなように想像して下さい。語り手にも知ることが出来ないからです。彼も又、何処まで信じて話をでっち上げているのか分からないからです。私たちは結構何時でも夢を見ていますし、夢の状態に再び身を置きたい時は尚更です。

声の他に私たちは呼吸の音も又聞きますが、それはぜいぜいという音になりますし、時々音楽的なものにもなります。そして多少なりとも血液の脈拍の音も聞きますが、主として少し鈍い音です。従ってそこには事物の沈黙における楽音と噪音の世界があり、私たち自身の裡には嵐もあります。

視覚に関しては、眼による生命そのものを齎すイメージの観察が余りに困難であり、そして人間のうちでは最近のことであることに注意しなければなりません。ゲーテは、これらのはっきりしないが屢々色彩に溢れたイメージを細かく描写しましたが、それらは眠りが近付くと閉じた両眼には夜が満ちています。それらは水蒸気の渦巻のように絶えず形を変えて動く絵です。屢々彩られて活発に輝く一点が広がり、そして流星のように消えて仕舞います。これらのぼんやりとしたイメージは、眼が見た最後の対象を何時の間にか描いていると私は全然考えません。それらの対象が痕跡を残さないという訳ではないのですが、私はそうとは考えません。誰もが紫色

の太陽を見たことがあります、それは日没近くに不注意から一瞬見た黄色の円盤のイメージです。ここでのイメージは補色的なものであり、疲労の法則にしたがって形づくられます。ところがその対象は継続した刺激に基づく独自の直接的イメージを残します。明るく照らされた窓にしる電球にしる、その対象を見ながら経過と変形を観察するのは賢明です。光との接触で受けた後で、もしも両眼を閉じたなら、黒い視界で最初に気付くのは色彩が弱められた対象です。この様相は直ぐに溶けますが、それと同時に驚くべき変形を被ります。それまで黄色だった電球のイメージは紫色になります。窓のイメージは、色濃く照らされた部分と薄い微光に照らされた格子を示します。同じ原因によって目をそらしたなら、ストーブの管による幽霊が灰色の壁に白くなって現れます。消え失せるこれらのイメージを見分けると、それはどんな人にとっても重大な瞬間です。しかし、継続する変化やその外観上の脆い強さによって、自分自身で人から知らされることもなく認識するのは、多分に稀に起こることです。反対に待っている時は、大変良く認識します。そして以上は、獲得されて伝えられる英知の価値を理解させられる事例です。これらのイメージの起源と変化の法則を完全に知らないでいた時に、人々が時として神々を見たとしても私は驚きません。これらのことを思い出しながら私は、眠る人の眼が重ね合わせられた沢山の印象に比例して、それと同時に眼の組織内の血液による脈拍や循環による効果によって刺激されるのであると思います。閉じられた両眼の夜の中で、如何に夢が描かれるのかをここで観察して下さい。あなたは存在しないものを容易にそこに見たり、同じやり方で葉の付いた枝にひげを生やした人物を見たりして、大変に驚くことでしょう。これらの姿形が絶えず変化することで、幽霊たちが逃亡する結果が生まれるだけに、それはそれだけ益々びっくりさせられます。色の付いた斑点が屢々広がることで、何ものかが近付いて来る幻想になります。私は読者に、間違えた知覚を説明した処へ戻って欲しいと思います。私たちはこれらの逃亡する外観を変える方法を何も持っていないので、少なくともここで調査を行うことは出来ません。私たちに出来るのは待つことだけです。良く見たならば、待つという情動は夢の中でも一般的なことであるのがお分かりになるでしょう。

行為が無い訳ではなく、寧ろ行為が開始されます。触覚に達するには、私自身の肉体が重さの圧力とか落下の如く、あるいはちくちくしたり、熱さと寒さ、無数の不快感、鈍痛であったり一時的であったりする軽い痛みを主として被るにしる、事物や人間にぶつかって反応しようとして握ったり叩いたりするにしる、動揺の中に私には一つの世界があることを確認しました。殆ど全ての動きを妨げる掛け毛布の束縛は、反対に行為がむさぼり食う表象に目覚めるのに少しも貢献しません。従って私たちは夢の中で屢々、走りたいと思っても出来ないことを理解します。これらの原因によって、あるいは何かに至る眠ることの先入観によって、私たちは精力的な見物人ですが、取るに足りない見物人です。私たちは俳優ではなく、寧ろ開始されても慎重な行為に震える者です。経験よりも情操とか情動の方が豊かです。もしも反省によってここで見物人に成ることが出来たなら、私たちは肉体の愛情による秩序に従って、思考する術を知ることでしょう。その上、私たちが夢を見るのを思考することがなければ決して夢を見ませんし、その思考が高度な反省を試みることによって、時々思考そのものが現れているように思えます。まさにそうでなくてはなりませんし、そうでないなら夢は直ぐさま再降下することでしょう。ここでは、対象よりも寧ろ欠いているのは熟考であると多分言わなければなりません。私たちの思考は愛情によ

って調整されているのであり、それらはまさに思想です。決して事物の秩序によっては決して調整されません。それ故に見物人には、語られた夢想よりももっと良い秩序で調整された者はおりません。そこで気付くのは、人が注意するや否や、一つの対象から他の対象への驚くべき旅や、不可解な過程に気付かされます。その機械的な行程は観念連合との名称が付けられましたが、非常に下手な言い方であると思います。偶然の連鎖は決して私たちの観念に無く、寧ろ私たちの愛情とそれらの愛情に随行する知覚を必要とする肉体の活動の間にあります。例えば、もしも私が両手を動かしたなら、両手を壁にぶつける様になるかもしれません。そこには思いがけない新たな対象があり、ここでは完全なものです。そこから私は、戦闘や敵という何らかの観念を生み出すでしょう。あるいは暫く緊張していた筋肉が疲労から弛みます。その様にして態度は突然に変わります。そこから新しい物語とは、労働や疲労で隠された関係によってしか古いものと結び付かないものです。私たちの間違った言葉も又、大変良く行為が結び付く良い例ですが、それらは不条理な思考の生まれる良い機会でもありです。何故ならchapeau（帽子）と言うことからchâteau（城）と言うこと、prière（祈り）と言うことからpierre（石）と言うことには大きな差異がなくなり、私たちは目覚めている時の話においても、その様な間違いを屢々訂正しなければならないからです。言葉と別の対象をその時持つから訂正するのです。しかし夢において私たちが発言したり感じたりする言葉は、私たちの思考に示されている対象の中の主要なものです。そして、言葉の活動においては疲労や休息が、突然の断絶や方向転換や要約によって表現されるのは明白です。私たちの活動と対象の偶発的衝突から生じるものと一緒に、これらの出会いを結合して下さい。あなたは夢の不条理を、最も注目すべき性格としてとっくに説明するでしょう。

しかしながら私は、私たちの思考におけるこの説明し難い断絶の原因が既に別にあると思います。私たちの活動がどんなに規制されていないとしても、それらの活動は既に私たちの愛情に従った一種の脈絡を持っています。怖いなら逃げようとし、怒ると叩こうとします。行為にしろ話にしろ、明らかに一連の慣習があります。従って目覚めの始めにおいて、私たちは主として自分自身を相手にします。程々のドラマをもう一度演じるに違いありませんし、その物語を更に磨きをかけることにも事欠きません。それ故に私たちは、夢の中に一種の一貫性を与える数々の断片を見出します。しかし、それにも拘わらず視覚によるイメージや総や縁飾りや彩られた斑点は、背景を作り、生命組織に従って広げられて変形されますから、私たちの活動に従うものは決して何もありません。目覚めている時には、ですから言葉がそれを示すように、殆どどんな予測も視覚が齎します。しかし普通の忠告者は、牧草地や海や夕陽や火事が構わずに私たちの戦いや競争や雄弁の後を次々に継ぐように、純粋な生物学的法則に従って緑を赤で消して仕舞い、こうして私たちを嘲笑するのです。要するに視覚は、今では情熱の遙か下方にあり、情熱を秩序立てたり調整したりする処ではなく、砕いて仕舞います。これらの驚くべき幻想には、私たちが恐がらせるよりも寧ろ安心させる働きもあります。何故なら、もしも私たちが何ものにも驚かされないと決意しても、それにも拘わらず一連の私たちの情熱や行為や話は、その心配によって十分に目覚めさせているでしょうし、それは良くあることであるからです。しかし時々背景を変化させながら、私たちの向きを変えて、理解不可能なものによって幸福にも子供の状態に投げ入れることもあるからです。かくして、腕に抱かれている子供は高度な力の命令によって、

一つの風景から他の風景へ突然に移ります。そして私たちはこの方法によって、早くから自分を慰めることにさえも慣れていきます。それで人は夢を見て喜んでいるのです。しかし子供が幻想的な観念を形づくるためには、眠る必要がないことをここで気付くのは時宜を得ています。子供の従属された生活と知覚は、子供自身の行為にとって大変に奇妙なものであり、幻想的な観念にとっては十分にこと足ります。従って神話とは夢が自然に神話を確認しますけれども、ホメロスにおいてお分かりの様に、夢とはもう一つの別の基礎を持っています。（完）

第四章 巫女

人間が、近付いて来るものやこれから起こるであろうことを見抜くのを目指して、事物や動物を観察することは、少しも驚くことではありません。人間が人間に意見を求めることは、更にもっと自然です。しかし眠っている人間に意見を求めること、眠りの中で生まれたしるしを文字通りに真に受けること、同時にそれらのしるしを解釈する学問や技術を生み出すこと、従って最も率直な信仰が沢山の物語に見るように術策を弄したり精巧な裡に映ること、そこには生きたの屈曲を与える人間の一つの状況があります。そして、政治家たちの極端な老化が子供の素朴さに接合して、上方にある種の割接木になります。神託の事実そのものが既に神託です。しかし、この不思議な働きを解明しなければなりません。ソクラテスは、彼が言う処では夢想の中に最高の思想を発見して身を投じましたが、それはより一層堅固で注意深く、最も良く身を守った自分自身を取り戻すことによって弁証法的なものから逃れ、そして更にプラトンの『メノン』の現実の無意識的な表象を前にして、直ぐにあらゆる未来にとっての真実になる数々の夢想による体系さえも作ることなのです。しかしこの活動の中に、目覚めそのものや本質的な反省をどんな人間にも認めないのは誰でしょうか。又、あなたもお分かりの様に、同じこのソクラテスはあらゆる意味で詩人たちの夢想をひっくり返しながらか、何時も聖なるテキストを鳴り響かせます。その時は言葉が生まれたり滅んだりして放浪する探求にも嘗て無かった程に自由です。デルフォイ(1)の神託は、ギリシア思想の中心でしたし、初期のものは思想の中の思想でした。あの自由な幾何学者たちは神託によって生きましたし、異邦人たちも皆、最も深い闇に光明を求めてここにやってきましたが、それはソクラテスの熟考や考察するプラトンの旅よりも前に、それらの巡礼の中で描いたものです。ギリシアの奇跡は、既に思考されて音楽や体操によって準備された肉体の中にあります。それは人間の本質が一度で充足するためでもあります。オリンポス山はそのことを証明しています。そして彫像と神殿と盲目のあのホメロスも又、全てを知っています。別の異邦人でもある私たちも又、神託へ行くことはないのでしょうか。

私たちの夢想は私たちの神託であり、何時も私たちの神託になるでしょう。恐らく、夢を見ている眠る人の姿勢であるこの待っている姿勢によって、私たちはこの時に熟考による唯一の未来像を持つこととなります。何故なら、探究や労働や企業や策謀や進軍によって私たちが作る未来にとっては、殆どが思考することが出来ないからです。未来は対象ではありません。それは行為そのものによって曖昧になり、行為そのものによって不可知なものになります。剣が私の方へ突き進んで来たり、台車が動いて轢こうとします。私は感知して、飛び退いて逃げます。未来は作られます。もしも未来は事実であると私が考えたなら、私は死んでいました。しかし、私の夢想の中ではその様なものではありません。肉体の姿勢そのものが作るのは、私たちは行為を離れて自らを感受しますし、危険の中にあっても見物人でさえあります。そこから私たちは決してマホメット教徒でない時にマホメット教徒になり、あるいはこの無頓着は幸福であり、それが眠りに着くことが出来る唯一のベッドになります。それ故に私たちの無謀な行為が無いなら、世界が自ら齎すものを知りたいと私たちが思うなら、それは恵まれた状況です。夢想による幻想は、これから起こるしるしを齎しますが、それは私たちが何かを行うという訳ではなく、何も行わなか

ったとしても齎すものです。以上のことから、あらゆる神託に共通したこの観念には、有効に行動出来るための何かが無くても、有効に行動出来る何かに従えば、その神託には夢想のように聡明さが行使する何かに基づいた証拠になるのを知る何ものかがあります。それらは正確に言うと言言ではありません。寧ろ私たちの願望と計画が、同時にそこに障害と支援を見出すものです。状況が感知されても同じことが起こります。それらを見無視することは出来ません。無視すれば狂うことになるでしょう。だがその上更に、一つならず忠告を与えます。同様に夢想も神託も本来は混乱した曖昧な何ものかです。それらは審議に向かいますし、決して尽きることがありません。この様にして夢想の豊かさと多様性と曖昧さが現れて来ます。それはカオス（混沌）です。当初の認識であり、そこからはあらゆる認識が自然に生じます。世界の青春のようなものです。

既に読者は恐らくお気づきのことと思いますが、私は無知から科学へ直接導く技術者の道から遠く離れて、古い小道を通して何らかの方向へ読者を導いています。もう一つの歩みは抽象的であり、誰にも決して教えません。精神にとっての通路は一つしかありません。それは夢想から知覚へ行くものであり、常に世界の中央にあり、世界以外のものは何も認識しないものですが、始めから全てを認識するのです。人間は他のものと関係無く先ず一つのことを認識する、というのは決して真実ではありません。その様な認識は経験の中には決して無いでしょう。最初に結び付けられるものしか分離させることは出来ません。従って私たちの認識は、どんなものでも自ら目覚めているものです。そして、全体から部分へ取りかかるのですが、寧ろ人間の肉体を一通り見れば分かるように、一部分を孤立させることは決して出来ないで、全体を発展させながら毎日自ら目覚めているのです。しかし他方で、精神が肉体とその周辺の世界とは別ものと信じる人々は、演劇上の人物のように精神に一つずつの観念が這入って来るのであると考へたがるのです。実際に注意深く見たならば、一つのもの観念はそのものから全体までが正確に関係しているのがお分かりになるでしょう。そして、最も明瞭な知覚によって、以前の夢想もどの時代の夢想も認める結果になります。私たちは〈魔術師たち〉と別な風で考へる訳ではありません。只、もっと良く考へるのです。科学は夢想の鍵でしかなく、別ものではありません。何故なら、それは病んで死ぬ月も再生し、月と共に草も髪も成長させる夢想であるからです。ところが天文学上の月も、月そのものであり、私たちの船と私たちを容易に肩で持ち上げる潮の流れは、月の影響を受けた狂人が信じているかもしれなかったことを越えて、私たちを狂人にさせて仕舞います。要するに私たちは、感情全体で全てを最初に知ります。そして、そこから思考するのであり、夢想によって常に支えられています。そのことをコントは他の言葉で説明したのですが、知覚というものは先ず神学的であると言いました。私は、どんな認識も目覚めている、と言う方が好きです。以上は神話の中の一つの神話ですが、自然は姿を現しながら、殆ど〈先験的に〉姿を現しながら、私たちの夢想が真実であるこの形式に基づいて何らかの批判に答えています。

人々が、如何に〈巫女〉の処にやって来たのか、私には分かりません。いずれにしても、そこにやって来たのは事実です。恐らく、一つの夢想の物語が必ず選択されて整理することが出来たため、自然とそこから出発しなければならない豊かなその対象を、精神に高めていることに気付いたからです。人々は直接的で謎めいたこの対象を見出したいと思うのでしょう。だが、それは出来ません。目覚めることと眠ることを同時にしなければならないからです。誰も自分を予言することが出来ません。それは二重でなければなりません。そうして提示された広大さをそれら夢

想に表される間に、それを覚えて観察しなければなりません。ところが、私たちが些細なことのように思っていた状況を屢々無視しても、その多くが重要であったことをその後、もっと後になってからの出来事から分かるように、考えることは選ぶことであるのを経験が教えてくれます。自分を余り信じることがなかった人間にとってはその様なことが繰り返されて、屢々後悔します。占いは何時の時代も深い瞑想の対象であったことを認めなければなりません。恐らく最も古い生理学者たちは、人体全体というこの小さな世界の中に、大きな世界が要約されて示されているとの考えを持っていました。従って人が感情全体を選択しないで分割もしなければ、どんな真理でも含んでいることが可能なのです。

眠る人間は従って全て一緒に、周囲の変化も生命の雑多な活動も受け入れます。目覚めている人間は、選択したり止めたり拒絶したりしますが、大胆であり永遠に行います。かくして自分自身の激しい苦痛と折り合います。そこからピュティア(2)やシビラや予言者たちは、私たちのために夢見るのであって、彼らのためではありません。巫女は語り、そして如何なる選択も無く振る舞えば十分です。それは私が知らないで求めることが、予言の動揺の中に閉じ込められていると確信するためです。いずれにしても、これらの現存する事物はここでは共鳴器の中のように表現されるのであり、怒号の裡に集められれば通常の行為にとっては十分でも、その他のものには無言で習慣上の外観を見失うことになるのは事実です。都市を燃やすことを考える者に、都市は何が言えるのでしょうか。都市はこの思考を拒絶します。全てが占拠されて耕作されて整理されているこの世界において、事を始める前には繰り返すことしか告げないこの外観を解体したいと思うことを誰もが知っています。金を創り出したい化学者のように、基本要素に戻ることです。そして、私たちの夢がこの驚異的なカオスを私たちに与える時、それは私たちに宝が示されるのですが、直ちに隠されるようなものです。ところが麻痺しているピュティアはこの組織を破壊し、それらの基本要素を混ぜて自らも生まれて来る可能性に混じり合いますが、そのことは何も知らないのです。読むことは私たちにあり、そして人間のあらゆる慎重さがここに収斂されます。理性は狂気の中に対象を探しますが、結局のところ発見するのは反対のものです。全てが言われていますが、全ては理解し続けます。そこからの術策は驚くべきものですが、決して神を侮辱したりせず、反対に敬います。何故なら、神が言うことは私たちを通り過ぎ、従ってその神託はまさに幾つもの意味を持つからです。神託は世界とは別な風に決して私たちに話しません。私たちにこの世界全体を返してくれます。神託は私たちが決して考えない別の選択、あるいは寧ろ選択するための別の機会を与えてくれます。だが、選択は私たち任せです。かくして詩人自身にとって些か巫女でもあります。詩人の夢において最初は何も気に入りません。反対に全てが最初の混乱の中にあります。そして、全てが新しく不可解な何らかの方法で屈折させられます。全てが謎です。それなのに多分、神託無しで生きる私たちは別です。現存するものは時々どんなものでも日常生活では持ち損ねますし、最早私たちの貧弱な企図をそこに見出すことはありません。古代の人々は、神託による間接的方法によって、この創り出す技術を体系化しましたが、神託は思いがけない対象や、外観として問題とは無縁な対象に注意を向けるものでした。それは信じる機会ではなく、新しく神聖な変わることの無い与件の抵抗によって懐疑する機会でした。それは習慣によって、その習慣を砕くことでした。それは精神を異常なものに投げ入れることで

した。そして、その様にして批判の力を誤りから全て守って、最高点へ持って行くことでした。ここには物語に見られるような子供じみた盲信とは反対の、成年男子としての英知が示されています。物語においては全てが予告に従って起こり、全てが予期されて調整されます。右へ三歩歩き、或る動作をして、言葉を発すると、岩が開きます。これらの素朴な観念は、夢よりも子供の時の経験によるに違いないと私は思います。お伽話は常に法則を探し求める抽象的な理性を対象としていて、仕えることなど我慢がならないのです。夢は成年男子の注意力として、もっと価値があるものです。何故なら法則は隠されているからです。題材は煙を出して沸き立っています。それは創造する前のカオスです。あなたは格言集によって、あなたも世界も間違っただけ認識します。そこにあるのはお伽話であり、良い人は常に良く、悪い人は常に悪いのです。もしもあなたが全てを知ったなら、あなたは自分を変えられるでしょう。それ故に野心を持った人は、神託を開きにやってきました。そうしてギリシアの奇跡によって彼は一緒に二つの答えを受け取りました。一つは、答えるどころか反対に全てを質問にして仕舞うものです。盲信は直ぐに、その反対のものである探究と懐疑に目覚めるからです。もう一つの答えは、寺院の切妻壁に書いてありますが、「汝を知れ」と言っていました。私たちはこの最高の調和を目指して展開して来ましたが、再び見出すことはなかったのです。（完）

(1) デルフォイは、アポロンの神託がなされたギリシアの古代都市。

(2) ピュティアは、古代ギリシアのデルフォイでアポロンの神託を告げた巫女。

第五章 物語

人間の歴史で大きな出来事とは、人類が見たり触れたりしたことよりも、語られたことを聞いて信じたことです。この驚くべき問題を正面から見詰めると、それらの間には同意する熱情にもなっている小さくもない原因が見えて来るのが分かります。あるいは換言するなら、意見を同じにする喜びが小さくはないことです。しかし直接的な経験よりももっと自由に、これらの物語に与える信用という真実の解釈は、私がここで少しも展開したくない認識上の教義に依存するのであり、単に思い起こすだけです。どんな認識も一つの対象を前提としているのであり、それはそれらの題材の中で全く新しいものにしか無知であることが出来ないものです。現実の認識は現存する対象を前提にしていますが、これは滅多に人が考えないことです。何故なら持ち続けている経験は、考えて見れば行われた経験と同じ様に正しいものであると受け取られているからです。そして、それは思い出について大変共通する錯覚から齎され、情熱に駆られた人々は全てに幸福になるのです。何故なら彼らは何時も見ること信じ、又そこに存在することも信じ、結局のところ呪いによって思い起こすのですが、それは古い方法であり、良く周知されて考えることでは不十分であるからです。私たちはその中心にあります。そして、思い出によって柱廊の円柱の数を数えるのを良く望むことを、パンテオンのことを考える者に尋ねるべきです。この簡単な質問は苛立たせませんが、語られることについての疑問は語り手も苛立たせることを良く考えて戴きたいのです。もっと適切に言うなら、聞く者はそこにいて見ていると信じているのですが、見ることが出来ないのです。ここの処を良く見詰めましょう。彼は見ることが出来ないのです。そして、そのことに苛立っているのです。

別な風に表しましょう。あなたは、彼を疑うように促します。でも、彼は疑うことが出来ません。私はもう一度繰り返して言いますが、疑うためには確信していなければなりません。しかし今度のこの逆説は接岸するように納得するでしょう。パンテオンの前に立つと外観だけで満足する人、例えば大建築物の内部、隠れた部分、石の力を超えた固さ、階段、行うべき努力、そして決して見えないが見ることに意味のあるその他の多くのものを想定しない人は決しておりません。これらの想定は、撮られた写真を前にしても良く生まれます。しかしその時の想定は、あなたが周囲を回る大変自然な行動を取ることが出来ないため、実際の探求のための機会を与えることも、単に頭を移動させることもありません。実際の対象を前にすると、直ぐにそれらの遠近法を乱し、その些細な変化によって外観は外観でしかないことを示します。要するに探求でなく、外観をもう一つの外観で修正する現実の視覚は決してありませんが、外観のその支配の下で外観は否定されるのに応じて屈することからも大変に縁遠くなって、常に強固になります。この立場にあって、思考するのに相応しく、唯一の適当なことは量ることです。対象そのものの前にあるこの立場で、如何なる人間においても盲信によって穀物を残して置くことは少しも出来ません。そしてそれが、沢山のことを上手く間違える未開人たちでも、足跡や獲物や嵐を決して間違えません。それは彼らが触覚を働かせると、如何なることも間違えない理由です。そして、そのことは彼らが私たちとまさに同じで、その時は疑うことを覚えます。もっと適切に言うなら、疑うことや探求することや訂正することしか行わないと想定します。何故でしょうか。何故なら、現

存する対象が何時も答えているからであり、その働きにおいて私たちを支えているからです。その外観は私たちの最小の活動によっても変化するからです。要するに見ることとは疑うことです。何時までも疑うことであり、同時に何時までも確認することです。そんなことは自明のことであると云わないで下さい。寧ろ、もしもあなたが疑問を持たなかったなら、もしもあなたが存在している様に見えるために結局のところ正直になったなら、あなたは眼前の風景が何であるのか尋ねてみて下さい。見ることは発見することであり、立て直すことであり、形づくったばかりのものにノン（否）と言うことです。「未だそれではない」と、見る人間の思想はその様なものです。地平線とはこの青味がかかった帯です。そうです、それが何であるか発見される時には、それは青味がかかった帯でなくなります。反対に、あなたが慣れ親しんで良く分かり、決定的判断を下した対象の真っ只中で行動するや否や、最早それらの対象を見なくなります。以上は認識に関する諸条件の一つですが、その条件を保ちながら間違いから立ち直すことです。しかし、他の条件も忘れないで下さい。それは外観としての対象が少しも譲歩することはなく、様々な姿になって何時も同じ質問を発してしっかりと保持しているのです。もう一度ここで把握されるのは、外部の必然性は私たちの思想を支えるには孤立するかも知れないことです。抵抗するものの中、そこに私たちが発見するものがあります。そこからコントは十分に知られていない理性に関するこの格言を引き出しました。外部に沿って内部を調整すること。この指摘は、迅速ではありませんが、私たちの視覚よりももっと模索的に他の感覚にも又、もっと容易に適用されます。同じく開くことも疑うことであり、試みることです。手で触ることも同じです。嗅ぐことも同じです。例えばあなたは、紙が焦げる匂いを嗅ぎます。あなたはそこで調べて疑います。あなたは探求するには武装しますから、絶えず探求するから、疑うためにも武装します。観念とはこの様なものです。全てにおいて、その豊かさをしっかりと把握して下さい。対象は抵抗しませんから、あなたは対象の前では数えたり量ったりすることしか出来ません。それから、その様にしてより良い認識を無駄に約束しません。あなたは対象にもあなたにも確信しているのです。それでこそ、あなたは断固として積極的に疑うのです。対象から遠く離れると、あなたは最早探求出来ません。あなたはもう堅固な外観に出会いません。答えるのは外観なのです。想像のものは答えません。それは如何なる縛りも無く変化しますし、逃げ去ります。私は正しく言う言葉しか理解しません。そうして否定する言葉も正しく言うことに注意して下さい。しかし、それは探究を導く如何なる方法でも無いのです。私たちはそれでは思考することが出来ませんが、そこが肝心な点です。私たちは認識が疑いによって豊かになり得るといような身分ではないのです。しかし信じないことの侮辱と、一致が砕かれたことの醜聞とが残ります。その他は全てどうでも良いのです。物語に対しての物語であり、どちらにも対象がありません。欲する者は決して疑いません。その上、同じことは望むこと全てに言うことです。望む者は望んでいないのです。想像で望むことはお笑い種です。敵が少しもないなら、敵に向かって歩くのを望む方法など一つありません。同様に、調べるのが何も無いならば、調べるのを望むのも無駄なことです。流浪する懷疑は少しも懷疑ではなく、嫌な思いをしたり、びっくりしたりする苦い気まぐれでしかありません。物語に夢中になっていると、知性は働くことが出来ません。

「もしも、あなたが信じることを覚えたなら、時間を無駄にすることはありませんでした」とキプリングの小説の主人公は言いました。その点について十分に考えた後で、私は人間の友愛に

関する規則に与されます。そして、モンテーニュがなす術を知ったように、私は今では全てを信じています。正確に言うと、私は思考するのを守りながら信じているのです。そして多分、語り手の顔付きや動作を除いて、あるいは聖書やホメロスのように物語の美さえも除いて私は思考するのを自分で守っています。しかし話をする対象に関して、それは対象では無く、私はそれに噛み付くことが出来ません。私は知覚するための武器も道具も決して持っていません。それ故に現存する人間の事実としてその物語を私は受け入れます。語り手は信じています。語り手が信じているのを私は信じます。そして彼が語ることを私は信じますが、それは彼のものと対象のものとの混淆の中で、もっと遅くなって解明することが予定されているのです。その時は実際の対象に関する知覚が、私に語られているその物語に幾分か似ていて、私が自分で創る物語と同時に彼の物語を検証する場合に私の身を置きます。狂人を少しも信じないことよりも、信じる方が不都合は少ない、と私は屢々考えました。何故ならば狂人が信じていることを前にする狂人自身よりも、狂人が言っていることを前にしている私は、如何により一層合理的になるのでしょうか。対象は私たち両方に欠けています。そして逃亡者や不条理な外観しか把握出来なかった時、自分自身を信じるのが最良であるとしか理解しないのも誰でしょうか。それはある日、その外観に一つの意味を発見するための唯一の方法です。何故なら私は自分の眼を決して信じてならないのは本当であるからです。しかし天文学者が行うように、結局のところ自分の眼しか信じられないのも本当です。そして、夢を見て信じることも屢々大変な狂気の沙汰です。パンルヴェ(1)が語った或る物理学者は、純粋な錯覚であったと信じられていた灰色の月光を決して検証したいと思わなかったように、それは常に大変な狂気の沙汰である一番良い例であると言えましょう。全てがしかるべき処に置かれていて、狂人の視覚が全て真実であるという観念に従い、もしも一番良い例に出来なかったなら、単にびっくりさせるだけでも大変な英知ですが、稀有なことです。従って以上の様に、どんな物語や夢からでも創り出さねばならないことが健康的な習慣なのです。何故なら、創り出すことが出来ない時にそれらの物語や夢を真実と決定することは、創り出すことが出来ない時に誤りであると決定するのと同じ間違いになるからです。明らかにしようとしていること以上に、疑わしいものはありませんし、実際に疑わしいものはありません。それらの観念は大きな結果によるものですが、余りに隠されています。

世界に向かってそれらの観念を発展させる前に、例外なく全ての私たちの思考にとって唯一の十分な対象は、夢想の物語でさえも簡単に叙述するのは無駄ではありません。しかしその物語は、世界からその物語を切り離し、そして自分自身を切り離すのは空しい努力です。どんな物語も呪文であり、狙っているのは周辺での経験によるテキストの中でさえも、語られた事物が現れることです。何故なら私たちが間違いなく知覚のような視覚を持つことは決して無く、読者も理解していたように、間違いも真実も同時に理解する様なものです。従って呪文は、世界中に言葉を投げかけ、現実の言葉として屢々繰り返されます。それらの言葉が結び付いた事物の世界に溶け込むためには、出来得るならば一つの法則に従って結合されたものになります。ここに詩が現れるのを人は見ますが、その詩は記念として聳え立つ音の響く大建築物です。しかし、素朴な呪文においては諸動作も世界へ投げ込まれて溶け込み、そして二重の効果を持っています。一番目の効果は鳥のように手を眼の前で動かすことであり、それは他の形状を創り出したがりです。二番

目の効果は、語り手特有の動揺が肉体や頭と、取分け眼による突然の活動によって探究を中断することです。その探究は夢想を溶かし、混沌と無垢の題材を思い出すように数々の事物を混合して走らせるものです。そこから詩人は直喩とか隠喩を生み出すのでしょうが、夢想による物語における隠喩は、その周辺世界において私は軽い蜘蛛の巣のように、その夢想をぴんと張らなければならないので実体そのものでもあります。事物は夢想を支えなければなりません。何故なら私が想像して、両眼を開けて新たに夢想したいのは現在のことであるからです。この様にして私は壊して創り直します。従って私は思い出と発明と知覚を区別する術を少しも知ること無く、世界と私の間にあるヴェールのように、私の愛情をぴんと張ります。何故なら知覚は、他の二つである思い出も発明も支えているからです。この様にして着飾ったイゼベル(2)を語りながらアタリヤ(3)は、指を指輪で飾り、爪を塗って落ち着きます。そして手や腕をこれらの爪で引き裂いて眼を覆い、その呪文は彼女の耳元で新たに犬が吠えたり唸ったりさせている間に、ついには世界を粉々にして仕舞わなければならないからです。ここに芸術が幼い姿になって現れるのを人は見ますが、芸術は常に深いものであり、一つの記憶術なのです。より果敢な語り手たちが、柔順に折り曲げられた事物を、ついに折り曲げる私たちの思考には実際の対象がなければならないからです。しかし、それは石を積み重ね、絵の具を溶かし、刻み、彫りながら永遠に折り曲げるのであり、爪で引っ掻く動作を始めることには、版画家としてのレンブラントの殴り書きにも既に敏感なものがあるからです。彼は夢を知覚します。知覚すると同時に、それを消すか、身を清めます。芸術は狂気にとっての最高の薬でしたし、多分今でも唯一の薬です。何故なら私たちの理性は、狂人を苛立たせるからです。狂人が私たちに示そうとしているものを、狂人に示さなければなりません。結局のところは彼の夢の中で彼を目覚めさせなければなりません、彼の夢の中であって、彼の夢から目覚めさせるのではありません。(完)

(1) ポール・パンルヴェ(一八六三～一九三三)は、数学者・政治家で、下院議長や首相を務め、関数、古典力学。飛行理論などを研究した。

(2) イゼベル(前九世紀頃)は、イスラエル王アハブの妻で、異教の神バールを信じ、アハブの宮廷を墮落させた。

(3) アタリヤは、アハブとイゼベルの娘で、ユダヤの王位を奪い(在位は前八四一頃～前八三五)、孫たちを虐殺させた。ラシーヌが「アタリヤ」(一六九一)として作品化した。

第六章 経験

私たちの全ての認識は例外なく経験からやって来る、と言った賢人たちは沢山いましたが、何人かの人々は傲慢に言っていました。私は、この格言に反対する処ではなく、良識に溢れているものにしたいと思いますし、規則のように言いながら直ぐに忘れて仕舞う人々には恥をかかせたいと思います。私が経験によって理解したいのは、感覚の探究に従う今日の対象としての知覚です。その時は単に認識が生まれるだけかも知れませんが、換言するなら私は一つの観念を形づくる事が出来るのであると言います。その時は単に私が疑い、探究し、立ち直ることが出来るだけですが、少なくとも目覚めて思考することが出来るのです。その他は全てが習慣による眠りであり、機械的な暗誦なのです。

私は十分に言いましたが、誰も物語に基づいて判断することが出来ません。しかし、これからも十分に言うでしょうか。私たちはそんなことしか行いません。私たちの意見は、意見の批判ばかりです。対象はその時、言葉とは別ものでしかありません。言葉は、矛盾を除けば何でも許されています。そこから精神は土台を築くのではなくて、何時も壊しながら手懸かりを探求します。何故なら、矛盾の無い言葉は唯一そのことだけによって真実であると誰も敢えて言いませんが、矛盾している言葉は真実になり得ないと各人は口に出して言うからです。そこから反駁するための働きが、青春期の貴重な時間を貧しくも無駄に費やします。しかしながら私たちには世界が欠けていて、世界は私たちの思考にとっては唯一の調整者です。それ故にその時に私たちは知覚から夢想へ移りますが、それは最後に起こる言葉と支離滅裂の混淆によるもので、一般的なことです。この種の働きは懐疑論者になることです。それは判事の職業です。法廷にあるのは何でしょうか、何故ならそれは主に言葉であるからです。そして、幾らかの対象は事件から引き離されているかの如くなり、今では別の関係で捉えられているのです。ブルータスの短刀とカエサルの服は、テーブルの上にあります。死体は元素に戻されています。数々の言葉が行きます。短刀は何ものかであり、血まみれの服も何ものかであり、言葉も何ものかです。人はその点について思考することが出来ます。言葉は一種の堅固さとか特有の現実を与えます。それは一致によって立ち続けますが、矛盾が認められると、経験によるある種の確信の中で溶けて仕舞います。しかし最早存在しない事物や、これからも存在しない事物を認識しようとする、理性は間違っ使用されます。何をしても常に弁証法的で、それ以上良いものには出来ません。唯一の言葉で全てを証明出来るのであり、もっと適切に言うなら、もう一つの言葉でどんな言葉も駄目に出来ると誰もが言います。しかし、本当にそのことを知っているのは判事しかいないのです。何故なら真摯な言葉を理解するのは判事独りであり、そこから人間の生命とか財産が左右されるからです。歴史家の言葉はもう少し移り気です。哲学者の言葉はもっとそれ以上です。いずれにしても、あらゆる人間についての矛盾が引き出される懐疑論は極めて強いものです。それは現在の処、遠く離れていたり過去のことであったり、理解し難い沢山の事物の検証を不可能の儘にして現在の対象、つまり少なくとも何ものかである言葉の宇宙に縋り付くからです。そして最も賢明なのが、それらを抱く宇宙の中で、これらの言葉を感じたいと思う人々です。それは言葉を生み出す人間の肉体からの愛情を検証することから抱くのであり、そして次から次へと太陽や空気や水や、話

をする人々の栄養になったり、興奮させたり中毒させたり、あるいは眠らせる数々の生産物から抱くのです。それはまさしく真実がある、言葉の真実を正しい知覚によって良く探すことです。理性は取り合える処で取り合えます。しかし、それは証人が単純か、術策を弄しているか、臆病か、図々しいか、苛立っているか、感動しているか、嘘つきか、軽々しく信じるか、それらを常に知ることではありません。ところで百年前に死んだ証人の何を知るのでしょうか。必然的に言葉に戻ります。しかも話す人はおりません。書かれた言葉の物理学と呼ばなければならないものに戻りますが、それは論理的と呼ばれているものです。しかし、主として教育の威信によれば、現在及び過去の事物が論理に従って同じ様に規制されると屢々思考されるに至ります。それ故に私は書類に基づいて裁くもので書かれた言葉のこの物理学を、法廷の論理学と呼びたいと思います。プラトンは、論駁するためのこの技術が自分自身を論駁することに無知ではありませんでした。『パルメニデス』(1)は、赤裸々な裁判の完全な素描のように提供しています。自然主義者のアリストテレスは、駱駝やキリンを描写するようについてこの対象を描写しましたが、それは寧ろ私が信じる処では場違いな使われ方から自分を守るためでもあると思います。しかし何世紀もの間誤りによって曖昧な儘であるのは、言葉のこの法則を事物の法則として直ちに理解しているからです。そして全員が揃った裁判所にその宇宙が出頭します。この様にして、弁護士の言葉によると、全ての弁護がなされます。

以上の様に、理性には決定的に不利であって欲しいのです。しかし非常に無駄なことです。言葉が対象である限り、言葉にも理性があります。それらの有名な〈範疇〉は言葉に関する事実であり、理性はそれらを把握するために訓練します。それらは第一の武器です。そして、私たちの思考が言葉である限り、言葉の法則は例外なく私たちの全ての思考を支配すると言うまでにならなければなりません。私たちの幼年時代は、何時も一人ひとりが目覚めると、戻って来ますから、ここではどんなに用心しても常に思い出さなければならないのは、言葉が非論理的なものであってもそこから事物も非論理的であること、言葉が不可能なものであってもそこから事物も不可能なものであるとの結論を下さないことです。例えば同一の事物も、関係によっては近くなったり遠くなったりします。そして大きくもなり小さくもなります。同一の物質も、関係によっては動いていたり休んでいたりします。関係によって熱くなりますし冷たくもなります。金は関係によって黄色であり、緑色であり、赤色です。そこから詭弁家は、「はい」と「いいえ」は決して一緒になり得ないから、そんなことも決してあり得ないと結論を下したがります。事物には決して矛盾が無いのですが、結局のところ何も言わないことを敢えて殆ど思い起こさせないのです。しかしながら、そのことを自分自身で思い出さなければなりません。その上で、カントの有名な作品に美しい素描が発見されることでしょう。それは最早「はい」も「いいえ」も無い、別の論理による素描以上のものでもあり、大と小、段階、不変、変化、全ての事物の相互的關係です。言葉に無いその認識についての考察を「論理学」と今でも呼ぶのであるなら、少なくとも軽率です。いずれにしても、活発な知覚によって更にもう少しこの美しい文体を、事物そのものに近づけるのは広大な仕事ですし、実際に終わりは無いでしょう。しかし、どんな場合でも決められた年齢になるのを待たねばなりません。兎に角、この仕事が論理的であるよりも寧ろ生理学的であるのは事実です。あるいはお望みなら、文法的であるよりも詩的なものです。従って〈範疇〉の体系には手を着けないで置きましょう。

理性は認識し証明するために力を使い尽くすのであり、それは些細なことではないと私が言う
とすると、事の本質を言ったことになるでしょう。論理はここに証言しに来ますが、最早判定者
ではありません。判定者の前で私たちが如何に話し、証明し、論駁するのかを確認しないなら、
論理は何をするのでしょうか。数字も証言しに来ますが、決して言葉によるものではありません。
私たちは論理へ送り届けますが、数学の対象によるのです。それが実際の対象です。数学を教え
る時には、数学を行うのも同じです。数学は対象無しで済ませませんし、文字とか図面によって
実現させたものであるのを人は良く知っています。何かに単純化されたり要約されたりしてい
ます。しかし結局のところ数学者は、屢々非常に複雑で探究することと絶えず修正することが要
求される何ものかを、絶えず知覚しています。ご存知の通り、もしも代数学者が書きながら実現
させるこのものの認識を、先ず正確に習熟していなかったなら、代数学者の理性の働きを把握す
るのを望んでも、全く無駄になるでしょう。沢山のものを読むことと、同じものを読み直すこと
は同じではありません。自分自身で、しかも一つ一つ明確に書かなければなりません。筆跡の明
瞭さは些細なことではありません。指数を一つ無視したとか、誤った位置に置いたとか、根号を
一つ間違えて終えたために長い間模索した者たちは、私のことを十分に理解出来るでしょう。こ
れらの困難な素材においての対象は、縮小され、単純化され、殆ど一様になっています。唯一の
困難は読むべきものを読み、それを固く守ることであると私は言うまでになるでしょう。あらゆる
意味において、そしてその深さにおいて理解された計算は、まさしく私が行う正確な経験になり
ます。そして確かに、前もって行う精神の活気があります。しかし、数学者の美德は規則に従
って行くこと、そして達成するものを理解することにあると思います。前もって行う者は力
強く早く前進しますが、直ぐに高度な複雑さによって立ち止まり、氣力を失うようになります。
それ故に算数の三角形を語る前に、何回も沢山書いたり読んだりしなければなりません。代数学
や算数のこれらの対象は、事物のように常に整理され秩序立てられていて、根本的に秩序や整理
そのものの認識を与えていますけれども、事物からは少し遠い処にあります。幾何学は事物にも
っと近い処にありますし、常にそこに戻らなければなりません。図形はここでは本質的なものでは
ありませんし、たかだか便利なものに過ぎないと私は先ず指摘します。タレス(2)は言ってい
ます、「人間の影が人間と同じになる時刻に、ピラミッドの影もピラミッドと同じになる」。タ
レスは幾何学で認識したのです。事物は彼の図形になったのです。

私は、この大きな主題には単に軽く触れるだけにすることに決めました。最も単純な図形に戻
るなら、線を確認しなければなりません。そこから観念を与えるには、線を定義するだけでは明
らかに不十分であることが私には良く分かります。しかし、ここで何を確認するのでしょうか。
直線と言うよりも寧ろ、直線によっての二つの事物の距離とか分離です。しかもそれらの事物
は数々の点によって、かくしてその様なものとして分離されるのが確認されます。換言するなら
、観念であるそれらの関係は対象というよりも寧ろここでは道具です。勿論、観念とか関係が
無かったなら、最早あらゆるものの対象も無いに違いないことをつけ加えて言わなければなり
ません。距離も位置も無いこの世界とは何でしょうか。しかしながら、距離も位置も決して事物で
はありません。従って簡潔な見方によるなら観念を形づくることがなければ、確認することが出
来ないこと、そしてこれら二つの操作も全然分離されるものではないことが認められることでし

よう。例えば、もしも分離された二点が私に与えられていなかったなら、直線の観念を創りたいと思っても、まさしく無駄です。しかし逆にそれらの二点を、もしも私が何らかの方法で、その分離そのもので結び付けなければ分離されていると考えたいと思っても、まさしく無駄です。そして、この関係は分離以外は何も無く、恐らく直線の観念そのものであり、人が望むことを純化するものでもあります。三番目の点に関係なく二点の純粋な区別というこの考えは、少なくともそれらの二点がはっきりしていることによって結ばれていて、それが直線の全てであり、図面には何もつけ加えていません。牡牛座のアルファ星アルデバランの星の三角形は、完全に一つの三角形であり、その儘に知覚されます。その時は、直線を描かすにはいられない、と言われるでしょう。私もそのように理解しています。少なくとも私は、それが素描を真似た想像上の図面では決してなく、寧ろこの捉え処の無い消え行く思考を模倣するように訓練する幾何学的図面であると言いたいのです。

星々の三角形による二つの事例は、他に足るものへと私を導きます。星々が全て一緒に回転していること、同時に思考することなく対象そのものの天体・極地・世界の軸の中で、如何に確認することになるのでしょうか。角度と諸部分の角度を思考しないで天体の高さを如何に比べることになるのでしょうか。そして、私たちから太陽までの距離の測定を熟考して下さい。それは大変に複雑で、大変に補助的な観念で一杯になりますが、しかしそれも確認なのではないでしょうか。私たちの観念は、知覚した世界という布地そのものです。その事実が距離を理解させる如く、しかしながらこの世界の魂とは関係でしかなく、明らかに経験以外は何も無いのです。私がここで提出するものを理解して貰うためには大変に全く酷く、私たちは知覚しながらでないと決して思考しません。対象の現在の知覚の中でしか観念を形づくらないということです。私たちの現在の意図は教えることではなく、単に知らせることです。もしも言えるとするなら、精神の内面で分離されて、存在し、結合出来る観念が幾つもあるという思想は、私たちの全ての思考を何時か台無しにするのを前提とした間違いの一つであると私は思います。（完）

（1）パルメニデス（前五一五頃～前四四〇頃）は、古代ギリシアの哲学者で、エレア学派の祖である。（2）タレス（前六二五頃～前五四七頃）は、古代ギリシアの数学者・自然哲学者で、七賢人の一人である。

第七章 世界

外的事物の存在という問題を検討することなく、夢想を論じることは出来ません。夢想の議論は、今では最も古くても激しいものです。プラトン、デカルト、パスカルもそのことに触れました。ところで、その問題が不確かであると私は決して思いません。カントのこの有名な定理に全てが語られています、「私自身の唯一の意識が経験に基づいて決定されるのを忘れなければ、それは自己の外部の事物が存在することを証明するに足りる」。この内容がどんなものでも発展させる必要があるだけです。ジュール・ラニョーの崇高な言葉も又何かに役立ちます、「自己と全体の事物が存在するのかもしれないのか、選択しなければならない」。そしてここで発展すべきものを要約すれば次のとおりです。それは先ず、存在は決して分割されないことです。その結果として、私が周囲の宇宙を認識する限りにおいてしか、私自身にとっての存在ではないということです。換言すれば、私の存在が分割されれば、それは抽象的で虚構の存在になります。この観念はスピノザの中にあります。そこにあるのは広大な存在と全存在の法則です。それは王道です。

ここで脇道に入るのをお許し戴きたいと思います。余りに観念論者の主張しか知られていませんが、それはバークレー(1)の完全な外観に見出されるものです。多くの人々がこれに噛み付きましたし、容易に解放しませんでした。ところが私は、この観念論から一つの間違いに気付きました。私は、それを明るみに出すのは有益であると思います。間違いとは、対象から分割された唯一の外観というこの不可能な観念の中にあります。私たちにもっと近づけてもっと明瞭に言うなら、間違いは所謂主観的な世界を現実と理解すること、つまりその世界の中で外部の存在が既に決して姿を現さないで、仮説の資格でそこにつけ加えなければならなかったと理解することにあります。ここでの困難は山積みにはされていますが、私は一つの秩序に置いてみたいと思います。良く理解しましょう。議論することが重要ではありません。議論して反対する者は、賛成することになります。何故なら観念論の力強さは、外部の事物が証明されていなければならないことを容易に獲得しているものの中にあるからです。いずれにせよ、何らかの成功を確信しています。何故ならカントが言っているように、どんなに証拠が正しくても、危険が走り回っているからです。そして、私自身の疑う余地の無い存在と、証明しなければならないもう一つの存在の間には、一つの相違が残されていますが、証明しなければならない存在は只それだけで影のように見えて、ついには二次的で従属したものになります。ところがその時に感じる困惑は、私たちが必要とするような世界を哲学者がここに与えないことから齎されます。私たちが捕らえられ拘束されている広大で威圧的なこの現実と、私たちが説明しようとする軽い言葉の間には、不均衡があります。まさに滑稽な不均衡があります。哲学者が笑わせるのは、私たちが第一に世界を確信しているからです。それ故に私たちが世界をその儘にして置いて、私たちの思想を考察しながら最初に引き出すことが出来ると信じる最初の位置であるこの出発を、厳格に検討しなければなりません。

経験の外に認識は全く無く、現在提示されている対象が無ければ観念も無いと良く理解された時、全ては言い尽くされるでしょう。思い出も対象の知覚によってしか完成しません。結局のところ私たちは事物によってしか認識しないと良く理解された時、全ては言い尽くされるでし

よう。そして乗り越えることが重要である幻想に、更にもっと近付くでしょう。勿論、これらの観念には広大な発展が必要です。事物は、私自身以外の何ものでもなく存在する、という力強く要約されたものとして肯定する有名な定理まで、カントの『分析論』にそれらの観念が辿って行くことを私はお勧めします。少なくともこの道は長く不毛です。寧ろ私たちの夢が提供する手懸かりを把握しましょう。まずは夢が、それ自体でお互いに結ばれている観念を解放しましょう。それは目覚めて語る人間の観念であり、それまで抱いていた夢が別世界のようなもので、想像力だけで十分に支えていると言っては気に入っているのです。もしも私たちがこの世界や、それに近い世界に似ている世界を創ることが出来るとしても、目覚めたこの世界はやはり私たちが創らないこと、又そこから空想的仮説の世界もやはり私たちが創らないことを証明しなければならないでしょう。まさに時間が無駄であることは明白です。ところが物語は語り手が目覚めているので、この存在する世界に支えられているのです。反対のことを証明するには、あるいは単に反対のことを理解するには、自分の夢から目覚めて、知覚することなく思考しなければならないでしょう。ところが人が目覚めると、見出されるのはこの世界です。あるいはもっと適切に言うなら、現実世界を知覚することと目覚めることは、一つのことではありません。換言するなら眠りから目覚めまでに、一本は夢へ導き、もう一本はこの世界に導くという二本の道はありません。寧ろ、夢を見るのは少し目覚めていることです。知覚するのは完全に目覚めていることです。「これは何の夢ですか」と聞かれます。もしも実際に自問したならば、そしてもしも確認方法の規則に従って調査をしたならば、その時は夢をはっきりさせる処か、夢を見るのを止めて仕舞います。人は感覚と試みと行動を使います。眼を覚まし夢の真実を発見しますが、それは夢と同じものであり、現実の世界でもあります。現実の世界とは別に、夢の真実がある訳では決してありません。夢の存在しない世界であるような世界が存在することは決してありません。夢の対象とは世界です。同様に二百歩の処にある太陽の対象も、地球の半径の二万三千倍の処にある太陽そのものです。

事物と夢との関係が何時も決して見えるものでないのは本当です。時々見えれば十分です。何故なら全ての幻想が解明されると言われることはないでしょうし、目覚めの時も同じであるからです。私が逃げる動物を見たと思います。私は間違っただけなのであると全ての人々が証明します。しかし結局のところ私は、風に舞う落葉であるにしろ、偽りの外観であると何時も認めることにはならず、「私が見たのは動物そのものであるが、風に舞う落葉でしかない」と只言わせるだけなのです。しかしながら大抵の場合、私はその外観を思い出し、そしてそれは知覚されたものそのものなのです。夜に眠れないと、私は子供たちにとって大変に恐ろしい狼の足音を聞きます。誰かが歩いているのです。疑う余地はありません。しかしながら私は疑いますし調べます。閉じられたドアが軽く叩いているのであると分かりますが、リード管のように空気の流れが圧力となって押しているのです。しかし、それよりももっとゆっくりです。私は最初にいた場所へ戻って、今度は夢を思い出していますので、そのことをお話します。私は立ち止まっている雌鹿を見たように思います。私は近付きます。それは樹木の切株でしかありません。二枚の葉が、垂れ下がった耳に見えたのです。私は再び後ずさりします。改めて私は雌鹿を見たと思います。しかしそれと同時に、私が見たと思ったものを私は見ているのです。そして、それは樹木の切株です。それと同時に外観と、外観の中の対象を認識します。その上で熟考の段階になるのを知覚する

人間には事欠きません。それはこの世界の喜びと光を生んでいます。私は対象の配置によって幻覚そのものを解明します。この様にして私は自らの若さを笑い、思い出し、そして救済します。

「昔も、先程も、私はこれとかあれを見た。そして今も又同じものを見ているし、それは常に同じものである」。学ぶことがここにあるか、又は少しも無いかなのです。学ぶことは誤りを救済することであり、正しく学ぶことは誤りを全て救済することです。真の天文学は進んで星々が回転するのを見ますし、最早決して回転するのを見ないようにすることはありません。外観には何の犠牲もありませんし、どんな古代バビロニアのカルデア人の夢も思い出します。保存しながら乗り越えるこの活動は、私たちの知覚としては最も小さなものの中にありますし、その知覚を生む知覚でもあります。私は立方体を見ることを覚えますが、同時に私が見るのは決して六つの面ではなく、二十四の直角でもないのが分かります。同時に私はその理由も知っています。その全体を一緒にして立方体を見ることになります。

確認することはそれ故に、決して眠りや休息の状態ではありません。確認することとは、純粋な外観によって教えられる器具や顕微鏡や六分儀で明瞭に見る如く、保持されている外観を前にした拒絶と探求です。そして、副尺で測定することはどんなことでも対象と目盛を付けた定規を重ね合わせた純粋な外観に作り直します。認識する人間とは、最早全然見ない人間ではなく、その反対にどんな外観でも救い出し、古代の賢人たちの夢とさ迷う惑星たちを正確に思考する人間です。

夢は認識されないこと、あるいはもしもお望みなら、夢を確認することが目覚めていることであり、自分自身に夢を説明することであると示すためには、この回り道は無駄ではありませんでした。そこまで来るのでない限り、夢が存在しているとは言えません。測定するに至らなければ存在のしるしでしかありません。そして夢の存在とか真理が未だ解明されない別のものに起因していたり、わざわざ解明したりしていないとしか仮定しなかったなら、夢には外観さえもなくなるでしょう。しかし、完全な目覚めと完全な眠りの間で絶えず揺れ動く夢のこの不安定さは今では把握されていますが、存在に対する現実的な判断力は無いのです。説明は延期されます、「仕事は明日に」。不幸なことに物語や説明を求めることに戻るとなると、夢は最早言葉でしかなく、真実の説明を見出す機会も無くなるような肉体や対象の状況でしかなくなります。それは恰も、立ち止まっている雌鹿を見たと思っていて、決して調べもしないで私が暖炉の一隅に座っている時に、この不完全な知覚を報告しているようなものです。その時は最早私にとっての雌鹿はおりませんし、その代わりになることが出来る対象もおりません。以上のことから幽霊たちの物語は夢と同じ位に偽りですが、私たちが最早本物とか偽物を考える立場に無いから、あるいはもっと正確に言うとなんか認識でも本物を求めるので、真贋を考える立場に無いから本当と見做すのです。

従って一つの世界しか無く、ある時は間違っって認識し、又ある時は正しく認識します。世界には別の夢は決してありませんし、夢にも真実があります。そして、その真実は行為と目覚めの中にあり、眠りの中にはありません。換言すると夢は未だ存在しません。何故なら夢が最初のしるしである現実の世界は、未だ夢に実質を与えるために現れていないからです。私が探すのがどれ程僅かでも、私が探して発見するのは常に世界です。もう一度換言するなら、夢は事実ではあり

ません。しかし、どんな夢の中にも発見すべき現実的な事実があります。夢から覚醒への移行は相違によって行われるのではなく、同一性と再認によって行われます。眠りに舞い戻って翌日に目覚める者は、従って自分の夢を忘れます。彼は、直ぐに目覚めることである真実を思考する唯一の機会を決して手に入れません。夢が存在しているように見えるのは、世界が存在していることなのです。結局のところ真実なのは外観でしかなく、外観として完結している以上、彼には夢に欠けているものは何もありませんが、夢に欠けているかも知れないのは私たちなのです。

弁証法的な外観にその様にして打ち勝ったので、私はスピノザが決して見失うことの無かった見方である、別のことも又つけ加えたいと思います。それは広大な存在は一つであり、分割出来ないということです。そこから私は言おうと思いますが、その様なものとしての存在を認めることは分割しないで再び見出すことです。つまり現れているものは全てが現れているものの全体に結び付くことであり、結び付くこと以上の何ものでもないという結果になります。存在の法則とは、一つの特異な事物はその他の全ての事物によってしか存在しないことです。そして、その様にして夢は存在する宇宙と結び付く時にしか存在しないと言えます。更に別な風に言えることは、本質を元にして存在は決して証明されませんが、分割出来ない存在は与えられていて、如何にして外観がそこに保持されているのかを理解することは常に重要であるということです。ここで確認することと証明することの間に結び付きが発見されます。この主題には終わりがありません。私が少なくとも指摘するのは、最も良く知られている本質は、三角形の角度のように近接するものの関係に依存していることです。そして、それらの関係を認識することで私たちは、一つの固有の事物が存在していることや、どのようにして存在しているのかを発見するのを学ぶことです。しかし、ここには理解力という厳格な図表が示されていますが、それは直接的には決して私の主題ではありません。私は、次のように簡潔で美しい詩を繰り返し言うだけで十分です。「精神は夢見ていた。世界はその夢であった」。(完)

(1) バークレー (一六八五～一七五三) は、英国生まれのアイルランドの神学者・哲学者。

第一章 お伽話に固有なもの

お伽話は寺院や悲劇のように人間の創ったものです。理解出来る人には理解して下さい。しかし、お伽話が深い真理を少しも含んでいないと決定づける力は私たちにはありません。この点に関して疑いは少しもありません。先ずは審美的興味がそれを決定します。それらの虚構性は対象の流儀で存在します。従ってそれらが何であるかを私たちに証明する必要はありません。アラジンが奇跡を望む時にはランプを擦ります。その理由が尋ねられることは決してありません。人が決して理由を尋ねないのは音楽と同じです。少なくとも物語においては民衆の音楽と同じで、私たちの期待は常に満足させられています。物語は、私たちの本質に合致する何ものかを完成させます。それ故にお伽話の中に人間的なものがあるのを探すなら、間違いなく探し出します。真実でないかも知れない民衆のお伽話というものは何も無いとの感情によって、私は口に出して言います。如何に原始人たちの思考が私たちの思考から遠いもので弱々しい方法であるか、何ものも導きはしないことに驚嘆する人々は、寧ろ如何にお伽話が私たちの気に入るように創られているか自問しなければなりません。しかし原始人たちは、彼らが子供だったことを思い出すことは少しも無く、未だ子供であることも決して分からないことによって神話と同じ位に、物語にも恐らく難しさを見出しています。しかし、幼年時代のことは多分眠りと同じなのです。それを判断するには身を引かなければなりません。又、判断するとはこういうものです。もしも若さが決して歳を取らなかつたなら、老人は殆どおりません。プラトンが立ち止まらないような古代のお伽話も殆どありません。しかし、前置きはこの位で十分です。物語作者や写本者たちによってお伽話が改悪されるとしても、どんな国でもやはり全てのお伽話が一種の規範に戻されます。それは多量な写本とそれら全ての一致によって、ついには再び出発するからです。この思想は今も存在していて、私たちに挑んでいます。従って私たちは、自分の力量を証明しましょう。

お伽話とは夢です。その様な観念は最も自然であり、そして最初に現れるものです。しかし、その観念は少しも十分ではありません。一つの事物又はもう一つの事物であるという観念は、決して十分ではないのです。それは相違を発見したり、出来ることなら相違を対立まで押し進めるための一つの方法に過ぎません。ここでの類似は、空中旅行によって、妖精とか大きな鳥とか一瞬のうちに或る場所から別の場所へ運んでくれる魔法の絨毯によって、先ず把握するものです。それは変化することもある世界と変身によっても把握するものであり、西洋南瓜が豪華な四輪馬車になったり、煙が黒人奴隷になったりもします。私は眼を閉じてきらきら光るスパングルや渦巻や大きな雲を見るのを認めます。それ故に不可能事は要するに容易です。無数の障害も先ず、労働とその結果の比率などお構い無しに直ぐに譲ります。そのことはお伽話においては、実を言えば主人公は少しも戦わない処まで行きます。主人公は魔法の杖とか言葉を信頼して、単に使うばかりです。要するに、仰るとおりに自然法則は保留されているのと同じで、全てが奇跡です。

しかし、ここに一つの相違があつて、それは対立にさえもなります。お伽話の奇跡は常に規則

に従って起こります。魔法のランプを失う者はその力も失います。言葉を忘れる者もその力を失います。同様に、妖精や魔法使いや仙女たちには、まさに永遠の力があります。お伽話の世界はそれ故に数々の法則に従っています。恣意的な法則であるのは本当です。しかし、少なくともその法則による空虚な形式がそこに見出されますが、それは同一の方法が常に成功しますし、それだけが成功するからです。夢の中にもこの純粋な論理による幾つかの輪郭が良く見出されます。しかし決して長く続きません。そこでは出来事が対象と規則を消して仕舞います。こう言って良ければ、予見されないことが夢の法則であり、それはお伽話のものではありません。お伽話では反対に、言明し得る予想に従って何でも起こります。言えることはランプや指輪や魔法使いの特性が分かる瞬間から、何でも起こります。そのことは、お伽話に欠けているものが理性ではなくて、寧ろ経験であると私に言わせるようになります。ところが夢の中では、全てが人間の身体の変化に従い、宇宙の圧力に基づいて広げられるので、経験は決して欠けていないことに気付いて下さい。夢の中で欠けているのは一貫した経験であり、調査であり、探究です。お伽話は一つの物語であり言葉の力によって反対に、実際の経験をすっかり消し去ります。お伽話を聴く者は、自分なりの方法で夢を見始めることが出来るでしょうし、対象から受ける特殊な印象について行きます。しかし、それではお伽話には決して十分ではありません。その様なものは例外の無い論理と、変わることの無い型に嵌まった表現の結果です。精神は、原因と結果によるこの遊びに決して騙されません。反対に精神が再発見されて味わうのは、理解することで一杯になった幸せであり、その実際の経験はそんなにも簡単に私たちには与えないものです。従って子供たちはお伽話の形式に大変に注意深く、たった一つの言葉が変えられることにも我慢ならないことに人は気が付きます。それ故に、お伽話には一貫性が必ずあります。全てがお互いに関連しています。しかし、モンテーニュが心の底で良く言っていたように「そんなことはない」のです。お伽話と夢の対立は、従って次のことに戻ります。お伽話においては虚構の経験は常に諸法則に一致していますが、その代わりに夢においては実際の経験は、例えば黒い視野に着色される形式の遊びは、どんな方式でも構わずに精神が錯乱したものとなり、私たちを絶えず仮定から仮定へ投げ入れます。

この対立は、事物よりも人物の方にもっと良く認められます。何故なら、夢において出会う人物は期待していたことを決して言わないからです。よろめくような言葉で全てが非論理的になるからです。その代わりにお伽話において本性は美德においても、悪徳におけると同じに堅固で不変です。誰もがそこでは絶対的に自己に忠実です。シンデレラの姉たちは意地悪であり、何時までも意地悪です。シャルマン王子は忠実です。鳥になってさえも彼は未だ美女を愛し、話せなくても彼女の処へ歌うためにやって来ます。それは曖昧なものですけれども、私がコントに見出した重要な指摘に導くものです。古代の虚構において、物理的秩序では大変一般的である奇跡は、私たちの愛情と情熱と性格のものである道徳的秩序には決して入って来ないということです。お伽話において事実、愛したり憎んだりするのを癒す魔法使いは決していないのです。従って私たちが『イリアス』に見るのは、矢の方向を変えたり英雄を雲で包み込むのが容易である神々も、アキレウスの怒りには強制以外の他の方法を持たず、前兆とか夢想によって一人ひとりが自分の本性に従って解釈する忠告とは別の方法で決断を変えることはありません。ホメロスの詩よりもさらに一層素朴なお伽話における人物たちの性格は、私たちが経験の中で理解している性格よ

りもやはり柔軟ではありません。反対に、もっと少ないと気付くのは良いことです。善悪をはっきりと区切ることや、例外の無い規則や最終的な決断による道徳の世界は、それ故にお伽話にととの骨組みになるでしょう。

お伽話はそこから寓話に似て来ます。それはお伽話と同じに古くて崇められた記念物です。しかし、寓話は先ず次のことによってお伽話と対立しています。それはお伽話と同じに古くて崇められた記念物です。しかし、寓話は先ずは次のことによってお伽話と対立しています。それは虚構であるにも拘わらず、寓話作家が頼みにしているのは同然の自然法則に従って全てが終わることです。ここでの外部世界は厳格に私たちを連れ戻します。亀は落ち、チーズも落ちます。猫は木によじ登りますが、狐には出来ないことであり、雄山羊は井戸の底に取り残されます(1)。お伽話では反対に、自然法則は重要ではありません。困難は何時も魔法とか魔法使いのものであり、勝利も又そうです。まるで距離や質量は完全に有利であるか逆であるかの命令に従属しているかの如くです。二種類のこの対立は、それらの定義において非常に力強く削除されますが、直ぐに他の対立を現れさせます。寓話の教訓は、低次の事物の変わらない重さに従って、強者が弱者に打ち勝ち、悪賢い人は高潔な人に勝つものです。お伽話の教訓は、それに気付く時には寧ろ、青春の信仰と愛と美德が最後には全てを乗り越えるというものです。事物は寓話の中を支配し、野心的な精神は侮辱されます。精神が支配するのはお伽話の中です。(完)

(1) イソップことアイソポス(前六世紀頃)の『寓話集』からの引用。

第二章 幼年時代の観念

世界についての最古の観念は、想像し得る程に最も間違っただけのものでした。それは至る所に発見される素晴らしい道具類と全然両立しませんし、それらの道具類は現代の機械よりもより一層多くの精神を含んでいて、空気や水や材料や行動に、もっと直接的で近い相互理解を含んでいます。確かに小船は正確に波を明示します。矢は、重力と抵抗する空気を描いた絵画のようなものです。弓は、射手と矢と鹿を完全に一体として表しています。そして長柄の鎌は、草刈り人と草を一体に表現しているようなものです。結局、道具や武器の言葉からは最小の誤りも発見されません。しかしながら、私たちは文字に基づく文字を殆ど何時も発見します。船舶の船首の図形や、弓の木の部分にある魔法の記号は、如何なる現実の経験も想起されません。航海が船首に彫刻を施した人間の姿に支配されるのは本当ではありません。矢の飛ぶ軌道が、木部に刻まれた円に支配されているという訳でもありません。ところが古代の人々が発音のはっきりした言葉によって表した観念は、自然の真理を少しも説明していないこれらのしるしで全て理解されていたのは、注目すべきことです。当時の全ての実証的な観念は、道具類に含まれていますが、そこから引っ張り出す術を少しも知らなかったように見えます。その代わりに風や雨や影や月や食についての全ての観念は、狂人の観念です。ここで馬の調教師、犬の調教師、小麦や水車や帆船や車輪の発明者は、如何にして認めましょうか。けれども明白なのは、事物の本性は現在の私たちを捕らえているようにそれらを捕らえましたし、現在の私たちを立て直しているように立て直しました。それ故に原始人の状態を仮定するならば、判断力が迅速で、慎重で、行動そのもののように正確に行うようになるでしょう。それは経験が厳密で、決して諂わず考慮せず憎まず思い出さないうで、事物間の移行、抵抗、硬と柔、可能事、困難と不可能を決定するからです。何故そのことは道具類の時と同じ様に精神にも記入されないのでしょうか。荒々しい学校では、精神が最初に形式化されて仕舞います。しかし、その痕跡は少しも見出されませんし、人々は皆その中で似て来ます。彼らは熱狂して喜んで間違えます。全然吟味しないで、嘗て存在しなかったし、存在することも出来ない諸概念を宝物のように持ち続けます。それから有益さと重い宇宙を大変上手に隠す神話やお伽話という織物は、何で作られるのでしょうか。無視される儘ではないものが何故、至る所で先ず無視されていたのでしょうか。不吉な観念を持つ人々を無益にも臆病にさせるこれらの観念は、如何にして鉄や火によって最初に形成されて教えられたのでしょうか。そこには不信仰者にとっての美しい問題があります。

その解答は社会的なものであり、いわば社会学を定めるものです。社会学はコントの中に全てあり、美しく発展しているものです。人間は社会です。その惑星上の主権はそこから理解されます。又、その主権そのものは正確に言えば、人間とは別の世界である動物の世界の中では決して形成されないことを意味しています。このしっかりした観念は、社会そのものが個人にとっての最初の対象でありましたし、多くは最も重要であったと考えることは自然です。あるいはお望みなら、その他のものの軽蔑すべき何かと比べても、それは最も力強い道具でした。それ故にその点について最初に考えたことは、本能に似た習慣に倣って容易に支配されている日常にとっての事物の世界ではなくて、疑いや怒りや体刑によって更にもっと近くて恐るべき人間の世界です。

。ここからは全く不条理な物理学を抜け出なければなりませんでした。何故なら、政治的手段に倣って予見したり説得したりする程々の認識が獲得されたと仮定してみましょう。認識というものは既知のものに従って未知を判断するので、事物の世界は先ず政治的観念を通して、それらの観念によって認識されたものであると容易に理解するからです。そこから万人の神話と先ずは魔法の世界は、風と雨と大河と食料と武器を説得しようとしみます。そこから法や力や引力に関して最も純化された私たちの観念も又、隠喩的で、いや些か隠喩的以上の痕跡を持っています。

この観念はかなり遠くへ人を導きます。けれどもそれで十分であると私は思いません。何故なら、その様に描写された人間生活においては、実際の経験は他の観念よりも寧ろ、この観念と合致させられた時を人は目撃しないからです。全ての神話の父である一つの神話に行かなければなりません。それによれば人類は麻痺して弱ったような時でしたが、その観念を持ち続けるのを使命と見做した非常に力強い巨人たちによって、その代わりに役立っています。それは食料を与えて、あちらこちらへ運びましたので、これらの奇妙な時代の人間の物理学は巨人たちが気に入ることとか気に入らないことを注意深く研究することに係っていましたが、結局のところ巨人たちを宥めたり説得したりするために言うことが許されていたことだったのです。当時の政治は、単なる反省のための主要な対象ではなく、唯一の対象だったのです。果物とか水を手に入れるには祈ったり、祈る術を知らなければなりませんでした。人間の最初の状態はその様なものだったと、プラトンの作中人物なら言うでしょう。当時は、真実のこれらの主な観念を引き出したのはそこですが、今日では私たちの実際の状況に合致させるのは大変に困難です。

私は、説明する規則そのものをここで適用します。先ずはお伽話によって興味を持つことが重要です。そして読者が既に理解していたのは、私がお伽話の様に隠喩的であるが正確に私たちの誰にでもある幼年時代とその時の状況の中で、私たちが思想を全て形成し始めたのを述べることです。もしも幼年時代の状況をもっと良く述べたなら、私たちが最初の観念を全て形づくった奇妙な経験が如何なるものであるかが分かることでしょう。ここで重要なことは全て言うことにしましょう。第一には、子供は他の如何なる対象よりも先に母の身体組織に触れたこと、そしてその後も他の如何なる対象よりも大変頻繁に触れることに注意しなければなりません。母親の身体である外部的なこの身体は味方であっても敵ではなく、救いであっても決して恐るべきものでないことも又、言わなければなりません。目覚めへの誘いではなくて、寧ろ古い眠りや初期の眠りへの誘いです。それが何処へ導くのか私には今の処見えませんが、何も忘れないようにここで私は指摘して置きます。しかしビュフォン(1)によると、最初の人物が触れる最初の障害が樹林である時は不自然であると理解して下さい。第二には、子供は自ら動き回る前に運ばれるのであり、それ故に要望に従うのであって、自分自身の労働に従うのでないことを私は指摘します。多くの場合は馬や車や船に乗ります。子供を跳ばせたり思い止まらせたりします。そして眠らせたり、予告せずに子供が望んでいるなど考えずに起こしたりすることも私は指摘します。それは和らげるには素晴らしい方法でもあります。何故なら子供は既知の対象と肉体に対する感情を同時に変えるからです。しかし、これらの経験は子供を教育することが出来ないことも認めなければなりません。何故ならこれらの経験は寧ろ、どんな探求も中断し、全てを混乱させる結果になるからです。それは結果として人間の世界や、何よりも経験の中で唯一確実な両親の肉体に照らして極めて僅かな確実さしかない事物の世界に、委ねることになるからです。外的秩序の

認識は、最初は労働と結果の間の一定の関係として現れます。いや寧ろ、常に現れます。子供は自分の方法で、事物とその危険を調べる限り以外には、事物についての本当の認識を獲得しません。そして、それは良く知られていることです。子供は獲得する前に受入れ、歩き出す前に身に付けるので、最初の知識がこの方法によって獲得されることは決してないのを余りに忘れられているので、少なくとも間違えるのです。この状態が長く続かないのは本当です。いずれにしてもどんな種類の現実的な宇宙論の方へも、子供を向けることは出来ません。

しかし、這いずり回る子供、歩く子供、ついには試みる能力を獲得する子供を検討してみましょう。子供の宇宙は未だ物理学であるというよりも寧ろ、政治的です。彼が体験するのは禁止と強制であり、結局のところ母親の障害を前に自分自身の力の限界を認識するかなり以前に、母親や乳母という高度な力を体験します。障害とは大概は人間的なもので、祈りとか術策による以外には乗り越えることが出来ません。いずれにしても、例えば閉じられたドアのように障壁が打ち破られるのは、大概はしるしによるのであり、行動によるものではありません。子供の経験において、事物は良く現実的な重要性の下にあるので、私たちは遊びの主要な原因をここで把握することはあり得ます。遊びでは決して結果に拘りません。兎に角、子どもの物理学が遊びでしかなかったとしても、子供の政治学は結果が重要でしかないのです、それは決して遊びでないのは事実です。従って子供は人間の障壁を多いと見做して、現実の事物の障壁を少ないと見做すように対応させられますが、大概は母親とか乳母の高度な力が望みさえすれば、容易に子供を打ち破ります。

そこには文字通りに妖精と魔法使いたちの世界があります。それらの全ての鬼婆たちやひげの生えた恐ろしい魔法使いたちの不可解な決定が無ければ、全てが容易です。有利な力とか、容易に屈服させる儘にする力が無ければ、全てが不可能です。ここには心理的駆引きと、変わることの無い欲望の奇跡があります。ここには言葉の力があり、次のことによってもっと適切に気付かされます。母親とか乳母は事物を手に入れる前に、その言葉を言うのを善意で何時も要求していたことです。子供が月を欲しがっても、決して手に入らないのは本当です。しかし、この経験は私たちにとって注目すべきことではなく、同様に子供にとっても注目すべきことではないのです。何故なら、もしも隣の庭の或る花を求めたとしても、やはり不可能であるからです。以上によってお伽話の精神とは、距離や母親の障害を無視しますが、僅かな要望に逆らっても否（ノン）と言う魔法使いを何時も認めます。それ故に、もっと力のある仙女が肯定して言った時は最早問題がなくなりますし、距離はどんな風にでも越えられます。子供が先ず生き、従属しているのはこの人間世界に忠実なイマージュです。子供たちの企てに忠実なイマージュは、全てがご褒美とか祈りや頑固さによって手に入れているが如く提供されています。子供の世界は、はっきりと決定された一つの力に支配されている、一人ひとりに基づいた国々と諸要素で構成されています。女料理人や庭師や守衛や隣の女性も男女の魔法使いであり、権限が決まっています、特殊な信仰の対象になっています。それ故に私たちの最も古い思い出は、神話的に組織だって作られます。私たちの運命は最初に作られた神話を立て直すことにあり、決して孤独の経験によって物理学を第一に形づくることではありません。私たちは世界に目覚めないで、人間たちや彼らの法則や命令や情熱に目覚めるのです。そこから秩序がひっくり返されて、私たちの物理学は延長さ

れて適用されて、立ち直された政治になるのです。ここで子供が殆ど全てを他人から学び、事物より先に何時も単語を学ぶ記憶のことをつけ加えて言うなら、あらゆる種類の誤りが自然と私たちの最初の糧となって、結局はどんな精神も始めるためには宗教的であり、魔法使いであると理解されることでしょう。社会は、どんな人間にも何時も大きな影響力を持っています。子供にも、あらゆる影響力を持っています。そこから卵の皮を破るのが難しくなるのです。そこから殆ど全ての人々にとって主として政治的生活になるのです。どれ程多くの人々が、人の気に入るようになることでしょう！ 穴を掘るためでなく、どれ程多くの人々が人の気に入るように掘っていることでしょう！（完）

(1) ビュフォン（一七〇七～八八）は、博物学者で三六巻の『博物誌』を刊行した。

第三章 魔法

しるしが何も出来ない事物において、魔法は常にしるしによって行動することにあります。例えばフレーザー(1)の『金枝篇』において、雨を降らす人々のことが報告されていますが、彼らは精力的な身振りで雨を明示します。あちらこちらに水滴を放ったり、雲を表す大きな羽を立てて走り回るので。彼らは最も明瞭で急を要するあらゆる言葉を単に選択しながら話をしたり要求したりしますが、それ以外のことは何も行いません。幼年時代の状況から見て、その様なものが最も古い人間の動きです。先ずは要求したり、欲しい物の名を言ったり指し示したりして手に入れるしかないのです。それ故、魔法使いを信頼してイマージュと事物の間に、何らかの神秘的関係を想定しても全く役に立ちません。人間の世界における、言葉の不変の効果を考えれば足りません。何故なら、私たちはこの世界から最初の観念を身に付けるからです。従って魔法使いたちは、子供たちのやり方で彼らが望んでいるものを力強く明示します。人間の世界では倦むことなくしるしを繰返し言わなければならないことを、魔法使いたちは変わることの無い経験によって知っているのです。最後の十五分近くをすっかり信じ、かくして自分たちの力を疑うことから用心しているのです。そして雨はついに何時かは降って来るので、出来事が彼らに道理を与えます。そのことを私たちは笑います。しかし、人間の世界で倦むことなく戦争を肯定する者を、私たちは笑えません。人間はそれらのしるしを理解しますし、信じられない位に多くのしるしによって常に変えられるのです。軽蔑のしるしを絶えず受入れたとしても、変わらない人間とは如何なる人間でしょうか。私が脅す方から脅される方へ行くようになれば、決してしるしを笑ってられません。確かに、私の服だけに火とか毒が付いたとしても、決して私を害することは出来ません。あるいは私に似せて作られた小さな人形の心臓を突き刺しても、私を害することは出来ません。しかし、もしも私がそれらのことを知ったなら、それらの行為を憎しみのしるしとして受け取りますし、十分に私を害することが出来ます。そして更に私の裡では、怒りとか恐怖とかその二つが一緒になって掻き立てながら、確かに私を害することになるでしょう。譬え私がそのようなことを少しも信じていなくても、夜の不吉な予言も常に同じ理由によるのです。その上で、信じるとは何で、信じないとは何でしょうか。予言が有害な矢として私の記憶に突き刺さった儘になっていることは、既に意見とか信仰になっていないのでしょうか。誰かが私を殺すであろうと私が予告されて、予告したその人に出会う時、私は自分の感情が少しも変わることなくいられるのでしょうか。私は自分で信じまいとします。しかし眩暈も、如何なる種類の恐怖も、許可など必要としません。眩暈を覚える者は既に倒れると思っていないのでしょうか。ところで或る登山家が難所で落下するだろうと予言されたとしましょう。その難所を通過する時に、その考えが彼に浮かんで来たとしても自然ですが、その考えは彼を害するだけかも知れません。想像力が恐ろしいのは、人間の身体の動きに無関係ではないからです。

私の父は、如何にして友人の一人が確信してコレラで死んだのかを語ってくれました。彼はコレラ患者のシーツの中で眠ることに賭けました。それを実行してコレラになり、殆ど直ぐに亡くなりました。ところが友人たちは——その一人は父でしたが、全てに注意して十分清潔にして置いたのです。でも、表面上はその儘にして置いたのです。表面上だけで、この不幸な男性を殺す

には十分でした。勇気が恐怖を治すと信じた処が、彼の間違いでした。最小の恐怖にも極めて鋭敏なこれらの腹部内の活動については、直接的な如何なる行為も持っていません。そして、細菌がまさしくそこを狙っていたというその点で、私の事例は正しいのです。

私は、魔術師たちが呪いと呼んでいるものの全ての要素をここに集めているように思えます。それらのしるしは、人間がしるしを信じたので、人間を殺したのです。そして、それらのしるしが理解されるや否や、少しばかり何時もしるしを信じます。完全に秘密の呪いは人を害することが出来ないのは明白です。しかしながら、これではやはり言い過ぎです。しるしは情熱を養いますし、情熱はしるしが気に入ります。苛立った人間が如何なる利益も無いのに事物を破壊するのが気に入るのは、生理的メカニズムにより自然であるなら、彼の敵とかそれを思い起こす対象のイメージを破壊するのが気に入るのは、更にそれ以上に自然なことです。この物真似は怒りを倍加し、憎しみを掻き立て、それからかくして人を害するのが直接的特性になります。恐らく長い経験から分かったことは、最も激しい情熱は忘却に落下しますが、しるしによって掻き立てなかったならば、信じられない位に極めて早く落下することです。もしもこれらのしるしが良くある場合のように、有名な冒瀆や犯罪や罰に値することであったなら、もっと適切に言うなら情熱はそこで利益を得ます。何故なら、敢えて言うことは何ものかであるからです。もしも、それらの加担者たちがカエサルを殺すことを誓うなら、カエサルの安全にとっては重大です。もしもカエサルのイメージをすっかり突き刺したなら、更にそれ以上に重大です。何故なら、その様なしるしは記憶の中でより強く刻まれるからです。彼らがこの様にして一種の犯罪に入り込んでいると思っているとすると、事はもう少し重大です。魔法は従って人間の世界では常に席を持っていて、そこでは多少なりとも一つの意見が狙う人を、何時も最後には傷付けて仕舞うことが良く知られています。その上で、そのことが少しも理解されない時とか、理解されるのを期待する如何なる理由も無い時は呪うことが未だ気に入られますし、模倣した動作がなくありません。情熱は、孤独の時でさえも拳を固めます。

空へ拳を示すことも出来ます。海を呪うことも出来ます。これらの動きは自然です。ところで、自然の事物がしるしに敏感であることを真面目に体系的に本当であると熟考して、如何にして信じる事が出来るのでしょうか。私が幼年時代とその観念を理解する処によれば、寧ろ如何にして人間は幾つかの対象がしるしの力から逃れるのを知るに至るのかを問わなければなりません。人間はここで、最も古い職業の一つである動物の調教によって騙されるに違いなかったことに注意して下さい。何故なら、動物たちはしるしを知っていて、それらのしるしによって変えられるからです。農業は農業で多くの条件に依存しているので、重要なことが全て認識されるような経験を伝えることは非常に困難です。私たちは全ての行為の中に、しるしを知っている人間を事物に混合するのであるとつけ加えて言いましょう。もしも私が毛虫とか地虫に関して悪い予感を抱くとしても、それらを殺すのを諦めるか、あるいはゆっくりと殺すかです。祈りは、それを信じる人間によって実際の原因になります。そしてカトリックの豊熟祈願も実際の原因になり得ます。全ての事業には信頼を必要としています。拡大鏡で大きく見えるように、純真な獵師が反対の言葉をうっかり漏らしたために小屋へ直ちに帰ることから、その事例でお分かりのことです。

何も知らないし、何も望んでいない外部の必然性は、良く隠された観念です。私たちを出来事

の中に入れる経験が、私たちを啓蒙するに適していると私は思いません。権力に係わり合ってくるや否や、人は知識が足りなくなります。そして、それは最も親しくて身近な経験を屢々不可解にします。料理を知っている料理人とはどういうものでしょうか。私たちが化学と呼び、直ぐに力を与えてくれるものも、最初は最も空想的な希望を強固にするに違いありませんでした。何故なら、全てを混ぜ合わせたり煮たりしたお陰で、予期しない変形を手にしたからです。そして、待ちきれないでいた手が用心せずにそれらの事実を乱す限り、変形の理由など知らなかったのです。それ故にバルザックのバルタザールの最後は、象徴的であり美しものです。沢山の試みを行い、沢山の魔法使いの本を読んだ後で、何故か知らずに放棄された実験室で金が独りでに作られます。盲目的行動が先頭を歩むこの種の探求は、階段を歩むバルタザールの一步を説明しています。『絶対の探求』のこの処のページは、ブルセ(2)よりも教えられますが、これは些細なことを言っているではありません。

それでは合理的な希望の秩序や手段や源泉は、何処にあるのでしょうか。私たちの行動はそこまで行かないので、空を見詰めなければなりませんでした。プラトンが語っているテッサリア(3)の魔法使いたちも、決して月を降ろしたりしませんでした。それ故に今では迷信は、しるしによって対象を変えて仕舞うどころではなく、反対に高い処の変わることのない最終的なものを、ここにまで素早く移す破目に陥っています。それは単に人間のものでは何も変えられない天体の運動で精神を養っただけでなく、地上の私たちの間に、運命という名の下で一つの秩序という観念を降ろさせました。思索する人はそれ故に空を見詰めながら自らを強固にします。この行為はその儘残りました。(完)

(1) フレーザー(一八五四～一九四一)は、英国の人類学者・民俗学者で、『金枝篇』を著す。

(2) ブルセ(一七七二～一八三八)は医師で、病気の原因は極度の刺激や興奮によると言ったが、一八三二年のコレラ流行により見捨てられた。

(3) テッサリアは、ギリシア中東北部の地方で、西はピンドゥス山脈に限られ、東はエーゲ海に面している。

第四章 人間の世界

間違いを説明するのは良いことです。しかし、間違いは何ものでもありません。魔法で適切な観念を生み出すと、忽ち魔法は最早魔法でなくなり、二百歩の処にある太陽のイマージュは天文学者を騙しませんし、その反対に確信するのと同じです。天文学者は屢々スピノザの対象となっていたこの赤い球体に、霧の多い地方では幸福を見出します。この事物の世界は、現れるべくして現れますし、私たちもそれをついに理解するのです。

これからは別の世界を考察しなければなりません。それは人間の世界であり、私たちの間違いで変わるものです。ここには真の魔法の場所があります。子供は、幸か不幸か自分がしるしを作ることを習慣として依存しているので、子供が獲得するものの全てを、最初はそれらのしるしによって獲得しているのは本当です。ふくれっ面をした子供に、彼にも言うことを聞く部下の子供たちがいることを説明してやりました。すると彼は答えました、「いや、僕は殴ってやる」。それらのしるしは、間違っ使われたのです。それらの言葉は寧ろ怒りのしるしだったのであり、思考のものではありませんでした。しかしながら、正しく取られようと間違っ取られようと、それらのしるしには現実的な効果があります。間違いは事件です。間違っ取られた一言のために、子供っぽい劇がどれ程あったことでしょうか。今は、私たちの間の現代の大人も、同じ様にしるしに殆ど支配されていると言わなければなりません。大部分の人々が良かれ悪しかれ、話し上手であつたり話し下手であつたりして生きています。殆ど全ての人々が、忠告したり説得したりして生きています。それ故に礼儀や教養であるしるしの研究は、殆どが教育と訓育そのものです。そこからプラトンに見る機械的な技術に対する軽蔑が齎されるのです。それは奴隷の仕事です。現代の金物屋の技術は、事物の科学にまで高められています。しかし、長くその儘でいることはない、と認めなければなりません。精神はそこに置かれて止まりますが、直ぐに飛び去り、無知な人に機械を置いて行きます。彼は、昔の陶工が技術の秘訣を習得したことよりも大変に早く、自動車を運転したり電流を配分したりすることを覚えました。もしもそのことに注意したなら、思想が仕事に適用されると仕事を立て直す処ではなくて、計算されていたりハンドルで済むのですから却って仕事を低次のものにするのはお分かりになると思います。手仕事には嘗てない程、精神が無いのです。昔の土木工事人は地面を浄化するために、水と傾斜を調べました。最近の土木工事人は、彼が口を出せない計画に従って下水渠の管を見つけ出して、再び土をかけるだけです。勿論、計画には誰も口を出せないのであると言わなければなりません。計画は労働そのもの、つまり至る所に導いたり、定められた労働を妨げることを行ったりする、労働の中にあります。水道の幹線が通っているのはここであり、あそこではないのですから、最良の図面のことを考えて何になるのでしょうか。その上、命令するのは決して思想家ではなく、寧ろ貪欲な銀行家が土木工事人と同じ様に何時も手っ取り早くやるのです。そこから最も博識ある人々も忽ち奴隷の仕事に追い込まれます。この状況は苦い言葉になって現れ、ご存知の様に博識ある人間は石工やセメント工の巧みさを直ぐに羨んで、瞑想でもある知識の部分を非常に早く捨て去ることになります。同様に自ら満足することも出来ず、作業服を着た人間が大変上手に行うことを半分しか知りませんので、偉大になることも出来ません。これらの指摘は、何時ものように深遠で

神秘的で、結局は魔術的で政治的な技術を迅速に持ち上げます。彼は、自分が人々に対して持っている権威を誇らない人間では決してありません。その点で二つの側面があります。その一つは、現実的な能力ですが、それはその人を喜ばせるものではありません。それは力であり、もしもそれを掘り下げてみても、単なる力でしかありません。そして、力は年月と共にやがて衰えるという尤もな理由により、誰も力を誇ったりしません。三十歳になればボクサーは終わりです。それ故に人を喜ばせるもの、早く円熟した年齢になるために一人ひとりが蓄えるのは、しるしによって可能になるものです。

軍事力は、全ての力の典型であり、隠されているにしろいないにしろ、例外なく全ての野心家たちの目的でもあります。それは力に帰するものですが、多くの人々の力になります。従って、隊長が最も強い訳ではありません。隊長は説得することしか出来ません。ローマ皇帝も自分を守ってくれる武装した赤ら顔の人たちを説得することしか出来ません。武器が決してしるしでないのは本当です。武器は結果の出るものですが、武器の使用はしるしに依存しています。ローマ皇帝が時々暗殺されるのも、他のしるしによるのです。その軍事力は常に仕事、勝利、輸送、補給の背後に隠れています。しかしその運用そのものは、しるしの技術に属しています。事実として軍事力は、奴隷的な産業の手段を軽蔑して、単にしるしを選び、試み、教えることに努力します。しるしが従属を得ていないなら、組織は何の役に立つのでしょうか。従って組織の編成変えは、常にそれらのしるしを実際に立て直すことにあります。大変に苦勞した部隊に休息を与えても、その連隊長は、襟巻をしたりポケットに両手を入れたりすること及びその種のことを禁止することしか注意しませんでした。奥深いものがあります。馬具の点検で私が何時も目を光らせる目的は二つあります。一つ目は皮が輝いていることです。二つ目は余計な考えを持たない馬の服従を得ることです。そこからこれらの馬鹿げた要求が最初は憤慨を誘いますが、その憤慨は場違いであり、全くの不用であることを証明することにもなるのです。私が観察したのは気難しい隊長が、何故か分かりませんが、結局のところ全て良しと見るようになって、そこから過度の喜びを抱くようになったことです。すると仕事から離れて、単に隊長としてのしるしと結び付くだけになります。この技術は、とても理性的には見えない厳格さと、人の良い突然の無関心との混合によって時々完成に近付きますが、それは奇跡を生み出します。そこでは気質が役立ちます。しかし、自分の気質を利用する術を知るのも、奥深い技術なのです。要するに、権力を持つ全ての人々に私が観察したのは、わざとらしい性格があることであり、それが最高の術策なのです。その点を良く見るなら、テュレンヌ元帥と、彼が殺された時に涙を流した兵士たちも人は理解します。一人の観客が理解出来るように、人は理解します。しかし、いずれにしても勝敗の中にいる者にとっては、隊長は説明し難いものです。

ティベリウスも説明し難いものです。彼は何でも出来ると皆に思わせましたが、誰もが自分の力に応じて出来ることを理解させた多くの経験の後のことでした。彼が、心の中を隠した言葉で腹の内まで元老院議員たちを如何に凍らせたか、タキトゥスの本を読めば殆どお分かりになります。それらの術策が影響を及ぼしたのは取分け、ユリウス、カエサルが短刀で刺されたのと同じ場所でその様な術策を考え出して実行するために、大変に冷静な一人の人物の仕業によるものであると私は思います。この指導者が反抗者や逃亡者の十人の中から一人を指名したのは、残りの九人に彼を直ちに殺させるためです。それは歴史上何度もありますが、この指導者は最も強い

訳ではありませんでした。しかし彼は、不死身の人間としての雰囲気と眼差しを持っていました。誰もそれらのしるしに反対しようとしませんでした。事が普通に進んでいると、そんなにも大きな結果は決して求めません。従って、その観点で把握されるのは、自信のある人物が出来るのは何であるかであり、その人物は躊躇したり恐がったりするしるしを決して見せないのです。所謂大変立派な、まさに高尚な人物はそれらのしるしを管理する点で直ぐに見分けられます。そして、それが少ない動作や冷静な顔付きで直ぐに分かることは注目に値します。「あなたは注目されたがっているが、それでは期待されていることと反対のことを何時もおやりなさい」とスタンダールの本の中で、自惚れ屋が殆どそれに近いことを言っていました。ここを通過してこの法則に至り、これから行おうとすることをしるしとして見せることは決してせずに、ついには本当の法則に至り、自分自身のしるしを管理しなければなりません。

若者はこの後で、彼が頼りにしている人は誰かを知りますが、彼は最初から知っていますし、何時も知っていました。そこから私が推測するのは、この人間の世界は魔法使いたちに委ねられているということです。何故なら私たちが生計全体と力を、この世界の周辺から引き出しているのは本当であるからです。その結果、引き抜いて作り上げる術を知る人々は、時刻の主人になるのです。兵士たちが戦争の主人という意味で、彼らは時刻の主人になるのです。それは大したことではありません。ところが、そのこと自体はお伽話の場合と同じ様に魔術的です。しかしながら余りに隠されていますけれども、十分に明白である理由によって困難を示すのは決して所持ではありません。最も貧しい家においてさえも昔から力を越えているのは所有物です。かくして権力者 (puissance) という言葉には、重苦しい曖昧さが残ります。権勢家たちとは説得する人々のことです。全ての人間の事業が同意を前提としているのは本当です。更にそれは、拒否によって引き出す人々や作り上げる人々に、力を与えるものです。しかし、この消極的な力は何も生みません。どんな活動も、直接的な生計の取得を目的にしなければならなくなると、厳格に交換や約束や信用に依存されます。それ故に説得力がある人が全ての人々を導き、そして経済は政治に依存します。イメージで表されるものはお伽話で大きくなりますが、実際の仕事はひげの生えた魔法使いたちを説得したり屈服させたりする仕事と比べて物の数に入りません。全てを遮断し、他の命令によるしか乗り越えられないこれらの命令には、学ぶべきものは一つならず沢山あります。それは直ぐに立ち並んで計り知れない人間の世界において、力を見出す絶対的な抵抗に触れるには殆ど敏感なイメージです。特に、労働者たちの手にある競争の拒絶のことが考えられます。それが考えられるのは、その拒絶が殆ど行使されませんが、何時も明白であるからです。店は閉店になり、市場は延期され、会社の働きは遅くなり、食糧は積み上げられ、お金は隠されて仕舞うこの競争を拒絶することは、余り重要ではないのです。信頼を強制することは出来ません。いや寧ろ、信頼を強制するような様子があると、そのことで信頼をゼロに落として仕舞うのです。沢山のものを手に入れる体刑も、開かれたドア、開かれた財布、買ったり売ったり発明したりすることの容易さを手に入れることは決してありませんが、それらは直ぐにも仕事を進行させるようになることに注意して下さい。例えば、もしも紙幣の価値が下落しても、政治は経済の前では何も出来ないと一般に言われています。この関係は次の点で曖昧です。それは生産する労働と、組織したり説得したりして安心させる労働を余り区別しないからです。そして、後者の

労働は実際に政治的であるので、経済という言葉にある昔からの味にも拘わらず、経済を事物と、事物から持つ認識に依存する限り、買ったり売ったり輸送したりする技術に縮小しなければなりません。例えば蒸気機関車一輛は、一トン当たり又は一キロメートル当たり沢山の石炭が必要です。あるいはトンネル一つにも沢山のハンマーやシャベルが使われます。この組織には、足場の鶴嘴や堤防や急流が説得されることが無いのですから、説得というものもありません。人間はここでは魔法使いではなく、物理学者なのです。その代わりに組織が、人間たちと大胆である認識に依存する限り、どんな組織も政治に送り返さなければなりません。これらの観念がその様に綺麗になって貨幣と信用の危機を前にすると、政治の前で無力なのは逆に経済であると言わなければなりません。換言すると、魔法使いが棒を伸ばす限り決して許されないのです。その魔法使いによって魔法をかけられた人の声も聞いて下さい。何故なら、魔法を妨げるのは情熱です。つまり恐怖ですが、全ての恐怖がやって来るのもそこであるからです。恐怖に対して安心させるために、拳を固めて突撃するのは大変に愚かではないでしょうか。私は思うのですが、人間が理解した最初のこと、又は寧ろ感じた最初のこと、重要なことには決して役立たず、突然に最初の動きを止めて仕舞います。ところで、鶴嘴で掘っている限り、熟考することは決してありません。そして、その人が事物にしか事に当たらなかったなら、思考しないで穴を開けるのはどうやら本当のようです。しかし、人間が人間にとって奇妙な対象であるのは最初のみならず、何時も最も重要で、最も身近なのです。それなのに脅えさせられると重要なことを何もしなくなりましたが、況して殺して仕舞えば尚更そうであるからです。そこには止まって熟考するヘラクレスがおります。その問題をどの方向から捉えようと、最初の思考は同類の思考であったことを常に認めるに至ります。最初は思考のための思考ではなく、思考する能力のための思考なのです。ロゴス(1)は理性の最初の名前でした。(完)

(1) ロゴスは、物事の理を明らかにするものとしての言葉の観念を軸に、その理法自体や理性的能力を表したギリシア哲学の用語。神の言葉の体現者で、子なる神としてのイエス・キリストを表すこともある。

第五章 戦争について

あらゆる善悪が事物からやって来る孤立状態は殆ど理解されません。人間の正常な状態にあり、お望み通りに古くからある社会の状態において、最大の善も、最大の悪も、人間から人間にやって来ます。それには喧嘩、競争、情熱があり、暴政、体刑、復讐があり、迷信、呪い、風聞、狂信があります。これらの悪は少し後退しましたが、戦争は現代にも残っていますし、それは政治に対する経済の従属にとっての最も強烈な事例です。少なくともここでは、この観念に直接的に敵対する決まり文句には勝たなければなりません。お伽話や夢や眠りによるあの長い回り道は、自分自身の恐怖を予見する人間にとって、第一に必要なのは安全であり、かくして最高の組織が軍隊であると先ず思い起こすなら、役に立つかもしれません。あるいは換言するなら、想像上の危険との戦いが、主として人間たちに占められているのです。しかし更に、現実を別な風に考えることも出来ます。

交換は、企業と同じく平和を前提にしています。所有したり企画したりする楽しみは、自己保存に帰着します。従って一人ひとりの裡では、生命を危険に晒したり法を力に従える熱狂とは全く正反対にあります。このことは、最初は誤りであるかの様に見えます。何故なら、大変な苦勞をして富を生産するよりも、獲得された富を手に入れる方が手っ取り早いからです。貧者たちは富者たちに飛びかかるでしょう。すると貧困した国民は、繁栄した国民に飛びかかるでしょう。住民を富の逆へ変化させる出生の法則は、交換の無い財産への移行、そして数の力だけによって富者から貧者へ行われるかも知れない移行を要求するかも知れませんが、それには富者の抵抗が無い訳ではなく、その様にして自然に戦争になるかも知れません。しかしながら、事態はそんなにも単純ではありません。反対に富者の国民が、貧者に飛びかかっているのを多くの場合見られましたし、特に今日でも見られます。しかしこの場合、富者は高慢な力に従って多くの快樂をここで課する訳ではなく、寧ろ交換の権利だけで十分です。それは謂わば富者にとっての独自の道具であることに注意すべきです。かくして私たちは植民地化するのであり、恐らく常にこの様にして植民地にしたのです。そして貧しい国民の抵抗が、この新体制に基づいてもっと一段と貧しいと感じることからやって来るのかどうか、あるいはこの抵抗が主として政治でないのかどうかを理解しなければなりません。モロッコ問題について言わなければならないことは、反逆者たちが自分たち自身の財産と労働を守るのかどうか、あるいはそれらは寧ろ政治家たちが他人の労働や財産に沿って所有していた権力を軍隊によって守っているのかどうかです。私たちが利用するために現実を役立たせる最良の方法には、交換という唯一の働きによって、それを取る全ての人々を豊かにさせる効果があると見做すのを、ここで思い起こさせるのは時宜を得ています。

こうして私たちは主要な観念に連れ戻されますが、それは人が抱く認識に倣って事物に対する行為により、経済が定義されることです。この種の開発は決して戦争ではなく、反対に労働の分業とその条件である交換により、又、港を掘るようにそれが無いと最後には生産的な最小の労働も全く不可能なものである信用により、平和であるのです。ところが人は掘ることのために直接的には生活しないし、無関係なのです。ここで給料とそれが意味する貨幣、貨幣が前提とするもの、企業家の窓口を良く考えて下さい。この窓口は誰もが尊敬すれば少なくとも貴重ですが、

略奪されれば何の価値もありません。ところでもう一度言いますが、交換のこの安全性は政治的なものです。労働と術策と事物の認識によって、人は事物に基づきその安全性を獲得する必要はありません。想像力という魔法によって人間に基づいて獲得しなければなりません。恐慌は政治であり、経済的ではありません。株式取引所に近付いて見てみましょう。株式取引所の暴落は、例えば鉱山が涸渇したとか、落盤が長年の労働を根絶したとかのように、事物が期待を裏切るものである限り、経済的なものです。しかし、ここで恐慌を起こすかも知れないものは少しではなく、騒乱とか不穏な気配からやって来るのであり、ついには人間が人間を恐れることからやって来ます。それ故に株式取引所のこの部分の働きは、政治的です。そして、これは最小のものではありません。もう一度教えてくださいますが、経済は政治に依存しています。

それでは観念を忘れないために、これから中心部分に飛び込んでみましょう。所有は経済的なものです。一年間の労働の後で、それまで存在しなかった港が出来上がります。直ぐに船が何隻もやって来ますが、岩礁に守られていた何処かの砂浜に辛い思いをして近付かなくて済みます。人々は実際に今まで以上に力強くなります。彼らは今まで持っていなかった何かを所有します。ところでこの港は誰のものでしょうか。必ずしも港を使用する船長たちのものではありません。寧ろ港を造った人々、又は港を造った人々を食べさせた人々のものです。問題は別にあります。そして、この別の問題は政治的です。所有権は政治的なものであり、経済的なものではありません。食糧と知ると手に入れる人々の間で、食糧を隠す人は所有していますが、未だ所有権はありません。所有権は公的で、表明され認められたもので、私たちの眠りを守るのと同じ監視組織によって保護されているものです。それは偶然によるのではなく、国税庁の利益のためでもありません。所有権は人々に知られていることです。その本質は、盗みの本質が人目を忍ぶものであり、つまり盗んだ物の所有権が既に自分にあったのは周知のことであると思わせることにあります。泥棒はこの一線を乗り越えない限り所持者であり、所有権者ではありません。如何なる泥棒も時計について「これは私が手にしているので、私の物である」とは言いません。反対に、買ったこととか、遺産で相続したこと、つまり密かに犯した法律そのものを公然と引き合いに出して証明したがりです。

これらの法律は政治的なものです。その意味を理解しようと務めるや否や、これらの法律が安全と秩序を第一に目的と見做していて、正義の土台は各人の領域を公然と定めることであるのが発見されます。その権利が言われます。各人があらゆる部分の財産を持つ権利は、はっきり言い表せないから異議を唱えられるしかないのです。訴訟は生産するのを目的と見做しません。寧ろ紛争を解決することです。訴訟は政治的で、経済的なものではありません。

これは権利を要求する者には容易に認められないことです。発明家は、私がいなければ富の欠片も無いと言います。これは未来の富には本当のことです。実際に彼は争いを拒絶して富を根絶させることも出来ます。今でも彼には能力があります。しかし、彼の発明によって既に生産された富について、彼にはこの種の能力が何もありません。彼独りで守ることは出来ません。そして守る (garder) というこの言葉には、色々な意味があります。従って彼は説得しなければなりません。彼の経済能力は最早何の役にも立ちません。権力とは、腕の力で石切場から取り出されるようなものではありません。この貴重な生産物は人間の世界から、少なくとも説得することによって取り出されるものです。この道を通ることで恐らく、新しい光の下に権利と力の対照を考察

することに達するでしょう。しかし私はここで、決して戦争を限定しようとは思いません。お伽話のこの英知に従って、単に何か他のスフィンクスを説明したいだけです。

もしも戦争が地理学的なものであり経済学的なものであると仮定されるなら、もしも戦争が地球の表面上の生産物の分配と人口の移動としての自然な結果として理解されるなら、力を必要とするか、あるいは忍従するかしなければなりません。しかし、お伽話の知恵は寧ろ政治と情熱を考察するように私たちに促しています。それは、ここで私たちは都合良く思い出しますが、普遍的な神話による外部の必然性とか、若者たちが古くて煩わしくて嫉妬深くて冷酷な力に自然と弄ばれることです。要するに清潔にすること、排水すること、開墾すること、輸送すること、交換すること、生産することは、歌って笑いながら即刻行われます。しかし最大の悪は鬼婆やその他の気難しい怪物たちからやって来ます。制度への激昂、疲れを知らない怒り、恐ろしい堪忍袋、これらは魔法使いであり鬼婆です。そして彼らは、楽しくて健康で正しい企てはどんなものでも妨げていて、年齢によって人間の状態を拡大した様なイマージュを与えています。何故なら、悪人たちの力はお伽話では不可能であるのは本当であるからです。幸福が目に入るや否や、歳を取った男とか女が路上に現れて、棒を伸ばして通行を禁じる勝手な試みを課します。言葉が全てを支配します。譲らなければなりません。ところが想像力で判断される限り、これは幻想的なものです。しかし、親しい理解力が見詰めると、親しいが直接的に克服出来ない一種の障害を認めます。それは古代人がメドゥサ(1)の頭で人を震わせて表したものです。そして、それは気難しい気質、嫉妬、怒りで硬張った人間の顔でしかなく、その顔は尊厳と習慣による眼に見えない結びつきによって若い英雄を全く突然に停止させて仕舞います。何故なら、その人間の顔は無言の視線で多くのことが出来るからです。取分け変化や屈服や憐憫や後悔による望みが、その外観の硬張りによって放棄されねばならない時は多くのことが出来るからです。幼年時代の道に戻り、魔法使いの意志に忍従しなければならないのはこの時です。私はまさに子供にならなければなりません。今日でもなお、あの戦争からは既に大変に遠く離れて私は、唯一のことしか言わないあの不敗の顔のように恐ろしいものは何も見ません。しかし、魔法は碎かなければなりません。

(完)

(1) メドゥサは、ギリシア神話で醜怪な顔をして頭髮は蛇になっていて、その目は人を石化する力があつた。

第六章 小説的なものについて

小説的なものは既にお伽話の中にありますが、包み隠されています。私はそこに一つの神話を見ますが、当惑させられて熟考させられるようなものです。小説的なものの観念は、事物が魔術に従うことには最早閉じ込められません。不思議な話は全てが人間の世界に集められ、反対に容易な話は全てが他の世界へ送られますが、その世界に対して小説的なものは少し軽蔑を閉じ込め過ぎています。それは既にお伽話の観念、つまり幼年時代の観念であり、逆の決定が決して無いならば、外部の障害は僅かなものです。半分正しい観念、いや多分半分以上正しい観念は若い力の感情に応えるものです。その力そのものはこの世界の親類であり、その中に大変に奥深く入り込んだものであり、この世界を変えることがなければ発展することが出来ません。その様なものとしての事物に依存する行為には、子供の遊びの様なものが何か残っています。この小説的なものの判断のために、戦争は一種の狩りと見られることに注意しなければなりません。何故なら、敵は魅力ある力を何も持たず、事物と見られるだけであるからです。そこから一人の人間に屢々見られるのですが、感情の繊細さと好戦的な激烈さという驚くべき対照が齎されます。小説的な人とは、騎兵であるが如き兵士です。まして、事物を変えるために必要な時間のことを考えたりしません。従って大計画を容易く立てますが、事後の行為に備える何か現実的な精神と結び付くことが無いので、何時も失敗します。

子供は先ず小説的です。何故なら、如何に外部の必然性が支配されているか、如何に生活が保証されるか、如何に必要な事物が獲得されるか、これらのことに子供は初めのうちは全く無知であるからです。全てが子供には与えられますので、そのことには無知です。そして更にその後も長い間、子供の重要な仕事は尋ねることにあります。この習慣は長く残り、何時までも同じ様に残っています。人の気に入られたいとか、気に入られれば何とかなると当てにすることが、小説的なものの観念です。作らなくてはならないとか、役に立たなければならぬとする現実的な観念は、長く隠されます。多くの人々に何時も隠されています。人の昇進を特別待遇とか恩恵によって何時も説明してばかりいる歳ばかり取っている子供もいます。その点で外観は何時も少しばかり私たちを騙しています。子供に最も隠されているものとは、外部の必然性が人々を固く締め付けていることです。そして特別待遇を長く続けさせることは、人間の實力ではないことです。ところが、もしもこの必然性が、取分け強情なこの連続や最も控え目な必然性に固有のものであるこの執拗さによって、障害になるのであるなら、友情ということにしましょう。例えば人は眠らなければならず、食べなければなりません。激しい感情で両方とも忘れさせると、信じることは小説的なものです。これは最初は本当ですが、長い間は本当になりません。デカルトは、悲しみが彼を空腹にしたことに注目しました。その様な観念は決して気に入りません。まして必然性との接触は常に波の様に押し寄せて来るので、最後にはその接触が抑え難い動きを人事百般の出来事に伝えていることに気付くのは難しいのです。政治家はその点に賭けますが、政治家たちの数は少ないのです。

恋人たちがいますし、宮廷人の様に阿（おもね）る人々もおります。彼らは同じ人間ですし、老いる術を少しも知りません。気に入らないのを恐れることは彼自身の責苦になるので、気に入

るも気に入らないも何ら問題にしないで冒険に喜んで飛び込むこの点で、彼は英雄です。しかし帰り道で、崇められた勢力の輪の中に一步を踏み出すことの困難が現れて来ます。臆病は英雄にとっては病気です。戦争という事業もその病気を少しも治してくれません。それは子供の頃からの続きです。それは説得したいと思うこと、そして強制する観念などは全く諦めていることから生じます。人間のしるしが脆くて打ち勝ち難い糸をびんと張るのはこの時です。ここに恋愛の当惑が認められます。しかしどんな色っぽさの演技も気に入られることが全てであると想像するのは、どんな政治の中にもあるように、既に全ての礼儀正しさの中にもあります。説得されたいし、強制されたくないという両面から認められると、力は空虚に陥ります。強制されて同意を与える以上に、腹の立つ拒絶はありません。そこからの中途半端な停止は、自分から自分への厳格な礼儀正しさの呼びかけとなります。その様にして崇められる〈神〉の観念が、最初に社会との結び付きを判断していなかったかどうかを理解するのは殆ど不可能です。望まれていないし忍従を受けて探求されることさえも無い強制によって、それらの結び付きの中に入ることは決してありません。アルセスト(1)が相応しいが如くご機嫌を伺って、アルセストが導きたいのは決してセリメヌ(2)ではないことを分かって下さい。セリメヌは何も出来ません。彼女の全てのしるしは、これを理解させているようなものです。彼女は同意しないのを演じます。ところが全ての恋する者たちはそこに来て跪きます。〈神〉の観念は、何も出来ずに抗い難い殆ど全てがこの力のために作られています。〈神〉には私たちが必要です。しかし、私たちには〈神〉が必要でないのを意味するものではありません。〈神〉を打ち破る程に不可能なことも何もありません。

〈神〉は人が望む様に承認しません。どんな信仰心も〈神〉を説得するのを狙いますが、私たちが自分自身を説得し〈神〉の意志を行うこと以外には〈神〉を説得するのに確実な方法はないとの観念と共にあります。しかもその意志が私たちに知らされる前にも行うのです。そのことは如何なる考えも無く、自己を奉納して仕舞うのです。ところで崇拜や犠牲の観念は、私たちの身近な人や人間的な障害から引き出されます。全てのドラマは宗教的です。私が人間的な障害を感じたり努力が少ないと、それを強固にして仕舞うことも感じます。魔法使いの術策も次の様に独り言を言っているのです、「あそこにいる元気で活動的な男は、私の同意を必要としていて、城の角面堡のように同意を奪おうと考えている」。極端に弱くて未だ遊びでしかないこの力は全く媚態です。お分かりの様に『ランジェ公爵夫人』(3)の中で強者のモンリヴォー侯爵は、征服者としてあらゆる態度を取る中で、確かに自分自身も傷付きます。結局のところ彼が手に入れるのは一体の死骸であり、しかもそれは美しい象徴を生み出しています。

そこで一人の男が、自分の力は単に無益であるばかりでなく、自分の計画には直接的に相反するのを知るので、自分の力に恐れていると想像してみてください。それはまさしく魔法ではないでしょうか。私は君主を強制することが出来ても、君主を強制したくありません。それだけの強制でも、君主の善意を永久に奪って仕舞うでしょう。君主の善意とは私には切望する力です。そこから王座の周りのはめ木の床や、どんな社会の中にもあるのが、眼に見えずに乗り越えられないあれらの線です。「私は、あなたがお望みなら、喜んで頬笑んで差し上げますわ」とセリメヌは言います。しかし裏切り者の女性は頬笑まなければなりませんし、そのことがあなたの気に入りますが、それは私が切望している訳では決してないのです。私を見て幸せにならなければなりません。そうでなくてはなりません。しかし、そうでなくてはならないそのことだけでは、そ

うはなり得ません。その様な経験を幾つも持つことによって、ご機嫌を伺う男が自分の欲望さえも疑わしく思い、自分が望んでいることを知るために、しるしを調べます。顔と動作と話の千の様相は屢々、阿（おもね）る男を不決断へ投げ入れますが、シャルマン王子が全くそうであったように、はめ木の床に打ち付けられた儘の自己に対して激昂にさえも投げ入れます。そこから結局は断念、献身が生まれ、辛うじて諸事物の中に翼があるように軽やかに動き回る服従が生まれます。百里もの旅とか、相続をふいにさせられる気違い沙汰をそこに数えます。英雄はこの様な不可思議の中を動き回ります。ある時は容易に素早く、如何なる恐怖も無く、幸福で一杯に動き回り、又ある時は辛うじて眼に見えない帯紐で縛られたように息さえも止めて動き回ります。恋人たちならこの奇妙な状態を知っていますが、特権などは決して持っていません。権力というのは、人がそれを信じるとその様に行使されるのです。そして、この魔法のような権力以外に他の権力はありません。実力は権力ではないことを誰もが知っております。奇跡の場である人間の世界の常態において、その権力を握っているのは決して英雄ではなく、寧ろ術策に富んだ何処かの老いぼれなのです。英雄の全ての希望と怖れは、魔法の輪の中で動揺します。その時の試練は困難であり危険であり、それが許されている行動、いや許されていると言うよりも適切に言うなら、命じられている行動です。解放されて自由な力は、全てがそこへ飛び込みます。人の気に入られない怖れと比べると、その他の怖れは少しも物の数ではないのです。

一般に小説的なものから回復するのは、利益と奉仕に対する現実的な見方によります。そして管理する術、服従する術は、どんなものでも事物を蓄積し変形させる術の上で眠らせて仕舞います。労働者と会社社長は追い求める目的のために、直ぐに小説的なものを否定するに至ります。しかし、これは未だ半分しか真実ではありません。何故なら信頼の必要に応える誠実さの必要は、生活費を稼ぐ必要性よりも古くて強いからです。幼年時代はそのことを良く分からせてくれます。誰も奉仕の交換で始めたりしませんでした。全ての人は崇拜や恐怖や希望によって始めました。従って純粋に経済的な状態は、余りに理屈だらけで根っ子がありません。人間は第一に愛と栄光によって生きます。そして愛と栄光を、お金と奉仕によって手に入れるというのは決して本当ではありません。そこでは弱いしるししか手に入りませんし、誰もがそのことを良く知っています。いや寧ろ、それ以上に良く知っていることがあります。それは、その様な報いを受けるしるしからは、しるしになっている高価な事物を不可能なものにしていることです。そこから吝嗇家は最早自分の富しか愛しませんし、彼が行っているかも知れない無駄遣いのことを考えることもありません。富は決して人を騙さない唯一の所有であると言う時は、何か奥深いことを言っています。しかし、この絶望的な理性は少なくとも晩年に似合うだけです。

人間の世界については一つの優れた見方がありますが、それは生理学的なものです。私は『回想録』の中にこの種の特徴を見出します。私には社会と社交界がなければならなかった、とナポレオンは言いました。ところが新しい秩序を援助出来た女性たちは、若くて何時も流されていました。不動と中心を生み出すあの重さを所有していませんでした。しかし彼女たちも歳を取っただろう、とナポレオンはつけ加えて言います。従って自然は不思議に思わせるものも、忠告が出来ないものも、そっと静かに行ったのでしょう。「彼女たちも歳を取っただろう」という驚くべき言葉から、もっと素早い効果によって他の沢山の考察に戻ることにになります。自然は些細なこ

とが原因で怒りと抵抗が生まれるように、微笑と同意も生まれることが屢々起きます。そして乳母は最も賢く、泣いている乳児を飛び跳ねさせたり、極めて簡単にそっくりひっくり返してやったりします。荷物のように大人をひっくり返すことは出来ません。しかし都合良く椅子とか馬とか僅かな葡萄酒なら示すことが出来ます。如何なる大人よりも毅然と待つて補整する働きを窺うことが出来ます。何故なら疲れと眠りと空腹という生命の法則によって、何時までも持続するものは何も無く、魔法使いも魔法に掛けられた人と同じ位に変わり易く弱いのは確かであるからです。それは、サン・シモンが呼び出すような室内の召使いたちの地位が、常にどんな宮廷においても構わず最も強い理由なのです。しかし彼らはその力を良く理解することもなく使用します。真の政治家たちは多分それ以上大して熟考することがなく、常に失敗から失敗へ大した苦勞をすることも無く動き回るのだと私は思います。彼らは通路を探し、周囲を回り、あの気の狂ったようなジュリアン・ソレルのように変わり易いマチルドから遠く離れて、空腹と退屈と疲労に脅かされているので、馬を無駄に走らせて自分自身を疲労させることはないと思います。しかしながら私の考えでは、信じられない位に小説的なものが多く政治家たちの中に屢々残されています。彼らは自分自身をすり減らす現在の状態をその儘にして置く代わりに、説得したり人の気に入るようになることを余りに沢山考え過ぎます。かくして物事が事物を相手にする限り、それらの物事を半分軽蔑して置き去りにします。それが知恵の一部です。その代わりに恐らく彼らは情熱の中の不変性を余りに信じ過ぎていますし、私たちの恐怖によってしか屢々不変性を持たないものを現実の障害と見做しています。一度ならず恋する男の幾つものしるしが、美しい未亡人セリメヌを自分の役割として呼び起こしていたのですが、それによって彼女は恐らく疲れ切っていました。それに政治にあつては臆病に打ち勝つことで屢々十分です。それらのしるしに決して応えないことが又、別種の魔法なのです。そこから彫像が写して完成した力強い眼には、最早しるしを見ません。何らかの新しいものの周りには、昨日生まれた小説的なものが引き付けられて回っており、常に容易に管理されています。（完）

（1）アルセストは、モリエール（一六二二～一六七三）の戯曲『人間嫌い』（一六六六）の主人公。

（2）セリメヌは、『人間嫌い』の登場人物で、アルセストが恋する若くて美しく浮気でコケテッシュな未亡人。

（3）バルザックの小説『ランジェ公爵夫人』（一八三四）の中で、モンリヴォー侯爵はランジェ公爵夫人の愛を奪うために強い態度に出る。

第七章 隠喩について

この巨大な問題に触れなくてはなりません。私たちはイメージで屢々話をします。寓話は語っていることと別のことを理解させていますが、語っていることと切り離せないものです。外観上の不条理が如何にして私たちを時々理解しているのかを、既に知覚されています。例えば十一時間目だけ働いた労働者が、他の人々と同じ報酬を貰ったり (1)、あるいは季節ではないので無花果が実っていないから無花果の木が呪われたりすることです (2)。この後者の一節は、今では殆ど至る所で訂正されています。「無花果の季節ではなかった」という文章が極めて平板な意味になるように削除されて仕舞っています。しかしながら、一見して不条理な文章がつけ加えられたとしても、やはり想像力の自由な働きと一致する処です。発明は一面では偶発的なもので、イメージにおける合理性は平凡な糧を生むしかないと言わなければなりません。そこを狙う詩人たちは、平凡な詩人です。

『シンデレラ』の中で、ガラス (verre) の靴はリスの皮 (vair) で出来た靴であり、本当は柔らかくて暖かい毛皮であると言って訂正する人々にも又、私は決して賛成しません。私たちには大した得にはなりませんし、文字を変えたなら大変に軽率です。考えることはこれと同じで、適当と思うイメージを形づくることで、決して問題にならないことであると多くの人々が思っています。しかし理性に従った想像力は、想像力でもなければ理性でもありません。それは眠っている習慣です。理解しないことによって始めない人は、それが思考することであることを知らないのです。「真っ直ぐになるな、真っ直ぐではなくて、修正するのだ」とストア派の人々は言いました。もしも逸脱者たちがここに極めて平板な何らかの修正を見出すことが出来たなら、私たちはストア派の教義にも違反することになるでしょう。こういうことは即刻行われます。私は自分のお伽話に戻りますが、そこには確かに理解すべきことが何かあります。そこには変えるべきものかがあることを決して意味しません。幾何学の図形を修正することも十分にあり得るのですが、大いに図面を細くしたり綺麗にしたりしたので、ついに直線が何であるのかを理解できるようになる希望も共にあり得るのです。しかし真の幾何学の精神は、そんな処を全然探しません。そして、四個の骨片を推論するプラトンは、その一つ一つはどれも四ではなく、あるいはソクラテスについてはテオドルスより大きく、テアイテトスより小さいと推論しますが、これらの人物たちによって決して妨げられませんし、これらの骨片によっても妨げられません。四という数字は、これらの骨片においては四つの点と同様に純粹です。そして、想像力があるが儘のものと見做すのは既に正しい精神によるものです。同様に、合理的な愛の中には理解すべきものは何もありません。愛と理性は混合されると腐敗します。それらの例には枚挙に遑がありません。

私は前章で、恋する男に課せられた苦難を簡単に論じました。良くご存知の様に、合理的な苦難にも理解すべきものは何もありません。しかしその反対に、不条理な苦難において私は観念を把握しました。そして、もしも観念を把握するとか、何も全然把握しない様に強く命令されたとするなら、その利益は小さくありません。スタンダールは、友人のランベールの棺のことを考えながら、「諸々のことに涙あり」を引用しています (3)。彼は理解したのでしょうか。しかし、誰が理解していたのでしょうか。この様な鏡に自らを映す時の精神は美しいものです。少なくとも

も断言出来るのは、一つの影に縋り付くには余り自らを見ないことです。教養人にはこれらの解けない問題に溢れていて、常にそれらに立ち戻ります。手品に発見するものと同じ楽しみが少しはあります。一つの説明があることに気付きます。それが決して見付からないと自慢されますが、その次には最早自慢されることはありません。待つことを覚えるのは大したことなのです。無知なのを知るのも大したこと。「君子は何にも自慢しない」とラ・ロシュフコー(4)は言いましたが、この言葉には意味深いものがあります。

お伽話には真実があると私は言いました。でも、これでは十分ではありません。民衆の奥深い知恵は現代の哲学者たちよりも術策的です。哲学者たちは、返事を与える小さな思考機械を屢々作り上げます。お伽話は真実である様子を決して見せません。逸脱者とは逆で、彼は「そんなことは簡単である」と何時も言います。古代の知恵は、習慣に従った想像力でしかない間違っこの理性に対して私たちを警戒させます。人類と同じ位に古い刺激的な手段は、不条理なものを私たちの眼に投げ入れるものです。そして不可能事を大きくしたり倍加したりするのは、このことによって想像力が明確にさせられて、その狂気の役割を呼び戻すことにあるのです。詩の天才が私たちに挑戦として投げつける奇妙な直喩も、これらの役に立っています。しかし、ゆっくりと行きましょう。私は最初から決して文字について議論しません。文字を変えたいとも思わない子供たちの偉大さに、彼らが既に精神を把握しているというのではありません。しかし精神が痩せた獲物でもないことを何時も良く知っています。かくして彼らは不条理を楽しみながらも精神を台無しにはせずに、却って大切にしています。全ての人の師であるプラトンと共に、モンテーニュもパスカルもここで幼年期を遊んでいます。幼年時代は、その中で実感する成長によって大人を見ます。緊密に結び付いた虚構よりも最良の何ものかを期待します。確かに、肉体と同時に想像力を働かせる儘にして置くために、そして同じ法則によって尊厳がありますし、恐らく健康もあります。喜劇役者は純粋な狂気を熟考することで、狂気からも自由に解放されます。その人間は、決して動物になりませんが、又動物でもあるこの分離された肉体の中に若さと君主の自分を認めます。同様に私は、不条理をその様なものとして保っていることに何か皇帝然としたものを見ます。それはつまらない理性を拒否することです。シェークスピアの舞台装置はその様なものです。何故なら、その外観は満足出来るものでなく、その向こう側を見なければならぬからで、そして精神が新しい波紋を呼ぶのは不条理そのものの上ですが、不条理はそこに止まることが出来ないからです。それらのしるしは、私たちをしるしから解放します。その反対に、合理的なしるしの外観によって私たちはしるしを考えるようになり、その習慣が私たちを捕らえます。その様なものは精神の老獪さです。

寓話は、動物たちが話をしたり、一匹の亀が二羽の家鴨の間を顎に棒を銜えて往復する(5)と私たちに信じさせるのを、期待することは決してありません。ライオンと雌山羊、狼と雄山羊、狐とコウノトリという社会も、決して本当らしいものではありません。水に映った月のイマージュがチーズに見做せると思ったのは誰でしょうか。少なくとも月が狐に半分食べられたという表現は、大人たちも子供たちも全ての人々を喜ばせますが、外部の秩序が突然に戻って来て、その確実さをほんの一瞬それらのイマージュに与えます。しかし、いずれにしても私たちがここで二つの手桶と一つの滑車による方法は、事物の厳しい秩序を私たちに呼び起こすためのものでありますけれども、月とか狐とか狼のことを考えるのを思い止まらせるのも事実です。これらの全て

の糸を誰が解くのでしょうか。絶えず虚構はその様なものとして姿を現します。絶えず事物の必然性もその様なものとして姿を現します。渡り鳥は狐の声を聞きます。渡り鳥は嘴にチーズを銜えています。そこに間違いはありません。渡り鳥が大きな嘴を開けると、チーズは落ちます。そこにも又、間違いはありません。それは身体による注意を保つことであり、知覚する身体と夢想する身体による二つの方法によるものです。それ故に、全てのものが集められますが、何も現れません。その術は、良く知られていて知られ過ぎる程の事物をついに言われる時に、喜んで遠ざけて遅らせているようにも見えます。完全に理解するのは最早理解していることではない、と既に古代においても指摘されていました。

例え話は、教訓の無い寓話と同じです。謎も同種のもので、謎は思想の最も古い形式の一つとしても考えなければなりません。「朝は四つ足、昼は二つ、夕方は三つ」(6)。これは遊びに過ぎないのは明らかです。だが、その上更に不条理にも一つの意味を見出す喜びは決して衰えません。精神は先ず、諦める場合に身を置かなければなりません。精神はそこから再生するのです。精神が思想を自覚するのも、この目覚めの地点に基づいています。

これらの全ての表象は直喩を含んでいます。虚栄心を持った人は渡り鳥に似ていますが、それは褒められると幸せな気分になるからで、泥棒から身を守ることを忘れていています。人生は一日に似ていて、幼年時は朝です。月はチーズに似ています。狼は、軍隊と一緒に法律家たちを歩ませる王に似ています。西洋南瓜は豪華な馬車に似ています。意地悪な人は嘔吐を吐く人に似ていて、蟥蛙や蛇を吐き出す鬼婆の精力的なイメージもそこから来ています。この最後の例は、身体が如何にして思想に従って整理されているのかを良く示しています。そして何らかの意味で正しいイメージよりも遙かに価値のあるイメージを人は理解しますし、又何故私たちが最も感動させる描写が常に最も正確なものでないのかを人は理解します。しかし、それらのイメージが狙う処を理解したいと思ったなら、恐らくその厭らしいイメージに対して続け様に全く率直に自らの中で、態度と感情に何らかの変化が生まれるのを何時も狙っています。これが、存在しない対象を存在しているが如く認識させる唯一の方法であると私は思います。正確で如何なる隠喩も無い物語は、対象そのものの効果を少しも生みませんし、詳細であつても何もつけ加えることはないでしょう。しかしそれに反して、私たちの身体の生き生きとした実際の活動は、恐怖の時のように一瞬の夢に相応しいでしょうし、その時人は自分が信じているものを知ることさえなくても、まさに十分に信じているのです。その様にして私たちは夢想から事物へ移行するが如く、隠喩から観念へ移行します。それ故に詩は、絶えず寓話が生まれる如く、私たちの弱い観念に生命を与える謎の遊戯に違いないのです。(完)

(1) マタイ福音書第二〇章一一六節。天の国のたとえとして、朝五時から夕方五時まで、葡萄園で働く者も、十一時間目の夕方五時まで一時間働く者も、同じ一デナリオンの報酬であることを指すものと思われる。

(2) マタイ福音書第二章一八一節。イエスが空腹のため無花果の木に近寄った処葉しかなく、実を食べる者が何時までも居ないように呪ったため枯れたという。

(3) 『アンリ・ブリュラール伝』第一四章に書かれているが、引用のラテン語はウエルギリウス『アエネーイス』第一卷四六三行にあり、トロイア戦争を偲んで洩らす言葉である。

(4) ラ・ロシュフコー(一六一三～八〇)は、作家・モラリストで『箴言と考察』にて利己主義と虚栄心が人

間の多くの行為を支配することを表した。

(5) ラ・フォンテーヌ(一六二一～九五)の『寓話詩』(一六六八～一六九四)のことを言っていると思われる。

(6) 「朝は四つ足、昼は二つ、夕方は三つ」とは、ギリシア神話で怪物スフィンクスは旅人たちに謎をかけて解けない時は食っていたが、オイディプスが〈人生〉と解いた。幼児の時は足と手の四本で這い、大人の時は二本足で歩き、老人は杖をついて三本足になる。

アラン
思想と年齢（上）

<http://p.booklog.jp/book/112050>

著者：アラン（翻訳：高村 昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/112050>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト